

二〇二五年(平成二十七年)三月

# 東京阿部家資料

文書編(5)

福山市教育委員会

# 目次

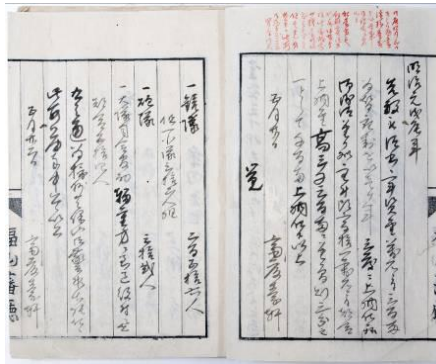
凡例		
丁卯戊辰西京之公用方書類ノ内書抜	1	
御代替之御礼並初而御目見被仰付候御式	23	
阿部主計頭版籍奉還書(控)	25	
東京日記	26	
明治新制官等家格禄制	30	
明治三年庚午從正月十二月迄 御願御同等	46	
御家内職員表	58	
明治初年福山藩官位相当表(人名入)	60	
福山藩支配北海道東部		
開拓地奉還についての上申書	61	
北地一件 全	64	
蝦地之事	69	
御一新後楮幣製造之始末	78	
御一新後製造楮幣消却方再評歎願並勘定書	81	
元福山県私造楮幣之儀ニ付添書	84	
書面元福山県私造楮幣消却方之儀		
申出之通聞届	87	
旧福山藩士履歴書	88	

## 凡 例

- 1 本書は、「東京阿部家資料」文書編(5)として、旧福山藩主阿部家(東京阿部家)から福山市に寄贈いただいた資料の内、幕末から明治時代初頭にかけての資料十六点を収録した。
- 2 文書の収録については、原則として原文の形にそうようにつとめたが、読者の便を図るため、つぎの点に留意した。
  - 1 漢字の字体については、原則として新字体を用いた。異字・あて字等はつとめて通行の表記に統一したが、そのまま用いたものもある。
  - 2 変体仮名は、原則として、ひらがなに改めたが、つぎの助詞は小活字で示した。  
而(て)・江(え)・者(は)・与(と)・茂(も)・  
尔(に)・而已(のみ)
  - 3 合字は通常の仮名に改めたが、ㇿ(より)はそのまますした。
  - 4 読点(、)あるいは並列点(・)を付けた。
  - 5 平出・欠字は省略した。
- 3 誤字や当て字は原則原文のまま記し、行間に( )で適切な文字を記した。脱字と思われる場合には(○脱力)、不要な文字や意味の通らない文字は(ママ)と記した。
- 4 判読できなかった文字は□とし、欠損している文字は■とした。判読に疑念が残る文字は行間に(カ)、あるいは(○カ)とした。
- 5 朱筆・貼紙などは「」で括り、右肩に「朱筆」などと記した。
- 6 本書の解説は、つぎの東京阿部家文書解説グループのメンバーに協力いただいた。  
小林浩二 佐藤恭子 藤井和枝 藤井和枝  
藤井直子  
石井清彦 太田玲子(故) 折田恵子 正田勝幸  
林多恵子 山本明子
- 7 本書の編集は、福山市教育委員会文化課 まなびの館ローズコム 歴史資料室の 鐘尾光世・小林英行・桑田直美があたった。

# 丁卯戊辰

## 西京之公用方書類ノ内書抜



京都に在勤した公用方（元の留守居役）の慶応三年（一八六七年）末から翌明治元年までの書類の書抜、および明治元年の東京在勤の執政の日記の書抜。広島藩主浅野長訓の甥正桓（元次郎）が福山藩主阿部正方の養子となり家督を相続したことや、福山藩兵の伊予松山への出征、西宮・大坂天保山警衛、箱館出兵などを記録している。

### 「貼紙」

「此帳之内御不用之分も可被為在候得とも書抜之俣差上候、此外御届類可有御座与存候得とも、両京之公用方書類之内紛失有之、此上取調方甚六ツケ敷御座候

一 勅答御建白書等ハ多く御封書ニ而御差出候ニ付、表向筆記不相成候間吟方差問候」

慶応三丁卯十二月十九日、三与御役所へ左之通差出

御一新御変革ニ付而者迅速上京可仕段更ニ被仰出候旨、尤兼而去十一月中登京之儀御沙汰も御座候故旁速ニ上京可仕、若所劳御座候ハ、為名代重職之者差出候様御達之趣奉敬承、早々在所へ申越候様可仕候、以上

明治元戊辰年

先般被仰出候軍資金万石ニ付三百両、為替座封を以壹ヶ年三度ニ上納仕候様御沙汰御座候処、主計頭高拾一万石ニ付都合上納金高三千三百両ニ御座候間、則三分之一として千百両上納仕候、以上

五月廿日

斎藤素軒

〔欄外朱書〕

「戊辰四月三日、左之御届書浜野章吉を以弁事御役所江差  
出ス

私養方之叔母実從弟女故伊勢守娘、此度越前少將養女仕  
度旨申聞候間任其意差遣申候、此段御届申上候、已上

四月三日 御名

覚

一銃隊 二百五拾六人

但、一小隊三拾二人組

一砲隊 三拾式人

一大隊司令官初輜重方ニ至迄役付之者都合五拾四人

右之通為撰州天保山御警衛出張仕候、此段御届奉申上候、

以上

五月廿二日

高拾壹万石

齋藤素軒

阿部元次郎家来

士分

若林右門

同

竹島猪八郎

戦卒 岩本弥太郎

黒瀬富三郎

同 豊田理助

田中銑太郎

同 北山彦一

岩瀬 素

同 桑田円助

村田金之助

同 村上卯三郎

中木武一郎

同 村 政太

天野高一郎

同 山野幸吉

高橋延太郎

同 中山達次郎

中木操之助

同 佐藤留八

松浦権三郎

同 楯岡太一郎

井坂十次郎

同 中村善吉郎

高橋伴次郎

同 河村又次郎

村田多吉

同 薄田信太郎

松本利三郎

同 池田玖右衛門

山下増左衛門

同 中山宗三郎

松尾寅蔵

同 河村定吉

右之者共為徵兵差出申候、尤名面之内佐藤留八・田中銑太郎ハ途中病氣ニ付大坂表へ逗留療養仕居候間、全快次第速ニ差出候心得ニ御座候、此段御届申上候、以上

七月廿一日

齋藤素軒

軍務御役所

阿部元次郎家来

佐藤留八

田中銑太郎

右之者共先般徵兵差出候節、病氣ニ付大坂江滞留療養相加居候処、全快ニ付着仕候間差出申候、此段御届申上候、已上

八月九日

齋藤素軒

軍務御役所

私召連滞京罷在候兵隊河東教場へ差出操兵為致、於私も折々罷出指揮いたし度奉存候、此段奉願候、以上

九月二日

阿部元次郎

軍務御中

福山  
大野  
右藩今般出兵ニ付兵庫方渡海船差廻シ可申、仍而壹兩人充兵庫江罷下、同処軍務官諸事可伺出事

九月

此度兵隊五百人至急箱館府江出張被仰付難有仕合ニ奉存候、早速在所表江飛脚差立、来ル十八九日迄ニ者領海鞆津江人数揃置候様申遣候間、定而御軍艦着岸相待居可申儀与奉存候、右御軍艦着岸遅速ニ寄り士氣屈撓も難計候間、自然御手間取之御模様ニ候得者、至急実戦之場江御差向被成下度奉願候、已上

九月九日

阿部元次郎

此度箱館府江出兵被仰付候ニ付而ハ、向後同所出張先軍資金之儀、当年中二万兩丈御差凶次第御当官へ可相納候間、右員数高之内出張先ニ而願出候得者御渡被成下度奉願上候、僻遠之土地別而便宜ニ乏敷候ニ付、甚自由ケ間敷恐入候得とも、御憐察之上御聞濟之程偏ニ奉懇願候、以上

御名家来

九月十日 青木勘右衛門

軍務御役所

届申上候、以上

十月十三日 鈴木常三郎

軍務御役所

福山

〔欄外〕

〔御付札

願之趣難聞届事〕

此度箱館府江出兵被仰付ニ付而者、大隊御簾一流并御袖印

五百七拾枚御渡被成下候様奉願候、已上

九月十日 鈴木常三郎

軍務御役所

候

今般箱館辺ニ於而旧幕府脱走及暴動ニ付、奥州海岸筋不慮之儀も難計候条、尚更嚴重可相心得旨更ニ申達候事  
十一月 軍務官

先月廿四日弊藩兵隊箱館表ニおゐて戦争之次第、口々出張之隊長并指揮役共方申越候来状、節略左之通書綴御届申上

此度津軽為応援出兵被仰付候、就而者領海靱津港江人数揃

置可申旨御沙汰御座候処、右ハ昨十八日迄ニ者同所へ相揃

置候段在所表方申越候、此段御届申上候、以上

九月十九日 鈴木常三郎

軍務御役所

一弊藩兵隊箱館府出張被仰付、十月廿日同地着艦直ニ清水谷殿御本陣江御届仕候処徳川脱艦之模様、不慮事ニ付諸隊士氣相緩不申様御沙汰有之、同夜驚ノ木村江三艘砂原江老艘碇泊上陸、追々寄来候様子ニ付、茅部嶺江鷺ノ木村南要險ノ地津軽藩并府兵繰出相成、大野藩・弊藩兵隊

先般被仰付候津軽表為応援兵隊并輜重方ニ至迄五百十五人、

去ル二日領海靱港(り脱力)よ乗船出帆仕候旨在所表方申越、此段御

ハ亀田五稜郭ヲ根拠とし、本府砲台及裏手海岸尻沢部八頭村等江繰出、其余ハ臨時之御指揮ヲ以海岸応援可致旨

御達有之、即刻夫々手配仕候処驚之木賊四拾人計既ニ茅部嶺ヲ踰麓村へ屯集、追々人数相加リ廿二日ニ至リ同所江向ヒ候、津輕兵隊未々手合不致趣ニ付弊藩戮力速ニ進撃候様御達有之、尻沢村江繰出候一小隊青木勘右衛門引卒途中有川村出在之松前一小隊ト同行、廿三日暁大野村迄到着候処前夜津輕藩一旦進撃、不利ニして何レへ歟引揚賊勢益盛官軍甚手薄ニ付援兵相願候処、大野藩二小隊并弊砲隊半隊夜半到着、諸勢管轄無之ニ付七重口惣轄堀真五郎殿申合、指揮可致旨弊藩大隊長岡田伊右衛門江被仰付即夜発足、廿四日暁大野村江相達候処此辺惣而平野防戦之小楯も無之、賊ハ茅嶺之要地ニ抛リ我陣拳動ヲ瞰下シ甚不便之地勢ニ付、篤与軍議ヲ決し進撃可致与存居候処、賊既ニ一ノ渡リニ相迫候旨斥候方報知有之、不取敢本道江松前一小隊・大野二小隊・并弊藩半隊・砲台半隊繰出夫々手配いたし候内、忽チ村口江寄セ来リ即及参戦候処間道へ相備置候、弊藩半小隊頗苦戦之趣ニ付本道之半隊繰廻し戦争ニ及候内、賊ハ裏手江廻リ前後ヲ絶チ

双方応援之道ヲ失ヒ、二字計も奮戦いたし候得とも多勢之賊終ニ難決ニ付、不得止諸藩一同クネヘツト申処迄昼十二字頃引揚申候、間道之弊藩一小隊ハ孤軍与相成別而難戦仕候、此砌堀真五郎殿引卒七重口江進候弊藩二小隊同処到着否賊徒相迫候ニ、民家ヲ楯として烈敷横撃三四丁追躡候処、賊林樹間方遽ニ突出端兵接戦いたし候由、真五郎殿令ニ而五稜郭迄引揚申候、此時討留之賊徒有之候得とも苦戦之場合其俣差置申候、クネヘツヘハ津輕藩其已前方道路之橋ヲ落シ防戦之備へ有之候ニ付、必死場所与夫々手配本府江応援頼候処、同夜五稜郭迄引揚候様御沙汰候ニ付後殿隊相残置追々繰下候内、尚又進使ヲ以知府事殿始不残箱館江御引取相成候間、早々同所江引取候様との儀ニ付廿五日朝九字頃本府江引取候処、同日払暁清水谷殿始青森江御引揚ニ付、本府砲隊等江相備居候弊藩人数も扈從渡航いたし居候間、口々より引取来候兵隊も右船江乗組青森港江渡海仕候、当日大野村七重口戦争死傷左之通御座候

覚

薄手

半隊司令士

菊池隼之助

不行届戦地江差置申候

松本喜多治

斥候

深入仕候付死生相分不申

斎藤勘兵衛隊

深手之処戦争後死

河合要之助

深入仕候付死生相分不申

赤松岩次郎

天 宇門隊

深手亀田病院江為引取置

天 宇門隊

梅田小七郎

深手亀田病院江為引取置

中島忠三郎

真野祿三

候処、引揚之御沙汰至急ニ而

斎藤勘兵衛

内藤金三郎

夷艦江乗後レ不得止其

若林忠治

岩井辰之丞隊

俟差置申候

島山吉七郎

戦死

柳沢友之助

深手之処廿六日於青森港死ス

輕部半左衛門隊

斎藤勘兵衛

深手之処廿六日於青森港死ス

河村秀三郎

橋高助五郎

深手之処廿六日於青森港死ス

輕部半左衛門隊

天野利忠太

深手之処廿六日於青森港死ス

小山金三郎

吉川膳左衛門

深手之処廿六日於青森港死ス

斎藤勘兵衛隊

天 宇門隊

深手

小島芳太

深手之処苦戦之場ニ而扶助方

深手

水沼小一郎

天 宇門隊

石崎慶吾

輕部半左衛門隊

土肥忠藏

齋藤勘兵衛隊

浜野源之助

渋谷広吉

齋藤勘兵衛隊

田頭英之助

介抱人として亀田病院江

付置候処、御引払之御沙汰

至急ニ付夷艦江乗後レ不得止其候差置申候、以上

十二月二日

齋藤淳太郎

戊辰

西京之公用方書類ノ内書抜

一左之通弁事御役所江差出

先般貢士差出候様御達御座候間早速在所表江申遣候処、

小藩可然人物ニも乏敷候旁取調遅延ニ相成御期限ニ相過

候段、奉恐入候得とも暫時御猶与被成下候様奉願上候、

以上

御名内

四月五日

内藤角右衛門

一左之通弁事御役所江差出ス

主計頭養方曾祖父

不爭齋

故伊勢守妻  
主計頭

養方祖母

不爭齋娘  
同人

養方大叔母

越前少将殿養女  
同人

養方叔母実従弟女

右五人并夫々附属家来之者とも未夕在府罷在候、既ニ先般

御一新之折柄ニ付一同帰国仕候様相運置候得とも、未夕帰

着無之猶今般御沙汰之趣に付而ハ迅速引払候様申遣候間、

引払之上ハ早速可申上候得とも此段先御届奉申上候、已上

御名内

斎藤素軒

四月十三日

一左之通弁事役所江相伺候事

主計頭為名代早春已来在京罷在候、然ル処先般在京之

諸侯御暇被仰出候ニ付而ハ、名代之儀者其御沙汰ニ準シ

進退仕候而も可然儀ニ御座候や、尤重臣之者耆人ハ始終

相詰候儀ニ御座候哉、此段宜御指揮被成下候様奉願上候、

以上

御名内

内藤角右衛門

閏四月三日

閏四月五日

御付札 伺之通名代用向有之候節ハ始終詰合、重臣ニ而可然候事

一左之通弁事御役所江差出

先般御一新之折柄ニ付江戸表ニ罷在候者とも一同帰国仕

候様相運置、其後尚御沙汰之趣に候ニ付而ハ急速引払之

儀申遣候処、其砌主計頭養方曾祖父不爭斎不快ニ而押而

も出立難相成、少々も快方も相成候得者速ニ帰国仕候様

申越候、然ル処尚又不快同篇ニ而急速出立難相成追々帰

国延引仕奉恐入候間、此段御届奉申上候置候様申越候、

以上

御名内

斎藤素軒

閏四月十七日

弁事

御役所

一左之通弁事御役所江差出

主計頭儀從一昨寅年中脚氣症相発手足痙攣其上肝鬱仕候

ニ付、種々療養仕候得とも追々疲労相募本服可仕体無御

座、然ル処主計頭当年式拾壹歳罷成未夕男子無御座其上

他ニ血統之者も無之候ニ付、若此上病氣差重候得ハ浅野

安芸守実弟同姓氏部三男元次郎儀急養子奉願上度申付越

候ニ付、願書差出候而も不苦儀ニ可有御座候哉、此段奉

伺御内慮候様主計頭申付越候ニ付此段奉伺候、以上

阿

閏四月十九日

齋藤素軒

弁事御役所

一俗名寛三郎、実名正寧  
右之通御座候、主計頭嫡子庶子とも無御座候、此段御届  
奉申上候、以上

閏四月廿日

御付  
札 急養子ニ而も養子相続引続家督相続ト二段ニ奉願へき事

一左之通致御届候処伊知地大膳落手之事

閏四月廿二日

齋藤素軒

一主計頭

弁事御役所

一文久元年辛酉六月十七日家督相続

一左之通三郎右衛門弁事御役所江罷出土御門大炊様を以差

一実不爭齋三男、兄故伊与守正教養子<sup>(子)</sup>

出候処、御同人様被及御披露候事

一文久元年辛酉十二月十六日任叙従五位下主計頭

私儀従一昨寅年中脚氣之症相発手足瘳變其上肝鬱仕候

一元治元年甲子五月五日従四位下推任

ニ付、種々療養相加候へとも追々疲勞相募本復可仕体

一俗名錦次郎、実名正方

無御座候、然ル処当年式十壹歳罷成未男子無御座他ニ

一不爭齋

血統之者も無御座に付、浅野安芸守実弟同姓氏部三男

一天保七年丙申十二月廿五日隱居、号不爭齋

元次郎儀急養子仕度奉願候、以上

一文政九年丙戌八月廿四日家督相続

慶応四年戊辰五月七日 阿部主計頭印

一故備中守正精次男、兄正粹病氣退身ニ付正精嫡子

弁事御中

一文政七年甲申十二月十六日任叙従五位下对馬守

一夕七時過御用御座候ニ付、重臣之者罷出候様弁事御役所

一文政十三年庚寅三月五日伊与守<sup>(子)</sup>転任

方御達候ニ付三郎右衛門罷出候処、権弁事大原左馬頭様

方左之通書付御渡相成候事

阿部主計頭

其方儀病氣之処実子無之候ニ付、浅野安芸守弟式部三

男元次郎致養子旨願之通被聞食届候事

慶応四年戊辰五月十日

太政官印 御朱印

一左之通會計官江差出候処、追而御沙汰相成候旨坪田栄藏

被申聞候事

先般被仰出候金札御製造ニ付、石高二応シ拝借被仰付

候趣御沙汰御座候処、主計頭高拾壹万石ニ付十壹万兩

拝借被仰付被成下候様奉願候、以上

五月十七日

齋藤素軒

一左之通弁事御役所江及御届

一男女

都合百二十拾人

右者主計頭家来江戸詰之者ニ御座候処、此度同所引払去

十日在所福山表へ帰着仕候旨申越候、此段奉申上候、以

上

五月廿二日

齋藤素軒

弁事御役所

一左之通吉田水山弁事御役所へ罷出及御届

私儀病氣之処実子無之候ニ付、浅野安芸守実弟同姓氏部

三男元次郎儀急養子奉願候処、願之趣被為聞食届難有仕

合奉存候、右御受御礼旁以国使者申上候、以上

五月十七日

阿部主計頭

弁事御中

私養子元次郎儀今日在所福山表へ引移申候、此段御届申

上候、以上

五月廿日

阿部主計頭

弁事御中

一左之通三郎右衛門弁事御役所江罷出差出

高拾壹万石

在所 備後国福山

私儀従一昨寅年中脚氣之症相発手足痙攣其上肝鬱仕候付、

種々療養相加候へとも追々疲労相募食量相減不輕容体罷

成申候、若相果候得者養子元次郎江家督無相違被下置永

為奉報御高恩度奉願候、以上

五月廿八日

阿部元次郎

慶応四年戊辰五月廿三日 阿部主計頭印

弁事御中

弁事御中

覚

別紙之通家督願書書判可仕之処大病手揮候ニ付印判計相

家老

用候、此段御聞置可被成下候、已上

下官三郎右衛門

五月廿三日

阿部主計頭

用人

弁事御中

斎藤素軒

五月廿八日非藏人口江重臣之者罷出候様御呼出ニ付三郎右

留守居之場

衛門罷出候処、昨日之御願書江左之通御付札有之候事

浜野章吉

御願之通被為

五辻弾正大弼様より

同添役之場

御札付

御達

小島敬蔵

一左之通及御居

右家来江詰越申付置京地御用向相勤候様為仕度奉存候、

養父主計頭於在所表病氣之処養生不相叶今卯刻死去仕候、

此段御届申上候、以上

仍之左之通定式之忌服請之申候

五月廿八日

阿部元次郎

一忌五十日

五月廿八日迄

弁事御中

一服十三ヶ月

七月十日迄  
辰五月より  
巳五月迄

一左之伺書差出

右之通御座候、已上

先般貢士差出候様御沙汰ニ御座候処小藩可然人物にも乏

敷ク旁取調延引相成候ニ付、先達而暫時御猶与<sup>(金)</sup>之儀相願置候処、此節取調相付候ニ付立申付置候内、今度主計頭死去いたし忌中差出候も返而奉恐入候儀ニ付、忌明後速ニ為相登之心得ニ罷在候得とも如何仕候而可然儀ニ御座候や、此段奉伺候様元次郎申付越候、已上

六月二日

齋藤素軒

弁事御中

同四日左之通御付札有之

忌中貢士差出候儀者不苦候事

摂州天保山御警衛之儀者父主計頭へ被仰付置候処、此度

死去致し候得とも矢張元次郎儀同様御警衛相勤候心得ニ

罷在候、付而者忌中ニ而も其俣家来共差出置候而可然儀

ニ御座候哉、此段奉伺候様元次郎申付越候、已上

六月二日

齋藤素軒

弁事御役所

同四日左之通御付札有之

可為伺之通事

先般旧幕府方受封之判物早々差出候様御沙汰御座候ニ付、早速取調差出候手筈ニ仕置候内今度主計頭死去いたし、忌中差出候儀奉恐入候間忌明後速ニ差出候心得ニ候へ共、如何仕候而可然儀御座候や、此段奉伺候様元次郎申付越候、以上

六月二日

齋藤素軒

弁事御役所

同四日左之通御付札有之

忌明後ニ而可然候事

一左之通會計官江差出

今般金札御製造ニ付弊藩石高二応シ拾壹万両拝借之儀去

月十七日相願置候処、当節勝手向必死逼迫仕候儀ニ付、

何卒満数ニ無之聊ニ而も早々拝借被仰付被下候得者重畳

難有仕合奉存候、此段奉願上候様元次郎申付越候、已上

六月二日

齋藤素軒

故主計頭末期跡式御次江被下置候様奉願候所、願之通家名無相違被下置候旨被聞食届置難有仕合奉存候、仍之家

督相統被仰付被成下候様奉願上候、已上

阿部元次郎家来

慶応四年戊辰六月二日

斎藤素軒印

下宮三郎右衛門印

弁事御役所

私近親阿部主計頭儀末期跡式元次郎へ被下置候様奉願候  
処、願之通被聞食届置難有仕合奉存候、右ニ付何卒元次  
郎儀江家督相統被仰付被成下候得者於私儀重疊難有仕合  
奉存候、此段奉願候、以上

慶応四年戊辰六月二日

土屋相模守

実名花押

弁事御中

一 左之通御届所差出

私曾孫主計頭於在所表病氣之処養生不相叶去月廿八日卯  
上刻死去仕候処、実三男ニ御座候ニ付重キ方定式之忌服  
左之通受之申候

一 忌十日

五月廿八日迄  
六月七日迄

一 服三十日

五月廿八日迄  
六月廿七日迄

右之通御座候、此段御届申上候、以上

六月五日

阿部不爭斎

弁事御役所

一 六月五日弁事御役所方御呼出ニ而左之通大原左馬頭様被  
仰渡候事 但、土屋様御留守居一緒ニ被仰渡候事  
阿部元次郎儀家督相統可被仰出筈之処、忌中ニ付難被及  
御沙汰忌明早々上京之上可被仰出候間、左様相心得可申  
との事

一 左之通森治平江差出事

当藩之儀者從來勝手向不如意御座候処、往年広島表出立  
以來引続多端之入費相嵩ミ支持仕兼候ニ付、山野開発新  
涯築立等江取掛リ、往々国産出来候得者救助之道も可有  
御座与存候処、未夕成功之期ニ不至内右等莫大之入費に  
付尚又一層困窮相迫リ、実以拳国杼軸俱尽之姿ニ罷成申

候、苟も藩屏之任ニ相備リ居期迄燃眉窮迫之場ニ立至リ候も、畢竟平生不取締故之儀与蒙御咎候而も申訳無之深く奉恐入候得とも、最早諸方金借之手段も尽果上訴ヲ君父之外無之と苦心罷在候折柄、過日金札拝借之儀被仰出誠ニ回生反魂之御仁慈と只管企望仕居候処ニ御座候、右拝借之緩急遅速ニより候てハ其御恩之軽重莫大之相違も御座候間、次第順序も可被為在候儀とハ奉存候得とも、何卒右辺情実御汲分被成下、且ハ当今大坂表出張先并御当地屋敷地買取等種々無抛入費差向弁済之目途無之候段御憐察被成下、急速拝借被仰付被成下候へハ重畳難有仕合奉存候、此段奉歎願候様元次郎申付越候、已上

六月十一日

齋藤素軒

一 左之伺書弁事御役所江差出

貢士差出候儀先達而取調中ニ付御猶予相願置、其後人名取極早速差出候心得ニ罷在候処、故主計頭死去当分恐入候ニ付差扣候方ニ御座候哉奉伺上候処、忌中ニ而も差出候而不苦候旨御差図ニ付早速在所表へ申遣置候間、最早

出立仕居候事与奉存候得とも未夕着不仕候、就而ハ御下向対策之儀去ル五日期限之処、何条ニ不申出候儀ニ御座候、全体早春被仰出候砌国論ニ代り候人物差出候様御沙汰ニ候へ者、過日改而被仰出候御趣意与少も御相違之廉者無之候得共、御下向之件々何レ重大之儀ニ付、仮令国論大体之方向ハ不誤者ニ御座候ても、兵法・經濟・制度・文章・金穀出納・交際等兼学全備、座言起行・通才達人与申程之人物ニ無御座候て者逐件疏答仕候茂不存寄事ニ候、独り国論之見据有之而已にてハ難差出と懸念仕候、乍去右様兼備遂達之人材弊藩おゐてハ絶而無御座、是迄迎も最前御沙汰之趣申含奉命上京仕候様申付候得とも、不堪其撰訳を以在々辞退仕申立尤にも相聞候付、無抛御猶予奉願上候儀ニ御座候処、今般改而被仰出之趣拝承仕候得とも、即今貢士申付居候者者勿論在邑之者一同一層懸念仕、其俟上京差留尚得与御趣意柄奉伺候上、今一応熟慮進退仕候様可申越与奉存候、彼是遅延罷成候段奉恐入候得とも、実以小藩人物ニ乏敷、此撰拳ニ当リ御

下問次第期限ヲ不過建言策対仕候ハ、不容易儀与、深く心配之余リ断而貢拳仕兼候、無拋情実御聞届置被成下候、尚如何仕候而可然儀ニ御座候哉、御指図被成下候様奉願上候、已上

六月十四日

下宮三郎右衛門

弁事御役所

一左之通御届書差出

覚

阿部美作守重臣

阿部勘解由

同留守居

海上久助

徒士六人

中間二人

右ハ同姓美作守御不審之筋有之家来共入京被差止事尔付、昨十四日一同御当地引払帰国仕候旨同家用達之物方申出候、此段御届申上候、已上

六月十五日

斎藤素軒

弁事御役所

覚

一小銃

銃挺

但附属之品共

右者同姓美作守御不審之儀有之家来共入京差止られ深く奉恐入候ニ付、此迄持越居候所持之銃器相納度趣ニ而当家へ預ケ置出立仕候間、納方如何仕候而可然儀ニ御座候や、此段奉同上候、已上

六月十五日

右同人

弁事御役所

覚

故伊勢守妻

元次郎

養方曾祖母

越前少将殿養女

故伊勢守

娘

外ニ家来之者共

男女

都合六百三拾五人

右ハ此迄江戸表ニ罷在候処今度同所引払、去十二日在所  
福山表へ帰着仕候旨申越候、此段御届奉申上候、已上

六月十八日

右同人

弁事御役所

一 左之通會計官江差出

先達而勝手向必至逼迫之国情申上急速金札拝借之儀奉歎  
願置候処、其後尚又在所表方申越候儀者、先頃連旬之大  
雨ニ付領内所々河水暴漲・道堤破損・田畑皆無相成候場  
所々々取調候処、其損耗不一方右破損普請等之儀者今日  
之場合迎も手廻り兼候上、当秋収納欠為大事ニ而弥当惑  
罷在候仕合尔付、兼而申出仕置候金札拝借之儀蒙御憐察  
急々御下渡被成下候様可奉再願之旨、元次郎申付越候、  
以上

六月十八日

齋藤素軒

一 左之通弁事御役所江指出ス

王政御一新ニ付而者速ニ天下御平定万民安堵ニ至リ、諸

民其所ヲ得候様御煩慮被為在候ニ付、此折柄天下浮浪之

者有之様ニ而者不相濟、自然今日之形勢ヲ窺猥ニ士民と

も本国ヲ脱走等いたし候儀、堅被差留候旨過被仰出候処、  
(目脱々)

此迄領内にて盗ミ悪業相働候者共其俣領内差置れ候而者

良民之害にも相成候尔付、其罪軽重ニより領分払・他参

等申付居候得共、今般脱走等御指留之被仰出御座候付而

者、此迄之通領分払・他参等之取計も難相成儀ニ御座候

や、此段奉同上候様元次郎申付越候、已上

六月十八日

齋藤素軒

弁事御役所

明治元戌辰年

東京之執政日記之内書抜

明治元戌辰年二月

一 四条様御儀四国・中国討手御惣督被為蒙仰去月姫路城迄

御進ミ相成候ニ付、同廿五日於同所衛士殿被奉伺御機嫌

候処、別紙之通御達相成候ニ付被及御受、御在所表方同

廿八日予州江向ヶ御人数御差出相成候、尤応援之儀者三  
小隊大砲三門御差出相成候事

福山

右予州松山為追討土州・長州差向候ニ付、為応援早々  
出兵可致候事

正月廿五日

惣督

一 去月廿五日錦之御旗尾ノ道江御着船相成候ニ付、為御出  
迎十郎左衛門殿被罷越芸藩家老蒲生司書江出会被致候処、  
別紙書面差出御国論相尋候付可及御答旨被相答置候処、  
同廿六日御旗御入城ニ相成候ニ付頼母殿司書江出会別紙  
之通被差出候処、委細安芸守江可申聞旨挨拶有之、万端  
無滞相濟翌廿七日御旗并芸州人数共不残出立相成候事  
備後・備中所置方別紙之通蒙朝命候ニ付、家来蒲生司  
書江申合先手人数差出候間、御国論委細可被仰聞与存  
候

安芸少将江

徳川慶喜反逆妄举有之候上ハ、備中国河辺以西備後国福

山初此迄幕領惣而征伐没収可有之被仰出候、宜軍威を嚴  
ニシ速ニ可奏追討之功之旨御沙汰候事

正月十一日

追而両国中幕領之儀者勿論幕吏卒之領地ニ至リ惣而取調  
言上可有之、且人民鎮撫偏ニ可服王化様可致所置候事

安芸少将江

征討被仰付候付、御紋附御旗二流下賜候事

御答

今般備後国備中御所置方御別紙之通被蒙朝命候ニ付、御  
家来蒲生司書江御申合御先手御人数被差出候間、国論委  
細可申上旨承知仕候、方今王政御復古ニ付而者朝命を一  
途ニ遵奉仕、皇国之御為速ニ御復古之聖業被為立候様尽  
力仕度志願ニ御座候、此段宜御執達可被下候、以上  
年号月日  
御名 御印

三月七日

安芸少将殿

一去月七日於京都表太政官代方左之通御達

御名

右備後国元代官鍋田三郎右衛門支配地、今般御領与相成候間取締被仰付候、即今形勢ニ付民心方向を失ヒ、多端之苦情訴書御治定之御所置者追而御達可有之候得とも、差向人民安業貢米等之儀無滞相運候様執計、早々太政官代江可申出事

但、取締被仰付候御領分之内年貢殘穀并高辻帳早々取調、内国会計両裁判所江可差出候事

一 御領所用向為取扱役人、両三人在京候様可致候事

一 馱々乱妨強盜人民掠し困苦ニ迫り候場所も有之由相聞候間、早々人数差出取鎮候様被仰付候

一 左之通於京都表御達相成候段、御在所表方申来候事

御名

今般御親征行幸被為遊候ニ付大坂辺御警衛被仰付候、就而者彼地御行在中其方儀上坂可致駈引御沙汰之事

二月

御名

今般御親征行幸被遊候、就而者大坂要衝之口々御警衛

向別而肝要之事ニ付、其藩之儀追而受持被仰付候条、早々彼地出張御差回数次第嚴重可致守衛御沙汰之事

二月

三月廿九日

一去ル八日於京都表太政官代方左之通御達有之事

御名

右今般御親征行幸ニ就而者撰海御警衛向肝要之事ニ候条、其藩之儀西之宮表嚴重可相守旨御沙汰候事

三月

七月十七日

一 当四月廿二日於大坂表御行在所御軍局より左之通御達

御名

其藩人数を以西之宮警衛被仰付置候処、被免天保山台場守衛可致旨御沙汰之事

四月廿二日

八月十四日

一左之御届所太政官江差出

去月廿三日於京都表千種少將様方同所詰重臣之者御呼出候ニ付罷出候処、別紙御書付之通被仰渡候旨申越候ニ付、

包相添此段御届申上候、已上

御名家来

八月十四日

渡辺三太平

養父主計頭跡式之儀願之通被聞食、家督無相違其方江被

下置候旨被仰出候事

慶応四年辰六月

御朱印

九月八日

一去月十八日京都出之御飛脚并同晦日福山出之御飛脚着候

処殿様御船中益御機嫌、去月十七日未刻京都表へ御着被

遊御膳等御快被召上、同廿三日御参内天機御同被遊御家

督之御礼無御滞被為濟、同廿四日御仮建江御勤番被遊候

様被為蒙仰候段申来候事

十月六日

一去月廿三日福山出之御飛脚着之所、於京都表去月十三日

越前少將様御養女殿様江御縁組被遊度御願書御指出之処、

翌十四日御願之通被為蒙仰候段申来候事

一於京都表別紙之通被為蒙仰候段申来候事

福山

其藩兵隊五百人至急箱館府江出張可致之旨申達候事

但、艦之儀者御都合可被成下候間、早々手合軈津ニ而

待合可有之候事

九月

福山

其藩兵隊箱館府出張申付候ニ付天保山警衛被免候事

九月

福山

其藩兵隊箱館府江出張申付置候処津輕藩江応援申付候事

但、時宜次第箱館府江も出張之心得可有之候事

九月

津輕

其藩大義相弁勤勞候条神妙之至ニ候、方今孤立之姿実ニ

不容易事候ニ付不取敢別紙之藩へ応援申付候間、速ニ成  
功有之候様精々尽力可致旨申達候事

九月

福山 五百人

宇和島 五百人

大野 五百人

伊達鑄之助 百人

福山

此度太田黒亥和太箱館出張被仰付候、付而ハ其藩同所出  
張之兵隊諸事差図可受様申達候事

九月

十月十八日

一去月廿九日左之通被為蒙仰候事

御名

其方儀上京後未夕日数も不相立、殊ニ御東幸御留守中ニ  
而御警衛被仰付置候へ共、先達已来多人数諸方出立ニ付  
別段之思召を以御暇被下候事

九月

行政官

一十月廿四日大総督府方重臣之者御呼出ニ付伊木市左衛門  
罷出候処、左之御書付ニ通御渡相成事

阿部主計頭

阿部美作・阿部養浩事、屢官軍ニ抗シ剩在所を脱し士民  
をシテ方向を失ハシメ、竟ニ降伏スト雖不容易之所業ニ  
候条、於当地先ツ其方江御預ケ謹慎被申付候事

十月

阿部美作

阿部養浩

其方事屢官軍ニ抗シ剩在所を脱し士民ヲシテ方向ヲ失ハ  
シメ、竟ニ降伏スト雖不容易之所業ニ候条、先ツ於当地  
阿部主計頭江御預ケ謹慎申付候事

十月

一十一月廿七日大総督府方御呼出ニ而左之通御達有之  
阿部美作・阿部養浩今日千住宿江着候ニ付、唯今方為迎  
守衛人数差出候様、尤御使者出役ニ付承り合候様

一十二月七日弁事御役所方御呼出ニ付伊木市左衛門罷出候

阿部正静

処、嚴谷迂也殿方左之御書付御渡ニ相成

阿部正静

奥羽諸賊ト同盟王師ニ抗衡遂ニ棄城遁走、其後伏罪候得とも天下之大典ニ於テ其罪難差置、仍之城地被召上於東京謹慎被仰付候事

奥羽諸賊ト同盟王師ニ抗衡遂ニ棄城遁走、其後伏罪候得とも天下之大典ニ於テ其罪難差置、仍之城地被召上於東京謹慎可被在旨被仰渡之趣申達候処恐入奉畏、且亦叛逆首謀之者早々取調可申上旨申達候処奉畏候、右御受申上候、以上

但、叛逆首謀之者早々取調可申出事

御名家来

御朱印  
行政官

十二月

伊木市左衛門

阿部正静

阿部正静

今般城地被召上於東京謹慎被仰付候処、出格至仁之思食ヲ以家名被立下、更ニ六万石下賜棚倉城預ケ可被仰付候間、血脈之者相撰早々可願出事

〔欄外〕

〔同月十一日 御付札 可為伺之通候事〕

御朱印  
行政官  
御名

今般城地被召上於東京謹慎被仰付候処、出格至仁之思食を以家名被立下、更ニ六万石下賜棚倉城御預ケ可被仰付候間、血脈之者相撰早々可奉願旨申達候処難有奉畏候、右御受奉申上候、已上

別紙之通被仰出候間此段可相達事

十二月

行政官

一前条ニ付翌九日左之御受書官掌安藤権兵衛を以差出

十二月

右同人

一十二月十日左之伺書行政官江罷出官掌小室初弥殿を以差  
出ス

同姓阿部正静儀出格之思召ヲ以家名被立下候ニ付、血脈  
之者相撰可奉願旨被仰出候間、主計頭方可相願之処当時  
在邑中ニ付右判等ニも差問候間、同姓駿河守在府中之儀  
に御座候間同人方奉願候而も不苦義ニ御座候や、此段奉  
候、已上

十二月十日

青山与一郎

弁事御役所

一十二月十日弁事御役所方御呼出ニ付青山与一郎罷出候所、  
弁事土方忠一郎殿御達之旨ニ而官掌小室新弥方左之通被  
申聞候事

阿部正静元領地村高等之儀、委細取吟早々可相届旨

一十二月十二日佐原能吉儀弁事御役所方御呼出ニ付青山与  
一郎附添罷出候処、左之御書付御渡相成候事

其方家来佐原能吉儀開所三等教授申付候間、此段相達  
候事

十二月

行政官

阿部元次郎

# 十二月三日御代替之御礼并初而御目見被仰付候御式



明治元年（一八六八年）七月、広島藩主浅野長訓の甥正桓が福山藩阿部家の家督を相続し十代藩主となり、同年十二月、延引されていた代替の礼および初御目見の式が行われた。その際の席格に応じた作法が事細かに記されている。

一 御奥御上段江被遊御着座、作右衛門目録御小姓頭持出、

同二之御間御敷居内ニ置之披き罷在、作右衛門同三之御

間壹疊目江罷出御小姓頭披露、畢而御意被遊目録披露人

引之御盃被成下頂戴之、脱劍相進御取肴被下置元之席江

着、此節御小姓頭シタミ土器持出取計奉返盃、御取肴を

御三方之俣奉差上之差脇を差退去、三郎右衛門目録御小

姓頭持出同三之御間壹疊目ニ置之披き罷在、三郎右衛門

二疊目江罷出披露、畢而御意被遊目録披露人引之御盃被

成下頂戴之、脱劍相進御取肴被下置元之席江着、此節御

小姓頭シタミ土器持出取計奉返盃脇差を差退去、角右衛

門御礼之次第右同様相濟、秋厓始衛士迄三疊目江罷出御

礼之次第右同様、尤御返盃不申上相濟退去、畢而御取肴

三方相引候事

但、作右衛門始疊目有之候処、御手狭ニ付本文之通り

一 御手熨斗三方持出執政忝人出座、御小姓頭披露席江罷出

二等席格式人宛目録持参、同参之御間下下二疊目ニ置之、

同壹疊目ニ而御礼申上披露、畢而御意被遊目録御近習引

之御盃御銚子之渡り江御載被成下頂戴之、脱劍相進御手熨斗被下置元之席江着、脇差を差御土器を持退去、御小姓頭退座御酌之者相引、數之御土器三方・御手熨斗三方・御シタミ引之執政退去

一 右相濟執政の面々御屋形江罷出候事

一 御屋形御手筈宜候段入御聽、御略供ニ而被為入候事

一 表向繰入御手筈宜候上大御書院御上段江御着座被遊、執政共出座、大監察忝人披露席江罷出、三等席格四人、四

等席方五等格迄五人、六等席格六人、七等席格七人、

銘々目錄持參御礼席江罷出披露相濟退去、目錄御小姓組引之、執政之者より相濟候段申上候事

但、目錄銘々持出候先格之処、此度御略ニ付夫々等席

上之者持出居置、等替目之節御小姓組相引候事

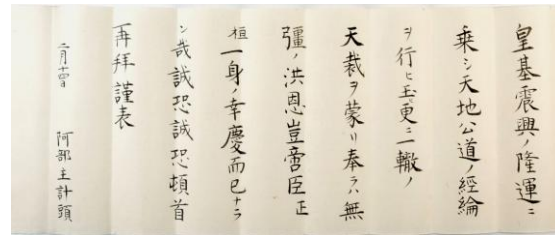
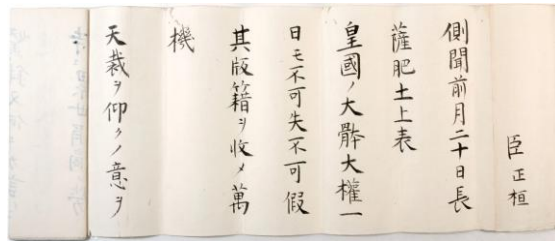
一 右引続初而御目見被仰付候付、当主者六等席嫡子者七等

席江罷出披露、畢而退去執政御取合無之、披露役相引執

政より相濟候段申上、夫方於御小書院八等席格之者共御礼被為請候付、銘々目錄前ニ差置並居執政出座、大御書

院三之御間次江被遊御立座御案内之大監察披露、畢而御休息之御間江被為入候事、以上

# 版籍奉還書(控)



明治二年(一八六九年)一月二十日、薩摩・長州・土佐・肥前の四藩主は連署して版籍奉還を上奏。福山藩でも阿部家十代藩主正桓が同年二月二十五日に版籍奉還建白書を奉呈し、六月に聴許されて福山藩知事を拝命する。本資料は奉呈に先立ち作成された版籍奉還建白書案であり正式なものよりはより簡潔に改訂されている。

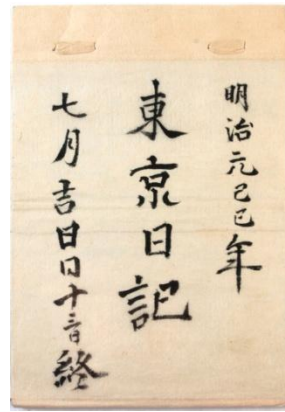
臣正桓

側聞前月二十日長薩肥土上表、皇國ノ大体大權一日モ不可失不可仮其版籍ヲ收メ万機天裁ヲ仰クノ意ヲ表スト、臣正桓庸劣鷲鈍又何ヲカ言ハン、特ニ累世涓滴ノ勞ナク徒ニ中藩ノ末ニ連リ、昨秋奉願旧封新ニ下賜ノ天恩ヲ蒙ルト雖トモ、尺土寸壤敢テ擅制スヘキノ理ナキヲ以テ含忍恐懼斯夕不安、且ラク先行言従ノ古訓ニ由リ勅誓ヲ奉戴シ、政教一致兵民同力復古ノ旨趣ヲ体シ聊黽勉以テ今日ニ至ル、四藩献言既已ニ早ク其意ヲ表セリ、伏テ願クハ臣正桓亦同シク版図ヲ奉リ皇基震興ノ隆運ニ乗シ天地公道ノ經綸ヲ行ヒ玉ヒ、更ニ一轍ノ天裁ヲ蒙リ奉ラハ無疆ノ洪恩、豈啻臣正桓一身ノ幸慶而已ナラン哉、誠恐誠恐頓首再拜謹表

二月十四日

阿部主計頭

# 東京日記



福山藩阿部家十代藩主正桓の日記。表紙には「明治元己巳年」とあるが、内容からすると明治二年（一八六九年）四月から七月までの記録である。正桓は明治元年七月に正式に家督を相続し、二年三月の諸侯東京参集の命によって上京、六月には福山藩知事に任命され、七月に帰藩の命を受けて、八月福山に戻っている。綴じられたものと別紙下書きを相互補完して翻刻した。

四月廿日

一朝五時供揃にて狩衣着用揃次第出邸、騎馬為伺天機参内、候所之御間へ休、夫ヨリ弁事御謁有之、大広間自分口上を弁事御口上有之、畢而帰宅九時過

四月廿四日

一昨日之依召六時供揃申付鍬直垂着六半時出宅参内、大広間をいて拝童顔其時御下問御下ニ相成時御意有之、御下問を輔被読上ル、大広間御二之間て御下問御下ニ被成、畢而帰宅九ツ時前

四月廿六日

一五時供揃申付野服着用次第出宅、乗切ニ而上野寛永寺中芳松院様御廟所江参拜、夫方浅草清水寺江罷越麻上下着替芳松院様御位牌江拜礼、畢而野服着用夫方西福精舎へ罷越、又々麻上下着替夫方浅草辺へ至リ、帰宅九時也

五月朔日

一五時供揃申付衣冠着用揃次第出宅駕籠、当日御祝儀して候所間参内名面したゝめ、畢而退散九時

一午後八時供揃申付平服ニ而石原邸へ罷越謁、大君帰宅七

半時過

五月三日

一五時供揃申付着狩衣次第出宅、為伺天機参内、候所間へ相  
つめ名面したゝめ、夫方弁事御謁有之、畢而帰宅九時

五月五日

一端午為御祝儀四半時早支度供揃申付着衣冠揃次第出宅、参

内例之通り、畢而帰宅九時〔別紙では八時過〕

御下問

セつく

トうはん

例之通り

五月六日

一九時頃方浅草并両国辺江微行

五月七日

一五半時供揃申付麻半襦着揃次第出宅、徳川新三位中将殿へ長  
州備前殿江相越、夫方芝増上寺中英隆院様御廟所へ参拜、  
帰途浅野近江守殿へ相越、帰宅八時過

五月九日

一五時供揃申付騎馬堀切辺江遠乗相越、帰宅八時前

五月十四日

一五時供揃申付鍔直垂着揃次第出宅、為伺天機参朝例之通り、  
畢而帰宅致ス、十二字也〔別紙では九時〕

五月十六日

一九時頃方染井并団子坂辺迄微行

五月十八日

一七時半時供揃申付鍔直垂着六時出門、銃練為拝見御本丸江参

朝、仏えイ蘭、畢而帰宅九時前

但、今日拝見ニ付御菓子頂戴被仰付候事

五月廿二日

一提灯引供揃申付鍔直垂着揃次第出宅、昨日被仰出之通り御下

問有之ニ付参朝例之通り、畢而帰宅九時過

五月廿三日

一四時頃方微行、昌平橋方乗船、深川木場中井新右衛門宅  
へ相越、役人供へ酒等遣し、畢而帰宅夜五時過

五月二十五日

一 提灯引供揃申付鍔直垂着揃次第出宅、御下向之儀有之ニ付参朝例の通り、畢而帰宅九半時過

五月廿七日

一 九時供揃申付揃次第出宅、西福寺江参拜、帰宅八半時頃

五月廿八日

一 八時頃方日本橋辺迄微行、帰宅七時過

六月朔日

一 四時供揃申付衣冠着用四半時出宅、当日為御祝儀参朝例之通り、畢而帰宅九半時

六月七日

一 五時供揃申付鍔直垂着揃次第出宅、為天機参朝例之通り、畢而帰宅四半時過

六月十一日

一 八時過方王子辺へ微行、帰宅六時

六月十三日

一 石原御住居へ罷越例之通り

六月十四日

一 九時供揃申付揃次第出宅、霞関浅野近江守殿邸へ被招罷越程々饗応有之、畢而歸邸夜五時頃

六月十七日

一 六半時供揃申付揃次第出宅麻半襦着、西福寺へ参詣帰宅四時

ハからず六月十八日

奉書到来ニ付五時供揃申付直垂着参内、大広間ニ而藩知事被仰付候、畢而帰宅八時前 但シカイキン有之

六月十九日

一 五時供揃申付揃次第出宅、伺天機ニ参内例之通り、畢而帰宅九半時頃

六月廿一日

一 八時頃方市谷八幡社へ微行、帰宅七時過

六月廿二日

一 五時供揃申付揃次第出宅、西福寺江参詣、帰宅四時過

一 八時頃方芝辺江乗切して罷越、帰宅七半時頃

ハからず六月廿四日

一 提灯引供揃申付直垂着参内、帰宅八時前

六月廿八日

一 暁七時供揃申付揃次第出宅衣冠着、神祇官へ出仕天子様御

出節御門内出ムカふ、夫方神社へ相つめ御シキすませら

れ候節天子様御出御拜被遊、其座御出被遊候後藩知事二

人ツ、拜致、夫より天子御帰リ之節御門内出■、畢而帰

宅九時

七月朔日

一 五時供揃申付揃次第出宅、為伺天機参内例之通り、畢而

帰宅四半過

七月三日

一 八時供揃申付石原御住居へ為伺罷出、帰宅七半時過

七月四日

一 奉書到来ニ付四時供揃申付四半時出宅直垂着参内、ナニノ間

ニて帰藩被仰付其弁事御口上有之、天子様御意有之候略、

夫方引トリスグニナニノ御間ニて天盃頂戴致、夫ヨリ大

広間ニて弁事御口上有之略、畢而退出五字前、帰宅七半

時前

七月五日

一 暁七時供揃申付乗切ニ而横浜へ罷越、帰宅夜八時過

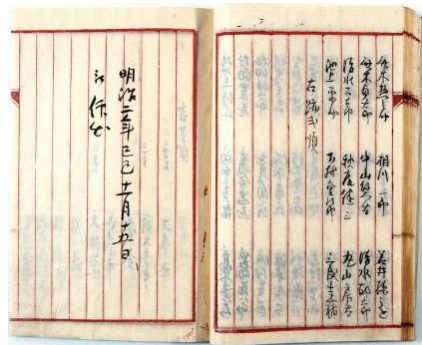
七月八日

一 暁七時供揃申付揃次第出宅、品川沖甲鉄艦為一覽罷越帰

宅七半時過

終

# 明治新制官等家格禄制



「明治二年己巳 御新制写 十月七日」・「明治二年己巳 御藩中家格帳 十月」・「明治二年己巳 御藩中家格区别帳 十一月」・「明治二年己巳十一月十五日被仰出」・「明治二年己巳 十一月十八日被仰出」の六部から成っている。  
冒頭の省略した部分には、旧来の家禄・階級・職制等を廃して家格を土族・卒族に定め、職階は一く十等官の官等を設けて能力に応じて選任することなどが書かれている。藩政を統括する政事堂から示達されたものである。

明治二年己巳 御新制写 十月七日  
「初めの十六頁分の内容は『広島県議会史 明治編上巻』第一章 第三節 第四項 小見出し「御改革帳」の中に翻刻掲載されているため略す」

## 覚

- 一 権少参事ヲ被置伝事官ヲ被廢候事
- 一 掌史ヲ被置秘書記ヲ被廢候事
- 一 典式ヲ祭典司ニ被改候事
- 一 祠寺役ヲ庶務与被改候事
- 一 裁判役ヲ聴訟与改メ、鞠獄役ヲ推按与被改候事
- 一 用度・建築・通商・倉廩・山林諸役ヲ合セテ会計局庶務与改メ、山林役生産役与改メ、局中分科之事
- 一 弾薬司軍事方ヲ合セテ軍事局庶務与改、器械輜重分科被仰付候事
- 一 簿司・会計役ヲ合セテ会計局主簿与被改候事
- 一 学校書記ヲ庶務与改、雑務方ヲ筆生与被改候事
- 一 監察役ヲ聞察与被改候事

- 一 巡察方諸局・小姓ヲ合セテ政事堂承務方与改メ、小姓ヲ内務、巡察方ヲ外務与被仰出候事
  - 一 典式書役ヲ筆生与改候事
  - 一 郡令方・市令方ヲ合セテ民事局承務方与改、別ニ筆生ヲ置、郡令方・民事方・市令方ヲ市事方与改、一局分科之事
  - 一 吟味書類認役・捕賊方白洲同心ヲ合セテ刑法司承務与改メ、認役ヲ筆生、捕賊方ヲ捕縛方、白洲同心ヲ快手与改メ、一局分科之事
  - 一 用度方・建築方・倉廩方・通商方ヲ合セテ会計局承務与改メ、別ニ筆生ヲ置、且山林方ヲ生産方与改而局中分科之事
  - 一 医院議院之筆生者院中ニ而可勤事
  - 一 六人廻リヲ巡察方与被改候事
  - 一 鋳術・銃練・数学・書学・馬術・水練諸教授ハ何れ茂小教授与可被心得事
  - 一 公用人并助役ヲ掌吏・權掌吏之内方可相勤事
- 
- 一 料材役者被廢建築之内ニ而可心得候事
  - 一 内監察以後被廢候事
  - 一 郡方割元ハ被廢帳元ハ民事方ニ而可心得事
  - 一 大坂倉廩ハ會計主簿より、同書役者承務方出役之事
  - 一 御買方者被廢候事
  - 一 料材方ハ被廢建築方之内ニ而可心得候事
  - 一 内檢察方被廢以後檢察方心得之事
  - 一 一祠寺檢察被廢以後筆生ニ而心得之事
- 
- |        |         |         |
|--------|---------|---------|
| 明治二年己巳 | 御藩中家禄帳  | 十月      |
| 二千石    | 一三百三拾四俵 | 千七百石    |
| 二千石    | 一三百三拾四俵 | 一三百三俵   |
| 千五百    | 一貳百七拾八俵 | 千四百石    |
| 千石     | 一貳百拾七俵  | 一貳百六拾六俵 |
| 千石     | 一貳百拾七俵  | 八百石     |
| 七百石    | 一百八拾俵   | 一百九拾貳俵  |
| 七百石    | 一百八拾俵   | 六百石     |
| 五百五拾石  | 一百六拾壹俵  | 一百六拾八俵  |
| 五百五拾石  | 一百六拾壹俵  | 五百石     |
| 百人扶持   | 一百五拾俵   | 一百五拾五俵  |
| 百人扶持   | 一百五拾俵   | 四百石     |
| 三百五十五石 | 一百三拾七俵  | 一百四拾三俵  |
| 三百五十五石 | 一百三拾七俵  | 三百貳十石   |
| 三百五十五石 | 一百三拾七俵  | 一百三拾三俵  |

三百石	一百三十一俵	納式百俵 貳拾人扶持	一百三拾俵	十六石三人扶持	一六拾六俵	六拾俵	一六拾四俵
貳百七拾石	一百貳拾七俵	貳百五拾石	一百貳拾五俵	五拾石	一六拾壹俵	十四石三人扶持	一六拾俵
貳百三十石	一百貳拾貳俵	貳百貳十石	一百貳拾一俵	五拾五俵	一五拾九俵	十人扶持	一五拾六俵
貳百石	一百拾八俵	四拾人扶持	一百拾六俵	五拾俵	一五拾四俵	九人扶持	一五拾壹俵
百七拾石	一百拾五俵	百六拾石	一百拾四俵	十二石三人扶持	一四拾九俵	拾石三人扶持	一四拾八俵
百七拾五	一百拾貳俵	百四拾石	一百拾壹俵	拾貳石二人扶持	一四拾六俵	十石九斗二人扶持	一四拾五俵
百五拾石	一百拾貳俵	百五拾五	一百拾壹俵	八人扶持	一四拾六俵	八石七斗三人扶持	一四拾五俵
百三拾石	一百拾俵	百貳拾石	一百九俵	二十四俵三人扶持	一四拾四俵	八石三人扶持	一四拾三俵
百三拾俵	一百八俵	貳拾四石	一百七俵	貳拾貳俵三人扶持	一四拾貳俵	貳拾一俵三人扶持	一四拾壹俵
貳拾五人扶持	一百六俵	貳拾一人扶持	一百三俵	七人扶持 貳拾五俵貳人扶持	二十俵三人扶持	貳拾一俵三人扶持	一四拾俵
貳拾貳人扶持	一百六俵	百五俵	一九拾八俵	八石九斗貳人扶持	七石一斗三人扶持	貳拾一俵三人扶持	一四拾俵
貳拾人扶持	一九拾九俵	九拾八俵	一九拾三俵	拾九俵三人扶持	一三拾九俵	貳十四俵貳人扶持	一三拾八俵
百俵	一九拾五俵	九拾俵	一八拾八俵	二十三俵貳人扶持	一三拾七俵	拾八俵三人扶持	一三拾六俵
拾八人扶持	一九拾一俵	八拾五俵	一八拾四俵	十七俵三人扶持	一三拾七俵	二十二俵貳人扶持	一三拾六俵
拾七人扶持	一八拾七俵	七十八俵	一七拾九俵	貳十一俵貳人扶持	十五俵三人扶持	七石貳斗貳人扶持	一三拾五俵
八拾俵	一八拾俵	拾五人扶持	一七拾五俵	五石三人扶持	貳拾俵貳人扶持	拾九俵貳人扶持	一三拾三俵
七拾五俵	一七拾六俵	拾四人扶持	一七拾五俵	六石九斗二人扶持	一三拾四俵	拾七俵貳人扶持	一三拾三俵
七拾俵	一七拾貳俵	十三人扶持	一七拾俵	十八俵貳人扶持	一三拾貳俵	六石四斗貳人扶持	一三拾壹俵
七拾人扶持	一七拾貳俵	六俵貳人扶持	一六拾七俵	十六俵貳人扶持	一三拾俵	五石八斗貳人扶持	一三拾壹俵
六十五俵	一六拾九俵	拾貳人扶持	一六拾七俵	十五俵貳人扶持	一三拾俵	拾三俵貳人扶持	一三拾七俵
				四石貳斗二人扶持	一貳拾六俵	八俵二人扶持	一貳拾壹俵
				六俵貳人扶持	一貳拾俵	五俵貳人扶持	一拾八俵

明治二年己巳 御藩中家格区别帳 十月

上士 佐原作右衛門 下宮三郎右衛門 内藤角右衛門

右家督順

岡田 創 三浦 岬 山岡迂柄

吉田六郎 高滝左仲 新居頼母

関半左衛門 三浦素西 近藤函書

岩野鎮也 堀兵左衛門 青木源蔵

天 宇門 町野精蔵 中山左右馬

三浦团弥 伊藤左門 岩原 衛

安藤行樹

右家督順

中士

齋藤甚右衛門 関藤文兵衛 川田矢久茂

太田三蔵 吉田弥五左衛門 佐原熊之介

渡辺三太平 森戸金橘 小倉与八郎

伊木市左衛門 森島伊丹 百々忠右衛門

高山郷作 阿部小重郎 武田平之助

大森鏗爾 河村九十九 渡辺造酒丞

本間六左衛門 日野弥左衛門 永峯蔵人

下宮理左衛門 内藤治左衛門 内藤弥門

下宮熊太郎 関 兵蔵 余田文右衛門

近藤浪江 井上孫一 大平郁之助

茂上有助 中西武雄 小高舎人

中根 鏗 三迫八平 高木兵助

内藤九郎右衛門 吉田津守 山村大蔵

太田宇門 座間平治 磯 競

須田多熊 山口平馬 石黒六郎

三好一学 萩原六介 渡辺弦蔵

三浦作之介 柴崎弾之丞 藤江三弥介

右家督順

菅谷 昇 高久平三郎 石谷衛守

高田段右衛門 高野平左衛門 滝 武介

倉井忍男 江木繁太郎 三冨甚左衛門

下宮治右衛門	篠崎平右衛門	宮寺保記	藤田全左衛門	青山与一郎	内藤常也
一色 久	海塩又蔵	高東応助	手嶋七兵衛	今川三平	森 養竹
島 多宮	堀口助十郎	斎藤治部右衛門	久保田彦右衛門	田中 湊	横山 光
鈴木佐五右衛門	大瀬五郎右衛門	吉川園雄	江間一二	伊藤兵重郎	藤田桂助
川崎加守	鈴木当作	堀源三郎	榎村歛蔵	小原郡治兵衛	喜多村権之右衛門
田中涼兵衛	磯辺十兵衛	中山斧介	吉田市之進	新井七五三	萩原左膳
長坂宇右衛門	吉村志馬介	奥村梅千四郎	中村三三	菊地武三郎	伴 早太
磯与惣左衛門	藤井左内	大橋源惣兵衛	内田小左衛門	松本郡右衛門	根岸成之丞
島田貞右衛門	森戸惣蔵	大林金左衛門	天 橘蔵	竹島長次兵衛	衣川作蔵
下 直記	井上八左衛門	浅川登治右衛門	斎藤退蔵	服部貞吉	斎田市之丞
中山角左衛門	中山奎左衛門	蜷川銚次郎	安藤織右衛門	真野兵助	池田五郎八
軽部半左衛門	矢島鎚六郎	新居貞之介	榎崎十兵衛	木村又右衛門	山本新兵衛
大森猪三郎	原田团右衛門	窪岡三左衛門	小野誠兵衛	坂与左衛門	今村吉太郎
阿部首令	吉岡一問多	大和章之介	豊浦弁之進	小倉武左衛門	大岡万太郎
伊藤小七	前田儀左衛門	村上半蔵	六浦徳次郎	佐原十太兵衛	斎藤半人
山岡運八	大木由右衛門	天野藤内	軽部唯右衛門	大塚彦左衛門	小川弾之進
竹島宇左衛門	小田切美能里	吉沢乾三	藤井山二	馬場直幹	石崎 司

島津右衛門八	堀内丈須	岩井三次郎	矢島 仲	町田延次郎	岡田伊兵衛
鈴鹿新之丞	前川九左衛門	三浦誠左衛門	吉田 弼	小倉虎次郎	宇津野寅之助
大橋伴之進	佐藤宗内	正木治左衛門	森戸右橋	今村小弥太	岩永鍊吉
千原久男	門田二郎太	田上又多	山名惣之助	武藤平八	小川 泰
安藤半太郎	鈴木田守	富張藤平	齋木右源吾	高館丈三郎	大野長次郎
服部 半	牧村弥三郎	辻藤右衛門	青木錠太郎	飯田千蔵	松村弓八郎
加藤五平治	田上又左衛門	阿部 司	増田大三郎	吉田平三郎	伊沢春安
東條要人	石田市太郎	三谷孫左衛門	松山延次郎	岩崎益之介	塩田体五郎
江坂忠三郎	三箇重之助	卯木静助	加藤於兔介	小林又次郎	
天海次郎吉	川崎誠太郎	不破一学	右家督順		
杉浦市之丞	山本六蔵	高橋啓之丞	高橋多門	三上三平	高橋外重
北條新一	海塩 貢	亀川武介	鶴岡太右衛門	飯島新吾	平野剛之助
内藤千之進	細井登志美	堀 翁介	荒木宗兵衛	松本長米	高野 久
高橋嘉織	伊藤揚蔵	石川源次郎	井口紋右衛門	津川右弓	磯野喜三太
正木助太郎	千賀与左衛門	佐久間久佐	大瀬 新	大島市蔵	河合友蔵
三上浅之進	山本司織	下宮直次郎	関鎗一郎	小幡 絡	岡村新八
大場富之進	田村生九郎	堀越 東	糸井 強	堀内喜左衛門	若林三郎左衛門

川崎小右衛門	横山一之助	五十川 基	三好 好	広田紋三郎	田中小中太
平野久蔵	川越寄右衛門	内藤 伝	吉田箭次郎	杉原与左衛門	佐分利静衛
横井慶蔵	掛川利右衛門	麻生銈蔵	加藤平吉	阿部織雄	西内 蔵
神谷兵三	清水吉蔵	若林团平	安藤謹士	保坂惣庫	長沢貞樹
河内俊雄	八木登三郎	山岡欽之丞	土持安次郎	菅谷充之進	石藤喜七郎
森戸 県	吉見津内	前田藤九郎	中島忠之助	戸川英次郎	石川孫一
梅田弥五六	森次郎兵衛	今福新次郎	青山松次郎	深町美之助	秋庭 束
早川 岩	山室修助	磯 貫一郎	乾 与一	堀 幾馬	小泉増蔵
上山孫八郎	村片市蔵	岩崎保三郎	楯岡 先	高木源一郎	後藤虎次郎
仁科惣助	今村祐次郎	川越瀬左衛門	徳永半右衛門	瀬尾美代太	磯野熊太
中林勘之助	木村平蔵	伊沢棋三郎	鳥山茂一	鼓 泰安	三好東安
川崎丹吾	天野小也	古川丈助	鼓 菊庵	津山忠録	馬屋原宏
前田次郎三郎	上田仁右衛門	中村泉三郎	松尾立造	河村意篤	谷本玄察
石井新六郎	佐和鎗太郎	三浦庄太郎	岡 待蔵	市岡 策	天富亮碩
鋤持官兵衛	田宮宮太	喜多村為左衛門	皆川元民	成田玄昌	吉田洞谷
秋庭五郎兵衛	比名幸次郎	馬場長之助	千村喜又	大武寅之助	稻生鑑九郎
馬場 嶸	福田新之助	大室段三郎	藤井十次郎	高橋繁之助	緒方靖平

下士

小林廉二	矢守貫一	内藤文蔵	楠間広治	宮原郡蔵	渡辺権吉
河中又八郎	百々三郎	内藤音次郎	日村茂兵衛	早間秀雄	湯原太右衛門
小島俊蔵			樋口丹右衛門	落合寿太郎	内田雄之介
右家督順			佐伯謙三郎	諸木隼太	佐藤広治
			菅梅五郎	高橋紀市	藤井松林
浜野章吉	岡本西雲	寺地五左衛門	武永造酒右衛門		
柏原徹三	田辺新七郎	鶴川庄蔵	右家督順		
太田兵三郎	寺地強平	浜野源吉			
斎藤住蔵	小柴辰太郎	松尾十左衛門	明治二年己巳 御藩中准士家格区别帳		十一月
佐藤力之助			准士		
右家督順			矢守芳五郎	柴山三五郎	野口円佑 <small>(九)</small>
大河内茂太郎	松倉半十郎	石川貞伯	奥山順介	新井与左衛門	荒川五郎兵衛
内田養三	桑田恒介	村上理庵	石塚和十	小笠原均蔵	鈴木卜二
横田祐意	滝山宝教	齋木文体	長沼十郎兵衛	風間六三	上原全八郎
岡本友之助	日村伯平	早水藤左衛門	小島八郎兵衛	渡部金兵衛	玉井金五郎
松尾藤蔵	佐分利武次郎	国井幾蔵	高束才作	高島泰三	岡本鑒介
戸村恒太郎	諸木雄介	市川太一郎	倉品衛作	中山四郎右衛門	森戸鷺蔵

大友平五郎	松村綱五郎	川崎新九郎	佐原純吉	石川長次郎	宮野紋三
川越秀三郎	中西 中	正木極人	小田銀八	安藤匠治	吉田多美也
坂順次郎	竹島猪八郎	伊木安次郎	清水飛泉音	五弓豊太郎	永井鶴也
和田詫美	門田季之助	不破誠兵衛	掛谷定爾	平沢文七	園部近次
青木一寸	吉田 擣	綱川龜太郎	寺地改三	喜多村 照	高戸賞士
岩井泉三郎	倉井歆吾	久保田忍藏	川崎孫之助	松沢卯八郎	大岡淳藏
杉浦本弥	高山義作	石川才助	川越久馬藏	野村藤太門	関鉄之進
門田六之助	小高 勇	大河内衛	床井幾右衛門	秋月鉄藏	吉沢金次
大塚 貢	小川陽之進	富張雲平	寺戸吸右衛門	広田与惣左衛門	加藤彦三郎
前田小藤太	関 行藏	大岡 到	佐藤鼎三	飯田治兵衛	田中文藏
村片平藏	吉田吉之助	谷本得一郎	小倉誠兵衛	松田忠兵衛	湯原繁太郎
若林壮介	三浦乙之進	三好三平	大武達藏	小原幸藏	加藤権左衛門
上田仁一郎	萩原順一	大島保太郎	田辺膳助	牧村蔵太	前田常藏
飯田安石	野村 一	生口拔	堀田半兵衛	平川勘左衛門	手塚磯八
川崎 学	佐藤每五郎	河村岩雄	高島喜一郎	伊藤誠斎	峯島辰次郎
飯島金五郎	荒木一介	河野乾二	柳沢八十右衛門	家苗健次郎	木村平次郎
佐藤堅三	佐沢太郎	小林達太郎	正田重藏	十市左右輔	岡本慶介

玉垣 升	大村勘兵衛	後藤左右平	滝口新太郎	河合新次郎	豊田鎌三郎
三好貫一	和田金三	小林徳次郎	鈴木常三郎	熊田保平	坂本又一
池田顕三	斎木無二三	佐藤順助	小田得次郎	浜野大三	藤村万平
渡辺隼太	三浦源吾	山本惣左衛門			
前田徳十郎	高野太一	藤田十介	木戸勝太郎	峯島保三郎	青山彦八
西内民之助	山脇 鍊	佐藤保左衛門	三谷恒三郎	藤田鉞太郎	石田利介
中井形右衛門	永野吉三郎	馬場東次郎	高島新次郎	榑村平太郎	船橋孫助
相坂長次郎	森 長悦	甲田加一	鼓東一郎	風間徳次郎	加藤鍵之助
中村友三	広江繁三郎	山本狷介	横山茂太郎	渡部弥郎	岡本守之助
守住 守	半田勘六	尾形市蔵	大類貴作	毛呂勘次郎	高田兵三郎
中田常三郎	熊田臨蔵	小林 蒔	安原好太郎	利根川保蔵	佐藤昌次郎
井出猪之助	今井滝次郎	内山誠嘉	坂本貫之助	杉山新十郎	秋山 鼎
小野由兵衛	神藤平右衛門	橋本武次郎	香取郡蔵	福田新助	福地安左衛門
中野五郎吉	井上一篤	梅田瀬助	渡部栄三郎	中根忠治	島祐四郎
榑村武三郎	沖吉之助	稲毛有三	右跡式順		
下与一郎	山本柳左衛門	高取理三郎	深田林右衛門	波多野祐三郎	原乙三郎
内田多内	高島昌蔵	藤田松軒	田中銑太郎	松本晴次	小林千三郎

永田克見	武田多藏	枝源六	内海円助	井本弥太郎	赤松千三郎
甲田右金吾	藤井猪三郎	石川喜代治	小川住藏	馬場新八郎	塩出伴六
市川久平	大原宗五郎	稻岡柳助	中井前	小西周兵衛	鈴木滝三郎
村井源之助	大塚繁之助	赤塚泰次郎	田中吉太郎	池田林八	宮崎盛藏
日村九馬吉	細野仙之丞	大島留次郎	春田熊三郎	渡部二郎	古川小右衛門
沢田丙三郎	渡会乙平	小川球三郎	利根川藤太	青山三十郎	市川平助
萩野広五郎	角尾来助	橋本増治	宮野貞太郎	喜多村増右衛門	市川吉藏
岩井一右衛門	水谷段佐	岩浅松齋	杉野原修助	田中多苗	高木又右衛門
林章三	渡部直兵衛	藤井惣助	村田慶藏	落合忠藏	箱田義八郎
池田要平治	藤田鏗藏	木村又介	松田仲次郎	進藤周治	河村吉平
後藤全助	青柳彈藏	佐原利右衛門	佐藤吉三郎	河本龜弥	浜野房太
佐伯重太	岡田万四郎	和田宗貞	金沢源次郎	鈴木余五郎	八杉龜三
天野弁右衛門	波多野精一	清水庄左衛門	藤井平助	進藤三次	三村潤助
岡田虎五郎	豊島好太郎	岡田重助	田中又米	木村幾藏	松尾弥三郎
蔵石柳八郎	三宅慶次郎	比留間源一	小寺廉之助	稻毛郡太	梶山関之助
浅子源藏	梶山常藏	岡本弥七	湯原立左衛門	柏原平八郎	用田繁太郎
村井総太郎	大沢百輔	野村定藏	若林八十右衛門	浜野文藏	渡部金十郎

明治二年己巳十一月十五日被仰出

官等順

齋木惣之助 相川一郎 若井孫之進

齋木貞太郎 中山繁太 清水郁太郎

清水石太郎 秋庭健三 丸山房太

池上平助 下村重次郎 三成圭輔

右跡式順

四等

軍事局監事

大隊長

祭典司監事

刑法司監事

權監察

家扶

五等

半大隊長

教授

但皇・漢・洋・兵共打込席

掌史

医長

家従

中隊長

別隊中隊長

砲隊長

内衛士族取締

小隊長

一等

大参事

二等

權大参事

家令

少参事

大監察

議長

三等

權少参事

民事局監事

會計局監事

六等

但鈿・銃・書・数・馬・水打込席

別隊小隊長  
内衛卒族取締  
小教授

權掌史

上議員

出納

郡令

市令

医官

家士

半隊長

助教

但都而打込席

會計局庶務

軍事局庶務

祭典司庶務

八等

聽訟  
推按

主簿

書記

聞察

文武庶務

嚮導

別隊嚮導

准医

家職庶務

下議員

承務方

民事局承務方

會計局承務方

軍事局承務方

文武授筆生

祭典司筆生

九等

拾等

以上

聞察各面

東京在番

軀津

檢察方

---

刑法司承務方  
 医院筆生  
 議員筆生  
 檢察  
 巡察  
 家職承務方

柴山三五郎

高束才作

岡本新爾

玉垣 升

三好貫一

石塚作米

坂本又一

森田重右衛門

比名才兵衛

清水斧兵衛

藤井新太

東京在番

河村頂之介

片山養平

池田与十郎

東京在番

海老原虎太郎

小島健次郎

藤田泰次郎

軀津

桑田小太郎

明治二年己巳 十一月十八日被仰出

明治二己巳年十一月十八日

一 左之通被仰出候付承知いたし置候様御用番被仰聞候事

一 先達而從天朝華族・士族之稱被仰出、先達而御藩士家格

職務之制御改相成候、付而者旧来ハ御由緒家筋等ヲ以御

取扱之御恩義後年消亡為不致、追遠之思召ヲ以向後御家

内御取扱之格左之通御定被遊候間、於銘々も厚キ思食可  
致体認候事

佐原作右衛門家

内藤角右衛門家

下宮鏗造家

是迄累代重キ職掌相勤候付、以後年頭其外御家内御大礼之  
節於御居間御盃被成下御返盃も仕、且為御年頭被為入候間  
其節御屠蘇可指上事

但、隱居も御住居江罷出御年頭申上、其節於御奥御屠蘇  
被成下候事

一右宅或ハ手狭等ニ而御入り御用捨相願候へハ、追而思召  
ヲ以不時被為入俄も可有之事

一作右衛門家之儀ハ別段御取扱之廉も有之候付、年頭御祝  
者奉指上拜領物も被仰付候事

安藤行樹家

三浦十郎兵衛家

御旧縁之儀ニ付、以後年始其外御家内御大礼之節於御居間

御盃被成下御返盃も仕、且為御年頭被為入其節御熨斗蛇・  
御茶御菓子奉指上候事

但、隱居在宅等亦同断

三浦十郎兵衛家

一重成君江為御祭典料以後年々三拾俵宛御備被成候事

岡田 創家

山岡迂柄家

新居頼母家

夫々事柄ハ相違いたし候得共、格段之訳ヲ以以後年頭於御  
居間御盃被成下御返盃も仕候事

但、年始ニハ御家従を以御使者被成下候事

一隱居も御住居へ罷出御年頭申上、其節於御奥御屠蘇被成  
下候事

新居頼母家

四月廿日

芳松院様御祭日神酒被成下、御備之御餅・御肴御配分被成  
下候事

同断之節神酒被成下、御備之御餅御配分被成下候事

- 山岡迂柄家
- 小高舎人家
- 鈴木佐五右衛門家
- 小倉与八郎家

正月廿三日

普広院様御祭日同断之事

御初代住込之家

御宮御祭礼之節神酒被成下候事

- 阿部小重郎家
- 阿部都笠家
- 阿部首令家
- 山岡欽之丞家

右四家年始於御居間御盃被成下、且御家士を以御使者被成下候事

一 欽之丞家之儀ハ御称号并正之御一字御紋も拝領被仰付、尤御家御紋ニ紛ハ鋪無之様相用可申旨、次三男ハ本姓を

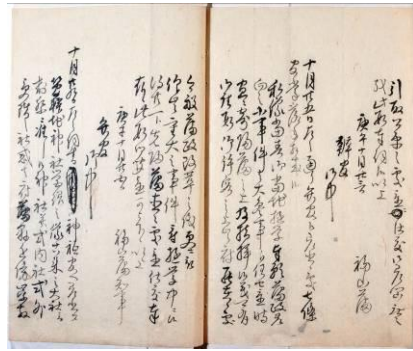
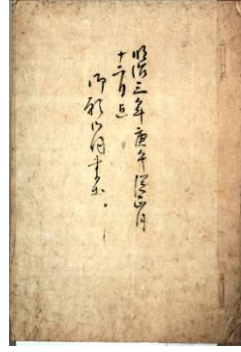
称し可申事

右四家以後家督之節々各拝領被仰付候事ニ被仰出候事

- 佐原作右衛門家
- 内藤角右衛門家
- 下宮鏗造家
- 新居頼母家

# 明治三年庚午從正月十二月迄

## 御願御伺書等



明治三年（一八七〇年）の正月から十二月まで、福山藩が新政府に提出した民事・人事・刑法・軍事など様々な案件に関する伺いと、それに対する政府からの返答や指令である附札、御達などを記したものの。

福山藩最後の藩主阿部正桓は、前年六月の版籍奉還により藩知事を拝命。中央政府からは様々な改革が打ち出され、翌明治四年七月、廃藩置県により福山藩は福山県となる。「明治維新」始動期の中央と地方の実情がうかがえる。

明治三年庚午

正月四日左之伺書神祇官へ差出候処、向井官掌落手相成候

知事儀以来神葬祭ニ相改度奉存候、尤是迄之墓所者其俣

寺僧之取扱ニ任せ置度、且家族之内剃髪又者仏諡を受居

候者・仏葬ニ仕度所存有之候者任其意度奉存候、此段奉

伺候、以上

正月四日

福山藩 公用人

神祇官

御役所

正月廿二日東京府方御呼出ニ而、中野大属を以て左之御書

付御渡相成候

福山藩

昌平橋内屋敷家作共御用ニ付可差上、代地之儀者追而下

賜候事

午正月

東京府

二月廿八日

左之伺書弁官御伝達書へ差出候処、横川官掌被致落手候

知事儀旧冬御趣意ヲ奉シ藩政改革仕、管内大事件者相運

ヒ小事件者漸次可旋行儀ニ御座候、然ル処短才浅学殊尔  
若年之儀ニも御座候間、恐惶之至ニ御座候得共在官之俣

暫之内東京へ罷出大学入塾、日夕勉強一際職掌相尽奉報

聖恩之万一度心底ニ御座候、就而者遊学中藩政差向之小

事件者大参事へ任七置、大事へ東京へ為申越懸引仕、時

宜ニ寄り而者帰藩之上及指揮候儀も可有御座、是等志願

之趣奉伺候様申付越候、以上

二月廿八日

福山藩公用人

弁官

御伝達所

三月三日左之通り御附札相濟

御附札

願之通り

城内所々及破損候処如旧修復仕候而者藩費茂不少、其上

軍制一変仕候上者便宜ニ随ひ洋法ニ倣ひ、胸壁又者塀柵

砲台等ニ追々改築仕候而宜御座候哉、此段奉伺候、以上

二月廿一日

福山藩公用人

弁官

御伝達所

二月廿九日左之通り御附札相濟

伺之通り不苦候事

三月四日弁官方山下権少史を以左之通り御達し有之候

御達

朔望伺天機日割相定当官へ可申出候事、朔日参内之輩辰

ノ刻拜天顔被仰出候事

但、本月朔日参内之輩翌月十五日、本月十五日参内之

輩者翌月朔日参内之事

朔日ハ八字ニ拜天顔、七字半迄二者急度可伺事

三月八日左之伺書兵部省へ差出候処、馬場庄助落手相成候

左之旗章等平常非常共何レも菊桐之御章印仕不苦儀ニ御

座候哉、又別ニ御合印ニ而茂御座候哉、或者何々者朝廷

之御印何々者藩々之印与申御規定茂御座候哉、此段奉伺

候様知事申付越候

一 教場標旗

一 大隊旗

一 士官合図小旗

一 兵卒袖旗

一 輜重器械旗

一 幕

一 挑灯

一 艦印

以上

三月八日

福山藩公用人

兵部省

御役所

右三月十八日御附札濟ニ而御渡相成候

追而御沙汰有之迄從前之通り相心得可申事

三月廿三日左之伺書兵部省へ差出候

死刑以上仰天裁候様被仰出有之者、農商之者人を殺傷又者盜賊共之所業有之儀ニして隊中軍律を犯し候者之儀者、

屠腹或者斬首等知藩事存旨を以処置仕、出兵先之儀者隊

長見込を以不透時機断行仕跡ニ而及御届候而宜御座候や、

是亦罪之顛末相認同しく仰天裁候儀ニ御座候哉、此段奉

伺候、以上

三月廿三日

福山藩公用人

兵部省

御役所

右四月四日左之通り御附札相濟

兵隊中軍律を犯し死刑尔処し候節も、素より仰天裁候半

而者不叶儀尔候、尤時機尔依り一人を罰して万人を励し

不申而者軍令相行れ難き場合も有之候ニ付、不得止節ハ

屠腹等知藩事存意を以処置致し、又出兵先之儀ハ隊長見

込ニ而断行跡ニ而罪状相認巨細尔届出候様可致、追而軍

律之儀御確定相成候ニ付夫迄之処前文之通り相心得、結

隊之外兵員之唱を以て決而不都合無之様可致事

三月廿八日左之伺書差出す

在東京

齊藤素軒

申付越候間此段奉願上候、以上

右之者当藩權大參事被仰付候様仕度此段奉伺候、以上

四月

福山藩公用人

二月

福山藩知事

弁官

弁官

御伝達所

御中

○四月四日左之通弁官江差出候処、落手相成候

四月十三日左之伺書弁官御伝達所へ差出候処、額田官掌被致落手候

北海道之儀者皇国鎖鑰ニ御座候ニ付、開拓使被為建有志

無位尔して被任大小參事候者与、右以下之被任官階候者

之者共江相応之土地御割渡被下候段、先般御布告被為在

ニ而も蒙叙爵候者与之順席、如何相心得可然御座候や、

候処、知事曾祖父正弘儀者旧幕府老職勤役中開拓之儀深

此段奉伺候、以上

く焦慮罷在候ニ付、何卒土地御割渡之儀奉願度素願ニ御

四月十三日

福山藩公用人

座候処、藩政向改革會計等之儀ニ付彼是遅延仕候中、

弁官

夫々諸藩江者已ニ御割渡相成候趣、然ル処東部白糠郡・

御伝達所

阿寒郡・足寄郡之儀ハ未御割渡無御座趣拜承仕候間、右

右即刻左之通御附札濟相成候

地所当藩支配被仰付被下置候者、人民男女移住為仕近年

御附札 以官階順席相立可申事

増加曠野開墾五穀四木三草等植付、御趣意奉体祖志を繼

一右尚同官掌口上ニ而左之通り被申聞候

乍微弱藩力相応尽力仕度知事始藩士一同勉勵罷在候間、

一元朝参賀之節ニ限り位階を以順席相立可申事

出格之思召を以右願之通被仰付被下置候様仕度旨、知事

一別一同之者与者位階を以順席相立可申事

同日弁官より左之御書付御達し相来候

福山

一軍艦有無

一産物並税金如何

一士卒族軒数並人員區別調

一社寺軒数アレトモ人員男女ニ區別ナシ

一社寺扶持並用達扶持分調

一家令並職制再出可達

四月廿日左之通り弁官へ差出候

蝦夷地白糠郡始三郡当藩支配被仰付開拓仕度藩知事志願之趣、先達而歎願書差出し御請取被成下候ニ付、定而御廟議中と者奉存候へ共、追々炎暑ニも相移殊ニ海路遠遠尔して諸事運ひ隙取候ニ付、何卒至急願之通被仰付候様仕度重而奉願上候、以上

四月廿日

福山藩公用人

弁官

御伝達所

○五月四日左之御判物弁官より御渡し相成候

福山藩

釧路国

白糠郡

阿寒郡

足寄郡

右三郡其藩支配被仰付候事

庚午五月

太政官

五月八日左之通り弁官へ差出候

知事儀為遊学近日御当地へ到着之上者、天機伺及ひ吉日令辰参朝之儀如何相心得候而宜御座候や、予メ伺置度奉存候、以上

五月八日

福山藩公用人

弁官

御伝達所

御付札

節朔参朝之事

五月十四日左之伺書弁官へ差出す

知事儀為遊学到着仕候間為伺天機參朝可仕候処、風邪罷  
在全快之上奉伺候、此段御聞置可被成下候、以上

庚午五月十四日

福山藩公用人

弁官

御伝達所

七月九日左之伺書東京府へ差出す

知事隠居正寧病死仕候ニ付、明日浅草西福寺へ葬送之  
節東橋車留差障通棺難相成候ニ付、少時取除ケ跡直ニ如  
元取立可申候間、御聞届被下候様仕度此段奉伺候、以上

庚午七月九日

福山藩公用人

東京府

御役所

御附札

願之趣聞届候事

七月廿七日左之伺書兵部省へ差出す

新大橋・永代橋警衛被仰付候節、惣而東京府御差函受候

様御達有之候処、去廿三日小田原藩与交代兩三日以前以

来、西橋之儀者当御省御差函請候様御達御座候趣、左候  
得者万事直ニ当御省へ御届等可仕儀ニ御座候や、此段奉  
伺候、以上

庚午七月廿七日

福山藩公用人

兵部省

御役所

○七月廿九日左之通り兵部省方御達し有之候

新大橋・永代橋兩所警衛自今廃止ニ付、其藩兵隊同所警  
衛差免、更ニ一小隊を以大坂天保山警衛申付候事

但、天保山警衛者田辺藩与可致交代事

庚午七月

兵部省

福山藩

同日左之封書を以て弁官方御達し有之候

其藩士大学南校寄宿生高戸賞士儀、今般華頂宮随従とし  
て米利堅国へ被差遣候間、此旨相達候也

庚午七月廿八日

弁官

福山藩知事殿

七月三十日左之通り昨日之御受弁官差出す

当藩士大学校寄宿生高戸賞士儀、今般華頂宮四方隋従と

して米利堅国へ被差遣候間、相達可申旨奉畏候、以上

庚午七月廿八日

福山藩知事

弁官 御中

八月八日左之通弁官江差出候

藩士五十川基儀、為洋学修業米利堅国へ差遣申度奉存候、

此段御許容奉願候、以上

庚午八月八日

福山藩知事

弁官

御中

右御附札左之通相濟十五日御渡相成候

願之通聞届候事

八月九日左之伺書弁官江差出候処、平尾官掌落手相成候

藩士五十川基儀、為洋学修業米利堅国へ差遣申度段奉願

置候ニ付、願之通被仰付候儀ニ御座候ハ、今般華頂宮

様同国へ御航海被遊趣伝承仕候、基儀御陪従為仕度段

兼而奉願置候処、御差問茂無御座趣ニ御座候間御陪従仕

候而可然御座候哉、此段奉伺候、以上

庚午八月九日

福山藩公用人

弁官

御伝達所

右同十五日御付札左之通り

可為伺之通事

八月十八日左之伺書民部省へ差出候処、篠原少録被致落手

候

当藩支配地備後国沼隈郡水呑村川尻、積年沙洲之地与相

成水捌ケ悪しく相成候付、右川尻塩浜或者新田築立叢島

之内字釜屋与申処堀抜き水路相開候へ者、上流停滞之患

を免れ且ハ後來聊塩殻之利モ相生シ可申見込ニ御座候、

尤漁獵之差響等支配地ハ勿論他方迄も聊閑係無御座候間

新築仕度奉存候、尤成功之ハ見取米運上銀等取立候心得

二御座候、此段奉伺候、以上

庚午八月

福山藩

民部省

右十月十日左之通り御附札相濟

書面願之趣聞届候、追而御高入石盛付等之儀ハ遂吟  
味可伺出事

庚午十月

九月廿五日左之伺書神祇官へ差出候処、大前官掌落手相成  
候

石灯笼之儀者僧徒之造り始候事ニ承り候儀も御座候間、  
神前へ献備仕候而者自然神慮尔不相叶儀ニ御座候哉、此  
段奉伺候、以上

庚午九月廿五日

福山藩

神祇官

御中

右十月三日左之通り御付札相濟

石灯笼之儀ハ先従前之通相心得可申事

十月廿三日左之伺書弁官御伝達所へ差出候処、三谷官掌落  
手相成候

先般異宗徒各藩江御分預相成候処、一家別離無之様与之  
御趣意ニ候得共、当藩へ御預之内親子夫婦等他藩へ引分  
れ御預相成居候者茂有之、往々悔悟之妨ニも相成第一御  
趣意ニも難応ニ付、子弟ハ父兄妻者夫御預ケ之藩々示合  
引渡其段御届申上候様可仕哉、尤右様相成候時者兼而  
藩々江御預ケ之人員増減も可仕ニ付、藩ニ因り迷惑之儀  
も出来可申候間其藩々熟談相遂ケ御預人員増減無之様、  
忝人彼之藩へ送候ハ、其藩御預之内外関係無之もの忝人  
引取公平之処置ニ仕度御差問無之哉、此段奉伺候、以上

庚午十月廿三日

福山藩

弁官

御中

十月廿五日左之通り弁官江差出候処、七条官掌落手相成候  
私儀当春御当地遊学奉願、藩政差向之小事件者大参事江  
任七置、時宜ニ寄帰藩之上及指揮候儀可有御座段御許容

之上出府罷在候処、今般藩政改革之儀更ニ被仰出重大之  
事件ニ付遊学中ニ候得共一卜先帰藩、直ニ処置仕度奉存  
候、此段御聞置可被下候、以上

庚午十月廿五日

福山藩知事

弁官

御中

十月廿九日左之伺書神祇官へ差出ス

管轄地神社營繕之儀、古来之大社ニ而勅祭ニ准し候神社  
并式内社・式外受階之社、(或方)惑者府藩県近傍崇敬之神社等  
者、御一新後御祭奠御再興之御趣意ニ基候得者、右營繕  
公廨入費を以相弁可然儀ニ御座候哉、又者右之内何社迄  
ハ公廨費用ニ而相弁候御規則等も御座候哉、且其内吉備  
津社之如きハ備後一国之鎮守社ニ候間、管轄地外ニ而も  
備後国中者勸化等仕候而も可然儀ニ御座候哉、此段奉伺  
候、以上

庚午十月廿九日

福山藩

神祇官

御中

右閏十月三日御附札相済

其社ニ從前之仕法取調可差出事

閏十月廿三日左之伺書神祇官江差出ス

昨已九月藩知事始藩土之者共・志有之者、勝手次第神葬  
祭執行候而も可然儀ニ御座候哉奉伺候処、知藩事始士族  
之分神葬祭之儀伺出候上執行可申付旨御付札を以て御差  
込御座候処、卒并農商之儀も有志之者者勝手次第神葬祭  
執行候而も可然儀ニ御座候や、此段奉伺候、以上

庚午閏十月廿三日

福山藩

神祇官

御中

御附札左之通り相済

伺之通り不苦候事

但、新宗改方之儀ハ一定之御規則相立候迄於藩庁

取調可届置事

十一月十四日左之伺書封書ニ而弁官へ差出候

先般藩制更被仰出候ニ付而者、正権大少参事在職解官共  
別紙名前之通被仰付度、此段奉伺候、以上

庚午十一年三日

福山藩知事

弁官

御中

別紙

在官

岡田大参事

本官被免更ニ  
権大参事被  
仰付度

三浦大参事

在官

斎藤権大参事

本官被免更ニ  
少参事被  
仰付度

武田権参事

在官

河村少参事  
倉井少参事  
榑崎少参事

本官被  
免度

庚午十一月三日

福山藩知事

大森少参事  
浜野少参事

十二月十七日左之通り弁官江差出候

今般藩政被仰出候ニ付而者、現米一万石ニ付士官ヲ除之  
外兵員六拾人ヲ以先常備与相立候様御布令之趣、奉畏速  
ニ兵制改革可仕筈ニ御座候処、常備兵制之儀体幹強壯の  
兵役ニ堪ル者ニ無之而者節制規律相立兼実備完全ニ難至  
ニ付、士族卒ヲ始メ農工商ニ至迄広ク管内四民ヨリ精選  
シ常備屯集之制ヲ設ケ度奉存候、然ルニ募兵之法ヲ立常  
備之則与定ムルニ至而者、其居所及器械衣服等自カラ其  
制アリテ費用亦前日之比ニアラス、今妄ニ其費用ヲ省減  
セハ兵力亦從テ省減スルニ付、軍事之費用ニ至而苟モ不  
可省減者与奉存候、左候而者過日御布令之歳入二十分ノ  
一之陸軍資等ヲ以、万石六拾人之兵員者迎モ給養難仕候  
トテ、士族卒之内ヲ限り編製仕候而者唯々全額ニ備フル  
迄ニテ、実備ニ至テハ却テ精選兵之寡少ナル方国家之実

用卜奉存候、依之再三熟考計算仕諸般之費用精々節減シ、  
歳入八分一ヲ以陸軍費ニ充テ、広ク四民中ヨリ精撰仕藩  
力相応之兵員編製仕度奉存候、就てハ即今之处僅ニ中隊  
之常備ニ相成候得共、追々諸費減省之上從テ常備軍費増  
加仕度奉願候、右者過日御布令之御趣意ニ相背候様相当  
リ恐怖之至リニ不堪候得共、前件申上候通不得止事情御  
洞察書面之通御許容被成下度奉願候、以上

庚午十二月

福山藩

弁官

御中

右御附札左之通り相濟

同之通

十二月十日左之封書弁官江差出候処落手相成

少参事

山岡謙介

右之通被仰付度此段奉伺候、以上

庚午十二月八日 福山藩知事

弁官

十二月廿二日左之通弁官へ差出候処、市橋官掌被致落手候  
事

御中

西京表当藩邸兼而被仰出候茂御座候間、今般売扨同所へ  
為詰置候用弁之者引揚候而も不苦候哉、此段奉伺候、至  
急御差函奉願上候、以上

庚午十二月廿二日

福山藩

弁官

御中

廿四日左之通り御附札相濟

同之通

同月同日左之通り弁官へ御差出候処、市橋官掌被致落手候  
事

他支配在籍之者当管内ニ而盜業相働召捕候節ハ、罪状書  
取相添生国江差送り候上於其地吟味裁許可致筋ニ御座候  
哉、又者召捕候段生国へ及届合候上召捕元ニ而及吟味、  
輕罪之者ハ裁許之上府藩県送りを以生国江差返、死罪以

上者伺之上及裁許其旨生国江届合可仕候哉

一他支配当時無籍之者当管内ニ而盜業相働召捕候節、輕罪之者ハ直ニ及吟味裁許濟之上、府藩県送を以て生国へ差返可申哉

但、死罪以上重罪ニ候共同様取計伺之上裁許いたし候而不苦や

一罪人召捕候節無籍之旨申立候者、一応生国へ及掛合相違無之上糾問裁許いたし候筋ニ可有御座候得共、遠路往復日数相掛り候而已ならず双方費用茂相増候儀ニ付、本人申立之趣事実相違無之様相聞候得者、別段生国へ不及懸合直ニ糾問裁許いたし候而不苦御座候哉  
右件々奉伺候、以上

十二月廿二日

福山藩

弁官

御中

廿六日左之通り御附札相濟

他支配在籍之者其轄下ニ而惡事有之捕押候ハ、流

以下之罪科ハ其藩ニ而相当之所置可致、其許伺之通可相心得候事

# 御家内職員表

明治政府による藩政と旧藩主の家政を分離する政策のもと、阿部家でも家内を統括する家令以下の職制が整備された。本表は左下部分に「御改」の日付が記載されており、明治三年（一八七〇年）正桓が福山藩知事であった当時のものとわかる。大きく表と奥とに分かれ、職掌に相当する官録が定められている。清心院は旧福山藩阿部家七代阿部正弘継室、於格・幽蘭はともに同六代正寧の娘である。職員異動に伴い後に書き込まれたと思われる取り消し線や点・丸・三角印等は、翻刻では表記していない。

# 福山藩官位相当表（人名入り）

明治二年（一八六九年）六月、藩知事に任じられた阿部正桓は、同年八月に福山へ帰藩して藩政改革に着手した。新たな藩政機構は大きく民政・会計等を司る藩庁と、軍事を司る軍事局、学事を司る学校の三機関から成る。従来の重臣を中心とした体制は大参事以下の官僚組織に改められて、官位相当の官録が支給されることとなった。本表大参事の岡田創は岡田吉顕、権大参事の三浦岬は三浦義建のことである。随時官員の異動が行われたが、本資料は明治三年十一月二十九日になされた任免時の内容に一致している。

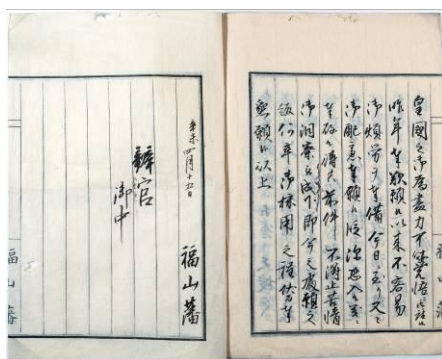
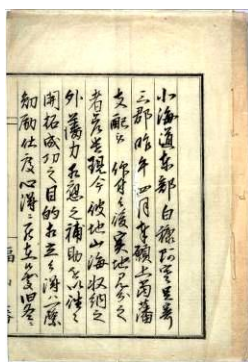
御家内職員表												
合計役員三十三人内表十八人 外御四方様御家扶一人 奥御三方様附合八人 幽蘭様附四人 医官二人	幽蘭様	於格様 御奥様 清心院様 奥	表				官禄	官名				
			武田平之助 山岡迂柄				五十八石	家令				
		三冨甚左衛門	主會計 内庫 阿部小重郎 齋藤勘兵衛 馬場直幹				三十五石	家扶				
官医	上 同	聞 用	記 書	同 並	出 納	習 近	一等十八石 二等十六石	家 従	一等十三石 二等十石			
三十七兩	三 等	三 等	四 等	二 等	一 等	一 等	吉沢 凶 天 邦三郎 渡辺 肇 小泉増蔵 石藤仲太 山本六蔵 近藤虎三郎 横山一之助	鼓 菊庵 石川貞白	高野太一 今村五郎	荒川五郎兵衛 秋月鉄三 佐藤鼎三 安原一作	小田安爾 松下潤太郎 松倉半十郎	高橋紀市
庚午十二月十八日御改	上 同	番 封 房 厨	度 用				一等八石 二等六石	家 丁				
	二 等	二 等	滝沢吉次郎 西沢猶三						勝田武次郎 深沢八十郎	小島金八郎 春日熊三郎 丸山孝右衛門 武田和二		
本席順 山岡迂柄 阿部小重郎 齋藤勘兵衛 馬場直幹 三冨甚左衛門 吉沢 凶 天 邦三郎 渡辺 肇 小泉増蔵 石藤仲太 山本六蔵 近藤虎三郎 横山一之助 鼓 菊庵 石川貞白 高橋紀市 松倉半十郎 荒川五郎兵衛 秋月鉄三 佐藤鼎三 安原一作 今村五郎 高野太一 松下潤太郎 小田安爾 小島金八郎 春日熊三郎 滝沢吉次郎 西沢猶三 丸山孝右衛門 武田和二 深沢八十郎 勝田武次郎												

# 福山藩官位相当表（人名入り）

		校 学		局 事 軍		庁 藩									
								知 事	正 四 位						
		合計 二千五百六十五石	合計 九十八人						従 四 位						
陸軍 官録	武科教官官録	合計 四百廿四石 千七百六十兩							正 五 位						
		百二十石	一 人					大 参 事 岡田 創	従 五 位						
		百八十石	二 人					権 大 参 事 斎藤素軒 三浦 岬	正 六 位						
		二百六十石	四 人	学 校 掛	軍 事 掛	出 納 掛	事 務 掛	少 参 事 河村九十九 倉井登男 榎崎新藏 武田平之助	従 六 位						
	五十石	百石	一 人	授 教 等 一				権 少 参 事 田辺新七郎 津川右弼	正 七 位						
		四百七十石	十四人	授 教 等 二	掛 務 校 横山彦三	掛 務 軍 大林壮作 高嶋浮雲	掛 出 歳 伊藤小七	掛 入 歳 河合新次郎	掛 法 司 太平知三 矢島鑑六郎	大 属 三十五石三十五斗 官寺保配 村上平藏 山岡運八 百々忠右衛門					
	百石	二百五十石	十人	授 教 等 三	馬屋原宏		玉井金五郎	岡村新八 小田鑑八	内田雄木	権 大 属 二十五石三十五斗 斎藤収藤 茂上有助 鈴木誠一					
	七十二石	二百三十石	十四人	教 助 等 一	杉山新十郎	掛 械 器 若井 通	掛 木 土 小川弁助	掛 度 用 市川平記	掛 財 殖 高嶋昌隆 稻毛有三	掛 算 計 園部近次 岡田広吉郎	掛 鞆 鞠 中山四郎右衛門 榎岡柳助	掛 寮 監 門田二郎太	掛 典 祀 宮野紋三 市川吉藏	掛 籍 戸 山崎三郎 吉見津内	十八石 十六斗 倉品篤作 佐藤堅藏 落合忠藏
	五十二石	四百九十九石 二百卅四石	三十三人 二十人	教 助 等 二	太田鑑太郎 岡本新藏 石塚作米 山脇謹治 佐久間剛藏	掛 務 軍 早川 岩	掛 木 土 小川弁助	掛 度 用 市川平記	掛 財 殖 高嶋昌隆 稻毛有三	掛 算 計 園部近次 岡田広吉郎	掛 鞆 鞠 中山四郎右衛門 榎岡柳助	掛 寮 監 門田二郎太	掛 典 祀 宮野紋三 市川吉藏	掛 籍 戸 山崎三郎 吉見津内	十三石 十一斗七斗 倉品篤作 下部才次郎 佐藤堅藏
	百五十石	七十石 十八石	七人 二人	教 助 等 三	小柴辰太郎 岡本新藏 谷本得三郎 小島俊藏 河村岩雄 小林徳次郎 佐藤吉雄 中山角左衛門 佐木芳里 青 梅五郎 早開權二 浅野玄岳 山本須介	掛 械 器 若井 通	掛 木 土 小川弁助	掛 度 用 市川平記	掛 財 殖 高嶋昌隆 稻毛有三	掛 算 計 園部近次 岡田広吉郎	掛 鞆 鞠 中山四郎右衛門 榎岡柳助	掛 寮 監 門田二郎太	掛 典 祀 宮野紋三 市川吉藏	掛 籍 戸 山崎三郎 吉見津内	十石 一九石 青山彦八 高島泰三 松浦五二 船橋莊三 関根敬三 鼓守藏 高嶋岩太郎 芥木無三
		百六十二石	二十七人	生 業 得 一 等 二 等 三 等 准	石坂重五郎 栗原連三 助村祐次郎 新井金太郎 草河保男 森喜太郎 官給八十石	武井初次郎	小川為七	上村義一郎 岡田精二							六石 井上房治 清水秋七 清水得米 田中鑑藏

## 福山藩支配北海道東部

### 開拓地奉還についての上申書



本文前半は明治四年、福山藩から政府・弁官に差し出した北海道白糠・阿寒・足寄三郡奉還についての歎願書の控え。「網走郡共奉還」となっているのは網走郡の誤り。後半は同年に開拓使へ差し出されたものと思われる。文中の米屋孫兵衛と孫右衛門とは親類同士で、名目上は孫兵衛が現地の差配人となっているが、実際に現地を取り仕切っているのは孫右衛門である。

北海道東部白糠・阿寒・足寄三郡昨午四月奉願上、当藩支配被仰付候後実地見分之者差遣、現今彼地山海収納之外藩力相応之補助を以往々開拓成功之目的相立候得ハ、一際勉勵仕度心得ニ罷在候処、旧冬ニ至リ右実地見分之者帰藩之上巨細申達候模様を以推察仕候得者、絶海之遠地万端得失不相償、差向之処為大入費相掛内地藩力融通無之内容易ニ手ヲ下候時者、成功之目途無之而已ならず其為メ本根顛蹶ニ立至リ可申茂難計与掛念仕、最初承リ込候儀与者頗ル相違之廉有之進退因却之至ニ御座候得共、一旦願立御聞濟被成下候末之儀ニ付、再ヒ返上奉願候段前後齟齬深奉恐入候間、如何様ニ茂差繰名実相称候様取計仕度与百方苦慮候得共、右願立後追々被仰出候藩債支償・楮幣消却并海陸軍上納金等非常之節減繰替等を以御期限ニ後れなからも漸次ニ遵奉仕居候折柄、即今之処聊なり共藩力他境江分削之融通絶而無御座其俛支配罷在、少分之御申訳旁苟且之処置仕居候而、切角有力志願之者先鞭之路ヲ相塞キ天授之資物いつ迄茂繁盛之期無之様罷成候而者愈以罪責ヲ重猶更奉恐入候

間、何卒三郡并当支配被仰付候網走郡共奉還仕度奉存候、尤藩政向諸事改正相当之融通有之候上ハ、北門鎖鑰至要之場所ニ候得者皇国之御為尽力可仕覚悟ニ御座候、昨年奉歎願候以来不容易御煩勞ヲ奉備、今日ニ至リ又々御配慮奉願候段深恐入候儀ニ奉存候得共、前件不得止苦情御洞察被成下、即今之処願之趣何卒御採用之程伏而奉懇願候、以上

辛未四月十五日

福山藩

弁官

御中

別紙歎願仕候通三郡返上御許容被成下候上者、彼地物産等差配之儀何卒昨年九月当藩方用達申付置候越後国寺泊商人米屋孫兵衛江当分此俣御任セ被成置候様尚又奉懇願候、右者昨午九月土地御引渡相成候処、別紙縷述仕候通之次第ニ付不取敢右孫兵衛江先用途申付候処、彼地物産之収納ハ差向介鱗・海草ニ限り候儀ニ而、毎歳五月方八月迄四ヶ月間ニ収獲仕、其余九ヶ月間土人之衣食・給料ヲ初舟楫・網罟

修繕之諸雜費等者全右海獵之仕込ニ属シ、一周年通計之上ニ無之而者得失出納相償はれ不申、大旨一ケ年收納壹万千三百金ト見積、其内壹万五百金ヲ諸費用ニ充テ五百金ヲ税金ニ納メ残ル三百金全引受人之利益ニ相成候儀ニ候処、從來彼地差配仕候米屋孫右衛門儀、一昨九月来諸仕込仕候末五月ニ至リ開拓府江御引上ケ、海獵既ニ終候後ニ至リ当藩江御引渡相成、孫右衛門ニおゐては昨年四月迄之出費幾千金全損耗相成候付、当藩方用途申付度内意申合候節懲羹之情合方再応辞退申出候処、藩費ヲ以開拓手始仕兼候場合ニ付種々説諭ヲ加ヘ海獵仕込資本等之儀漸致承諾具、尚孫右衛門・孫兵衛為申合候上兩人手元之都合ヲ以表向孫兵衛江用達申付候儀御座候、然ル処一昨年来孫右衛門手元格別難渋之始末巨細申述、当未年税金之内二百両容捨致具度再三懇願仕候付無拋許容仕候、然ルニ返上御聞濟之上直ニ開拓府御手捌相成候節者孫右衛門手元為大損耗相成候儀ニ付、昨九月方今日迄九ヶ月間之費用大旨七千八百余金藩庁ヨリ弁シ遣不申而者、最初懇囑仕候情誼ニ相背キ只管下民ヲ欺

瞞致候様相当リ条理相立不申候処、前条之通於藩庁者支配被仰付候後未毫髮之収税無之上ニ、昨年土地見分受取之者差出候節も隔海曠漠之北地、衣服用具之調度・草木試樹之種子・土人救済之医薬ヲ初往返旅費并彼地在留官員之諸入費等今日迄五千五百金之出費ニ有之、此上七千八百余金藩庁方差出候節者、前後合一万三千三百余金之官財消耗仕候理ニ而甚以当惑痛心仕居候、初発粗忽之歎願仕候方不容易御配慮ヲ奉願候上ニ、莫大之官財ヲ消耗シ朝廷之御疲弊ヲ相重候様立至リ候段、畢竟私儀兼而示令不行届方之儀ニ而深ク慙惶罷在候、付而者此上無用尔官財ヲ費却仕候者一層罪責ヲ重ね候儀ニ付、何卒当九月迄之処右孫兵衛江其俣御任七置被仰付度奉懇願候、左候時者当年之税金三百兩者開拓府御收納相成、於藩庁無用之贅費ヲ省キ彼是比較計算仕候得者七千六百余金之藩費相減シ、全朝廷御経費御減少之筋ニ相当リ聊安鄙懐候、仰願者至仁洪大之御廟議ヲ以前条御許容之程只管奉懇願候、右者甚以我俣之歎願ニ而廟堂御聞取之程も如何可被為在候哉、去迎七千余金空敷消財仕候

而者申訳も無之儀、又開拓方嚮無之段一決仕候而徒ニ歲月ヲ遷延シ後日ニ至歎願仕候者、尚更衷情奉恐入候儀ニ付彼是之苦情詳細吐露仕候、今日之御体裁相成候上者藩内會計之贏縮者即御国計之贏縮ニ関係仕候儀与奉存候間、前条之次第御照諒被成下候様伏而奉懇願候

## 北地一件 全



前掲「福山藩支配北海道東部開拓地奉還についての上申書」の下書きと思われる文書。前半の文章は藩知事である阿部正桓の立場から白糠・阿寒・足寄三郡の返上に至る経緯を同上申書よりも詳しく述べている。後半の文章は下書きのためか同上申書にあった米屋孫兵衛の名前がなく、福山藩から米屋孫右衛門へ現地の差配を委託したという表現になっている。

## 〔貼紙〕

「文面者於東京尚添削之積、知事公御名ニ而被差出候歟、又藩名ニ而被差出候歟、東京之振合次第取計候積」

北海道之儀者皇国之鎖鑰ニ付開拓使被為建有志之者共へ相応之土地御割渡被下候段御布告被為在候処、東部白糠・阿寒・足寄三郡者未タいつれへも御割渡無御座趣ニ付、右地所当藩支配被仰付候ハ、御趣意奉体、人民移住ヲ初開墾向藩力相応尽力仕度私初一同勉勵罷在候段、昨年四月歎願書差出既ニ支配被仰付、爾来十ヶ月後今日ニ至リ再返上之儀奉願候段、昨年与者前後齟齬名実相違仕候付最初歎願之始末ヲ初今日迄百方苦慮仕候庁議之次第委悉陳述歎願仕候、私儀知事職拜命後御趣意を奉し藩政向別而苦慮仕居候内聊発明仕候儀も有之ニ付、学政兵備者不申及民事関係之諸細務等迄惣而改正実着施行仕、諸政御維新之盛意ニ相協候様仕度略目的も相立候得共、結局會計ニ差支施行之際ニ至リいつも困却仕候方其疲弊を招候根元を尚又研究仕候得者、

從來封建之流弊方いつとなく諸規真理ニ触れ事物之理ハ  
 日々暗く只虚權と策略を以時之間ヲ合セ多くは下民を束縛  
 自由ヲ妨ル之制度と相成候ニ付、下民開智之度ニ從テ人心  
 離れ人心離るゝ方尚策略を巧ルせんとの勢ニ推移リ所為所  
 行多くは徒勞虚費ニ属し、条理上ヲ推考候得者富国者扱置  
 日々疲弊を重ね月々衰弱を増ス理合ルも可相当与大ニ悔悟  
 仕候得共、從來無智不文明之所致今日ニ至リ臍を噬とも不  
 及実以千秋之遺憾ニ付、自今而後ハ着目を一変し此基礎を  
 改定仕度与一決シ右条理研究之為大参事三浦義建出京為仕  
 候処、滯京中不図蝦地開拓之事ニ心付開拓使官員之内へ北  
 地形勢承合之処、地質茂宜く天授之資物山積之趣ニ而一時  
 藩力を費候得者他年之利益実ニ莫大なるべくよしニ付、国  
 家經濟之道此外ニ有之間敷与一途ニ存込候折柄、釧路国三  
 郡他人既相争候趣ニ而至急相願不申而者容易支配も被仰付  
 間敷哉、其頃之情態余程切迫藩地へ打合候間合も無之旨ニ  
 而終ニ同人場ニ而見切歎願差出置、同人者直ニ帰藩其旨申  
 達自ラ蝦地ニ渡リ身命を抛尽力仕度段申出候得共、第一藩

之力を量候而之儀ニも無之粗忽無算之取計ニ而私初いつれ  
 も驚愕、庁議居合ニ難至ニ付直ニ返上可奉願とも奉存候得  
 共、元來北地開拓之儀者私儀茂兼而奉領承居候儀、既ニ歎  
 願書差出候上者粗忽返上も如何与心得、利害得失者不申及  
 藩力之実算も篤与研究仕候上着実至当之庁議ヲ以巨細陳謝  
 仕、并ニ最初粗忽不都束之段も追而奏聞御処分も可奉蒙与  
 奉存候折柄、大参事岡田吉頭集議院出頭仕候付利害研究之  
 事も申合メ、内ハ會計之実算を相量リ又ハ彼地天与之資物  
 ニ就テ漸々開拓之仕方をも為研究、四五輩差遣し容易開拓  
 之目的も候ハ、如何様共尽力仕折角之朝旨ニ奉対仕度与存  
 候処、吉頭儀者弥以方嚮無之趣申立、大参事兩人利害之議  
 論東西往復仕候内旧冬ニ至リ实地見分之ものも帰藩仕、隔  
 海之遠地差向開拓成功之目的不相立旨巨細申達、且藩内會  
 計も藩債支償・楮幣消却等ニ至而者世祿并公廨諸費節減等  
 を以目的を相立候次第、其他上納金等も当座借財非常繰替  
 等ヲ以御期限ニ後れなからも漸弁納仕候仕合ニ而藩内民務  
 スラ実以行届不申、彼是不可言苦情聊たりとも藩力他境へ

分殺仕候儀不相成候付、管内富民会社等ヲモ為相結尽力為致度候得共、元來右事件急遽粗忽ニ出テ下民承得候上之儀ニも無之旁以会社も被行かたく而已ならず、可否得失を推考仕候得者現今管下人力者不申及地力もいまた相尽し不申候ニ付、富民迎も現在之管下へ尽し候得者所費少して其利立ニ相見候儀ニ而、管下狹隘ながらも地力極レハ人力を尽し人力極レハ智力を尽し候得者国家盛栄無尽無極理ヲ漸々發明シ、弥以隔海之地へ難進人情も有之旁以強而説論も難相成繰々残念千万ニ奉存候得共、実ニ目途難相立恐懼痛心之至ニ御座候、將又管内出納之外兼而下賜候賞典祿有之、素方私有仕候筈無御座直ニ御辞退も可仕之処聊愚考之次第も有之、何卒学校之費用ニ充テ諸般之基礎たる人智を大ニ進歩為致度志願ニ候処右三郡支配被仰付候、付而者開拓之費用ニ充テ候方急務ニ可有之哉乍不及緩急得失熟考仕候処、寧開拓ヲ捨テ開化一途ニ向候儀目今之急務ルして永世之基礎ニ可有之、殊ニ學費ニ差向候得者用力少して其成功歲月ルして可期望儀ニ御座候、前条縷述仕候通開拓之定算無之

して其俾支配仕候儀、弥罪責を重ね候儀ニ付重々奉恐入候得共、何卒三郡并当分支配被仰付候綱走郡共返上仕度奉懇願候、尤諸事改正藩務行届候上者奉願候迄も無之北門之鎖鑰至要之場所ニ候得者皇国之御為尽力可仕覚悟ニ御座候、昨年奉歎願候以來不容易御煩勞を奉懸今日ニ至又々御配慮奉願候段、義建者勿論私初参事一同重々奉恐入候儀ニ付何分之御沙汰謹而奉待候、仰願くハ右苦情御洞察被成下即今之処何卒御許容之程奉歎願候、誠惶謹言

知事公御名

昨年中大参事兩人開拓利害討論之書類二冊為御見合差出候也

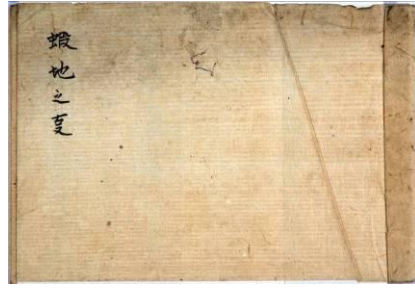
別紙歎願仕候通三郡返上御許容被成下候上ハ、彼地差配之儀何卒昨年九月当藩方委托仕置候函館商人米屋孫右衛門ナル者へ当分此俾御任せ被成置候様尚又奉懇願候、右者昨午九月土地御引渡相成候処、別紙縷述仕候通之次第ニ付不取

敢右孫右衛門へ先差配申付候処、彼地物産之収納者差向介鱗・海草ニ限り候儀ニ而、毎歳五月方八月迄四ヶ月間ニ收穫仕、其余九ヶ月間土人之衣食・給料ヲ初舟楫・網罟修繕之諸雑費等ハ全右海獵之仕込ニ属し、一周年通計之上ニ無之而者得失出納相償はれ不申、大旨壹ヶ年収納壹万三千三百金と見積、其内壹万五百金ヲ諸費用ニ充テ五百金ヲ税金ニ納メ残ル三百金全引受人之利益ニ相成候儀ニ候処、孫右衛門儀一昨九月来諸仕込仕候末五月ニ至リ開拓府へ御引上ケ相成、海獵既終候後ニ至リ当藩へ御引渡相成候ニ付、孫右衛門ニおゐては昨年四月迄之出費幾千金全損耗と相成候間、当藩方差配申付候節茂懲羹之情合より再応辞退申出候得共、藩費を以開拓手始も仕兼候付種々説諭を加へ漸承諾いたし呉候次第ニ而、一昨年来同人手元格別難渋之始末巨細申述、当未年税金之内式百両容捨いたし呉度再三懇願仕候ニ付無據許容仕候、然ルニ返上御聞濟之上直ニ開拓府御手捌相成候節者孫右衛門手元尚又為大損耗相成候儀ニ付、昨九月方今日迄九ヶ月間之費用大旨七千八百余金藩庁方弁し遣不申

而者、最初懇囑仕候情誼ニ相背き只管下民を欺瞞いたし候様相当リ条理相立不申候処、前条之通藩庁ニおゐてハ支配被仰付候後いまた毫髪之収税無之上ニ、昨年土地見分受取之者差出候節も隔海曠漠之北地、衣服用具之調度・草木試樹之種子ヲ初往返旅費并彼地在留官員之諸入費等今日迄五千五百金之出費ニ有之、此上右七千八百余金孫右衛門へ相渡候節者、前後合一万三千三百余金之官財消耗仕候理ニ而甚以当惑痛心仕居候、初発粗忽之歎願仕候方不容易御配慮を奉願候上ニ、莫大之官財を消耗し朝廷之御疲弊を相重候様立至候段、畢竟私儀兼而示令不行届方之儀ニ而深く慙惶罷在候、付而者此上無用ニ官財を費却仕候而者一層罪責を重ね候儀ニ付、何卒当九月迄之処右孫右衛門へ其俛差配被仰付被下度奉懇願候、左候時者当年之税金三百両者開拓府御收納相成、於藩庁者無用ヲ省き彼是比較計算仕候得者七千六百余金之藩費相減シ、全朝廷御經費御減少之筋ニ相当リ聊鄙懐を安し候、仰願ハ至仁洪大之御廟議を以前条御許容之程只管奉懇願候、右者甚以我俛之歎願ニ而廟堂御聞取

之程も如何可被為在哉、去迎七千余金空敷消財仕候而者申  
訳茂無之儀、又開拓方嚮無之段一決仕候而徒ニ歳月を遷延  
し後日ニ至リ歎願仕候者尚更衷情奉恐入候儀ニ付、彼是之  
苦情詳細吐露仕候、今日之御体裁相成候上者藩内會計之贏  
縮者即御国計之贏縮ニ關係仕候儀与奉存候間、前条之次第  
御照諒被成下候様伏而奉懇願候

# 蝦地之事



蝦地は蝦夷地のこと。本書の一番目の文章は、開拓反対論の「僕」と開拓推進論の「君」との対論を「僕」の立場からまとめた形になっており、「僕」は大参事の岡田吉顕ではないかと思われる。二番目の文章が少参事の森操兵衛によるものであることは他の資料から裏付けられる。三番目の文章は内容から岡田と共に大参事だった三浦義建によるものと考えられる。

当今ノ急務ニシテ永世ノ基礎ハ、智識ヲ開キ材能ヲ長シ文明開化ノ民ヲ養成スルニ在リ、今日百般ノ政務惟此一標的ヲ達センカ為メナルコト過日君ト論定セル所ニシテ今又贅云ヲ待タス、吾輩ノ勤上モ農夫ノ耕耘モ尽ク此一標的ナレハ、十萬ノ金ヲ得レハ十萬ヲ費シテ標的ヲ達センコト資ケ、百万ヲ得レハ百万ヲ費シテ資ケ、国家改革近日ニ在レハ減スル所ノ費用生スル所ノ収納尽ク此用ニ供シ標的ヲ達スルコトヲ資ケルモ尚足ラサルコトヲ恐ルナリ、君蝦地開拓ノ説アレハ其意果シテ如何ナルヲ知ラス、請試ニ利害得失ヲ参伍比較セン、君ニ問フ蝦地開拓ノ説如何、君必答テ曰ン、本ト是レ蝦地ハ皇国北門ノ鎖鑰ニシテ魯人蚕食トナルハ慷慨ニ堪ユ可カラス、苟モ皇国ノ民タル者同心協力此地ヲ開拓シテ寸陰分刻ヲ争フヘシ、我藩之ヲ束手旁觀スルコトヲ得ンヤ、僕又曰、朝廷之ヲ議スレハ素ヨリ当レリ、我藩之ヲ議スルモ当ラスト為サス、然レトモ我藩ハ大標的ニ着目シ得テ各藩ニ秀拔勤王セント欲スルニ財力微弱志ノ達セサルコトヲ恐ル、而シテ又開拓ノ費用アレハ勢両立並行ス可

カラス、然レハ我藩ノ視ル所ヲ以テ勤王シ他日成効ヲ競フニ如カス、君必曰、我藩ニ以テ不可ト為サハ各藩不可ナルヘシ、朝廷ニシテ急務ナレハ我藩モ亦急務ナルヘシ、何ソ各別殊方ニセンヤ、僕又曰、若各藩ヲシテ着目一致吾藩ノ如ク人材乏シキ吾藩ノ如ク財力微弱吾藩ノ如クナラシムレハ寧蝦地ヲ棄テ、人智ヲ開カンカ、然レトモ各藩ノ着目既ニ殊ナレハ各其視ル所ヲ以テ勤王スルモ妨ケナシ、且材ノ多少財力ノ強弱自ラ同一ナラス、例之鍋島藩ノ如キハ財力アリ人材アリ且蒸氣船アリ其地亦海路蝦地ニ近シ、朝廷此ノ如キ藩ニ任シテ開拓セシムルハ任スル所ナキニ非ス、釧路三郡人既ニ争フ所ナレハ財力余アリテ争フ者ト着目此ニ在リテ争フ者トヲ問ハス之ニ任シテ可ナリ、我藩勤王ノ着目過日君ト論定スル所又変易ス可カラス、豈此ニ在ランヤ、若シ變シテ此ニ出ツレハ薩長肥ニ及ハサルコト論ナリ、所謂一ヲ失ヒ又二ヲ得サル者ナラン、君必曰、肥之ヲ開拓シ他年大利ヲ収メ、我其時ニ至リ臍ヲ嚙ミテ悔ルモ及フ可カラス、僕又曰、今日不可トナシテ開拓セサレハ他年他藩ノ

利ヲ見テ羨マサルハ素ヨリ定算ナレハ何ソ臍ヲ嚙マンヤ、彼レ開拓我レ開化各着目ヲ遂ケテ成功ヲ他日ニ競フモ亦勤王ナラスヤ、他日成功ヲ決シテ一笑スルモ亦樂事ナラスヤ、或人傍ニ在リ、君ヲ贊ケテ曰ン、蝦地実ニ開拓シ得レハ我藩永世ノ利ヲ專ラニス可シ、福山ハ既ニ奉還シテ永世我藩ノ所有ニ非ス、却テ海外ノ蝦地ヲ所有スルモ可ナラスヤ、僕曰、福山奉還ノ理ヲ推サハ蝦地モ亦奉還ス可シ、開拓ハ皇国勤王ノ為メナリヤ、抑モ我阿部家ノ私有トナサンカ為メナリヤ、君曰、何ソ私有ヲ論センヤ、夫レ標的ヲ達スルニ一藩財力足ラサルコト知ルヘシ、僅々十萬石ノ地ニシテ千方百術苦心尽力スルトモ其得ル所知ル可キノミ、却テ隔海ノ蝦地ニ至レハ海草・介鱗・熊・鹿・石炭・喬樹臣木之ヲ海浜山野ニ委棄シ、委棄セル天物宝山ヲナス、宝山ニ大利ヲ得テ我標的ヲ達スヘシ、然ラサレハ標的何ノ時ヲ待テ達セン、僕曰、宝山ノ天物之ヲ採ルニ人ヲ費シ金ヲ費シ之ヲ運輸スルニ蒸氣船ナクハ不可ナリ、天物山ノ如キト雖トモ其利否如何ヲ知ラス、所謂浮利孤注ノ策ナラサルヲ得ン

ヤ、十萬石ノ地僅々タリト雖トモ未タ全ク地力ヲ尽スト為サス、人力亦未タ尽スト為サス、智力未タ尽サ、ルハ論ナシ、英國ハ狭小ノ地ニシテ既ニ地力ヲ尽シ、地力不足ナリハ人力ヲ尽シ、人力不足ナレハ智力ヲ尽シ、造化ヲ窺ヒ幽理ヲ発シ國威ヲ滿天下ニ輝シ、到ル処海港十字旗ヲ翻サ、ルコトナシ、是レ英地狭小ヲ以テ論ス可カラサルナリ、亜墨文明開化ヲ大主標トシ漫ニ植民開墾ヲ主トセス、人智ヲ開キ民俗ヲ化シ四海其徳ヲ慕フ、是兩國ヲ以テ之ヲ觀レハ我藩地狭小ヲ以テ論ス可ラス、君曰、今日數萬金ヲ費シ他年幾百倍ノ大利ヲ得ルコト僕之ヲ確証ス、君ハ浮利トナシ僕ハ確証ス、君内ニ在テ開化セヨ、僕外ニ在テ開拓セン、得ル所ノ利ハ君ニ托シテ標的ヲ達センモ亦異途同帰ニシテ各其着目成効ヲ競ハン、亦君子ノ争ナラスヤ、僕曰、開拓寸陰ヲ争ヘハ開化亦寸陰ヲ争フ、開化シテ後開拓或行フ可シ、開拓シテ後開化恐クハ晩シ、今日ノ金之ヲ開化ニ用フルハ至急至要、餓ノ一食・渴者ノ一滴、今日ノ數萬ハ他年ノ幾百萬ノ用ヲナス、之ヲ取テ浮利ヲ射ルニ忍ヒンヤ、勢

並行セサレハ今日ニ之ヲ争フ、是レ君子ノ争ナラスヤ、虚氣平心無私ノ君子ニ非サレハ此開襟争論樂ヲ解スルコト能ハス、仮リニ僕議論一步ヲ退ケ異途同帰セントシテ果シテ君幾百倍ノ利ヲ得ルモ其利ヲ待テ然ル後開化セハ既ニ晩シ、開化ハ一朝一夕急遽得可カラス、永世ノ基礎ハ即是レ今日ノ急務、奚ソ他日ヲ俟ツ可ケンヤ、然ト雖トモ他日ノ利否ヲ今日ニ争フハ空論虚談ナリ、仮ニ大利得ヘキトシテ之ヲ論セン、夫蝦地ハ皇国北門ノ鎖鑰ナラスヤ、開拓寸陰分刻ヲ争フノ時ニ当リ力及フ所ノ金ヲ費シ之ヲ開拓スルモ尚及ハス、開テ一金ヲ得レハ一金ヲ増シテ開拓ヲ資ケ、百金ヲ得レハ百金ヲ増シ何ソ之ヲ割ヒテ他ニ用フルニ暇アランヤ、海濱ノ介鱗・山野ノ草木ハ皆是蝦地開拓天授ノ資金ナリ、豈天授ノ資金ヲ奪テ之ヲ隔海ノ用ニ費スノ理アランヤ、其ノ利ヲ論スルニ利得可カラス、仮令利ヲ得ルモ之ヲ隔海ニ費ス可ラス、之ヲ隔海ニ用ヒサレハ費用償フ可カラス、開化致ス可カラス、所謂標的達ス可カラス、過日論定スル所ハ君ノ記銘スル所ニシテ僕亦變スルコト能ハス、寧口之ヲ

今日ニ熟論スルハ同志親交ノ道ナランカ、虚氣平心千慮慮  
熟思シテ此書ヲ作り敢テ叱正ヲ祈り且君ノ再思ヲ請フ

益堅遠ク在藩ノ諸君近ク留邸ノ諸子ニ白ス、昨論議スル所  
蝦地開拓ノ説或ハ謂フ、事体重大地形隔絶其利不可必、而  
シテ藩財ヲ費ス必ス多シ、多ク財ヲ費シ必ス可カラサルノ  
危道ニ出ンヨリ学校ヲ盛ニシ智識材能ヲ達シ文明開化ノ民  
ヲ養成スレハ百利随テ生ス、即今ノ急務此策ニ出ルニ不如、  
何ソ蝦地開拓ノ為ニ窮余ノ残財ヲ分ツコトヲナサント、是  
レ此議論僕未タ其可否ヲ知ラサレトモ蝦地ノ大利後必ス藩  
力ヲ助クルノ良策タルヲ不顧ノ論也、請諸君ノ為ニ其大利  
ヲ弁セン、夫天地ノ間何ノ地力利ナカラン、何ノ物力利  
ナラサラン、今世ノ所謂商社也開港也舟車也皆利ノ大ヒナ  
ルモノ然リト雖モ、商社・開港・舟車損之破壊ノ患アリ、  
利ノアル所害モ又随テ生ス、惟土地ハ不然、歳ニ作毛豊歉  
ノ出入アリト雖モ天地自然所産ノ利必スヘシ、尽力益深ケ  
レハ其利愈多シ、人力決テ不盡地利決シテ不窮也、今我藩

所得蝦地三郡南北海岸十五里許東西四十里許、今ノ管内ニ  
比スレハ其広キ特ニ倍蓰什佰ノミナラス山海ノ所生石炭・  
昆布・熊・鹿・鰕・鮭・雜獸・雜魚ニ至ルマテ其利亦無尽、  
未タ耕種セスト雖モ土地ノ沃澆蝦地第一ト称ス、豈所謂宝  
山天府ナル者ナラスヤ、唯地広ク人少ク耕種其利ヲ発出ス  
ルコト能ハス、徒ニ山府ヲ遺棄スルヲ患フルノミ、苟モ開  
拓耕種ニ鉅万ヲ費セハ幾鉅万ノ利立ニ可得也、夫レ蝦地元  
吾版図ニ帰シテ今也其半夷人ノ有トナル、千秋ノ遺憾也、  
今尚所存ノ地亦魯人ノ垂涎スル処是以良公在時専ラ杞憂注  
意セラル、申是視之蝦地開拓ハ乃チ皇国北門ノ鎖鑰ヲ守ル  
ノ急ナル者ニシテ良公ノ遺緒継述ノ大ナル者也、假令無利  
ト雖モ憂国ノ志深キ者踊躍可進、況ヤ大利如此モノヲヤ、  
僕我藩ノ為メニ甚々惜ミ甚惑フ、今我管内人口周密男女六  
百強壯無病ヲ扱ヒ彼ノ地ニ移スト雖モ藩ノ田野荒蕪ノ無患  
ヲ保ツ、只室屋・飲食・衣服・器皿・農具ノ類或ハ或ハ運  
輸シ或ハ地ヲ画策ヲナシ職ヲ分チ力ヲ戮セ内外相助興利ノ  
道企足可俟ト雖モ其費用不少是亦大ニ惑フ、仍テ先ツ一年

二万金ヲ其用ニ供シ広田沃土藩力ニ応シ開拓シ、其地所産諸利是亦其用ニ供スルトキハ六七年ヲ不過シテ功驗必ス見ルヘキ也、朝廷素ヨリ開拓ノ期限ナシ、費金ノ定額モナケレハ尽力ノ深淺国財ノ多寡ニ由ルコト固也、然ル処我藩累歳兵戈加之昨秋ノ凶荒・楮幣ノ禁断国用罷耗杼柚殆ト尽ク、内治ノ費用猶且ツ不足歳ノ二万恐クハ出ス所ナカラン、然レトモ与フルノ取タルヲ知ルハ政ノ実濡手攫粟ハ貪者ノ慾、今ヨリ五年ノ間十万ノ金ヲ費ス可シ、其半ハ産物ヲ以償フニ足ル、十年ノ後功ノ漸ク成ルニ至レハ一年ノ利実ニ多シ、所謂月計足ラスシテ歳計余アル者也、切ニ願クハ箱館賞典六千石御家禄ニ附スルノ理ナキヲ以開拓ノ用ニ供スヘシ、其余不足ハ僕別ニ一策アリ、不仰福山宜ク其人ヲ撰ヒ深く委任セハ粉骨報効惟身力ノ在ル所死シテ後ニ已マン、夫開拓ノコト劳苦甚シ、人々好ム所ニ非ス、況ヤ従来沃土長シテ俄ニ北極絶海ノ地ニ移ルヲヤ、厚ク賞テ遣ルト雖モ猶移住ノ難ヲ患フ、若シ流竄ト同視スルトキハ金貨アリト雖モ移民ナカラン、故ニ恩ヲ厚クシ法則ヲ嚴ニシ地ヲ画シテ之

ニ与ヘ三年ノ後ニ至リ租税ヲ挙クヘシ、山海ノ獵漁ハ姑ク三公七民ノ制ニ隨ハ、上ニ費サスシテ三分ノ利ヲ得ヘシ、又ケペールニ彈藥ヲ副ヘテ五六百挺土人ニ渡セハ獸ヲ獲ル益夥シ、且非常ノ用ニモ供セン、是等開拓官方寸ノ間ニアルヘシ、我藩内ヲ図ルニ地方東西七里南北十七里ニ過キス、然シテ人民ノ衆十九万ノ数ニ居レハ仮令沃土澆地ト雖モ其遺利幾許モナキコト知ル可也、豈蝦地三郡海野ノ全利ヲ得ル者ト日ヲ同シテ論センヤ、区々眼前ノ細利ニ安シ座ラ百全ノ利ヲ棄テ良公ノ遺意ヲ失ヒ北門ノ鎖鑰ヲ廢ス、畢竟我藩沃土ニシテ寒餓ノ患ナク逸樂ニ安シ知見狭少ノ所致諸君何ソ利害ノ顛末ヲ原ねサルヤ、且北海道釧路石狩ヲ最トス、釧路中肥ノ所受ヲ上トス、吾三郡次之、良公ノ旧アルニ非ラサレハ何ソ我藩支配ノ命ヲ蒙ンヤ、既ニ願ヒ既ニ受ク、万々可辞ノ理ナシ、仮令理アルモ他日ノ大利必然ナルトキハ誰力敢テ是ヲ辞セン、且年ニ二万ノ費用ハ全藩ノ力ヲ以テ是ヲ弁ス、諸君苟モ同心併力セハ何ソ難キヲ患ンヤ、諸官費嚴シク濫出ヲ禁スレハ出ル所モ亦多カラン、既ニ我藩

ノ大利ヲ得、上ハ勤王ノ忠ヲ尽シ下ハ継述ノ孝ヲ致ス、諸君何ソ注意ノ不早ヤ、益堅世々鴻恩ヲ受ケ未タ報効ノ所ヲ不得、今大利手ニ落チテ諸君茫然不顧則僕忘身報國ノ秋也、豈緘黙シテ可ナランヤ、故ニ妄言茲ニ至ル、諸君幸ニ財扱セヨ、前日示サル大ニ学校ヲ興シ人材ヲ陶鎔シ智識ヲ開キ文明開化ノ俗天下ニ秀拔シ、朝廷若シ取ル所アラハ納言也參議也我学校中ヨリ其材ヲ出シ大ニ勤王ノ道ヲ尽サントス、是亦善事也、諸君夫レ幸ニ努力セヨ、僕決シテ是ヲ不妨、開拓成功ノ後ハ其財ヲ以其費用ヲ助クヘシ、諸君亦現今人民移住ノ費用ヲ不惜開拓ノ志ヲ遂ケシメヨ、道並ヒ行ハレテ不相悖、是天理自然也、詳悉ノ論ニ至リテハ蝦地一覽ノ後ニ附スヘシ

蝦地開拓云々、過日僕東京帰國ノ砌日夜討論遂ニ議論不合、其後神戸港并東京ヨリ度々不同意ノ報告、今般改而問答書ヲ以テ時勢ノ緩急・利害ノ得失・費用ノ増減等切実ノ議論教示ヲ受、再三熟考肺腑ニ銘シ感服ニ不堪ナリ、雖然僕素

ヨリ愚存ナキニ非ス、而短才不文底蘊不能尽其十一ト雖聊見ル所ヲ陣ヘ以君ノ参考ニ供ン、夫國家ノ治乱廢興ハ天運ノ然ラシム所ト雖人材ノ顯藏ニヨリ治乱隨テ遷転、是ヲ以君子ノ処事也、時勢ヲ料リ人情ヲ察シ事ヲ適宜ニ処シ自ヲ天理ヲ副シム、小人ノ処事也、思慮淺狹每事疑惑ヲ生シ遂ニ機會ヲ誤リ一事一物所成無キニ終リ而已一事一物其緩急次序ヲ察セサレハ事ヲ誤ルニ至ル、況ヤ國家天下ノ事ニ於テ乎、苟モ施為先後ノ序ヲ失フ時ハ仮令着眼何レニ在トモ恐クハ事成ヘキノ期ナシ、其所置方実ニ夫切ナル事ナリ、君ノ所標の方今之急務、素ヨリ同論決シテ變説スルニ非ス、而一步トテモ前進セサル可カラス、其手初ハ何ヲ以先ト為ン、是過日君ト論定スル所ノ学校ヲ盛ニシ人材ヲ養育スルニ在リ、学校ヲ盛ニスルハ會計ヲ以本トス、此又君ト日夜焦思殆策ノ成ルニ至リ、昨冬国札云々布告ヨリシテ大ニ失考ノコトアリ、然ル処僕早春東上滞留中伊藤大蔵少輔ヲ訪ヒ、国札云々ノ議論并理材ノ談話僕大ニ發明、終ニ其説ニ服従、其他岩倉卿へ謁シ政務ノ的論ヲ得、山田氏ニ會シ軍

務ノ制度、山口氏ヨリ外国ノ交際、他方有名家ヨリ学校ノ規則等種々確論ヲ聞処、出国ノ砌考ル所ト着眼齟齬大ニ發明ヲ得ル、依テ此上一際養育ノ手段ヲ為ント色々思慮ヲ運シ乍不及彼是尽力スト雖、何分規模狭少財本ノ事ニ至リ更ニ方向不相立ル処、彼ノ蝦夷開拓ノ御下問終ニ本使ヲ差向ラレシコト全ク理材ノ御主意ナラント思、又魯亜彼地蚕食既ニ唐フトニ及ヘリトキク、此ニ於テ僕初テ發憤、理材ノ本他ニ非ス此地工着眼スヘシト、且外国蚕食ノコト皇國ノ大辱、苟モ此域中ニ生ル者ハ一日安眠ス可ニ非スト決心、開拓使大主典相良某ヲ訪ヒ彼此形勢并魯亜蚕食云々委曲領承、尚又慨難切齒ニ不堪、況ヤ乍恐良徳公御在職中深く御憂慮、追々御手段ヲ被為下不計モ中途御長逝ノ次第等熟考実々袖手スルニ不堪、終ニ相良氏ト熟議右歎願書差出スコト也、来示曰、他境天授ノ資金ヲ以隔海ノ費用ニ充ルノ理ナシト、此論僕所不解、即今魯人開拓スルノコトニ付テモ大抵明晰ナラン、是皆本國ノ利益ヲ謀ラン為メ也、英仏等ノ富強皆諸方開拓土產租稅ヲ收入スルヲ以盛大ニ至ルナラ

ン、本朝々鮮ノ役・西土漢武ノ遠征皆土物租稅ヲ得富強ヲ為スノコトニ非スシテ何ヲカ為ンヤ、不然シテ妄ニ財貨ヲ費シ徒ニ人力ヲ勞シ無益ノ地ニ誰一人苦慮シテ此愚策ヲ為ンヤ、究竟万国ノ尽力スル処ハ寸地ヲ得ナレハ寸地ノ稅一物得レハ一物ノ益アル故ナリ、尤一步開ケハ夫丈ケノ費用勿論ノ儀ナレトモ、悉ク其地費用ニ充テハ所謂人ニ食ハルノ君子何ヲ以生活センヤ、且又窃々聞ク、魯國己ノ境内并属國中可開地ナキニ非ス、可收財ナキニ非ス、而シテ先ツ外境エカヲ尽シ寸地ヲ広メント欲ス処果何如ソヤ、僕愚昧其以然ル所ヲ不知ト雖モ、方今昇平國日ニ富強月ニ文明、己ノ境内仮令荒蕪ニ至ルトモ時勢ノ變遷ニ非レハ尺地ヲ失フ患ナカラン、是ノ故專ラ外境エ手ヲ下シカヲ尽シ寸土片金他方ノ財寶ヲ收取リ異日ノ費用ニ供セン為メ且舐糠及米ノ策ナラン、實ニ庸人ノ所不知其遠慮先見殆ト人智之極ナランカ、今ヤ幸ヒニ無事ノ時ニ至リ初テ悔悟臍臍トモ无及豈可不予憂乎、来示又曰、各藩ノ見込ヲ以勤王スルモ妨ナシト、僕又所不解ナリ、事宜ニヨリ素ヨリ左ニ有ル可キト

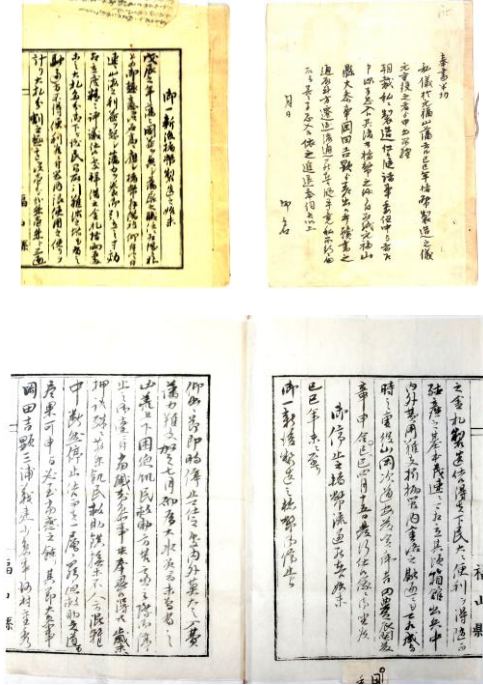
雖夫ノ蝦地ハ皇国北門鎖鑰容易ナラサル地ナリ、而シテ魯人駸々蚕食是則不戦シテ地ヲ奪レ不爭シテ財ヲ掠ラレ実ニ不堪切齒次第、庸人ハ砲丸迸散セサレハ大平无事ト思ヒ病ノ腠理ニ入ルヲ特ニ不悟ノミナラスシテ恬然不知、怪者アルモ亦浩歎ノ至ナラスヤ、利不利ハ姑サシヨキ我皇国ノ大患ト着眼スレハ片時モ捨置ヘキニ非ス、之ヲ譬フ、父母病時仮令其家貧囊骨ニ至ルト雖予メ入費ヲ厭ヒ一砭針ヲ下シ一葉草ヲ服サシメサル者アラシヤ、由此觀之則為其以子者束手傍觀其禍害ヲ他藩ニ委シテ之ヲ膜外視スヘケンヤ、モシ識見此ニ在サレハ今日ヨリ断然此処へ着眼スヘキ社以子ノ職分ナリ、況ヤ開拓シテ幾千万ノ大利ヲ得ニ於テ乎、且其ノ開拓タルヤ似難而実易シ、何則我藩ニ於テハ人口幸ニ夥多移住ノ都合ヲ得ルコト第一ノ便利、加之土民ハ財智ナクトモ壯健ニサヘアレハ勤苦次第如何トモ開拓ナル可ク、只為上者夫ヲ不倦シテ鼓舞作興スルコト真ニ緊要ノコトナリ、一步開ケハ一步ノ利、一木植レハ一木ノ益、日月ヲ追ヒ其利益眼前ニ差見百転決テ不動コトナリ、且又捨内務外

ハ本末ヲ失ト申説アリ、一ト通尤ノ事ナリ、雖然今日ノ大形勢ヲ以相考レハ決テ左ニ非ス、我領境ハ人口ノ繁殖政教ノ洽給人智之開クルニ随ヒ力ヲ不尽シテ自然ト開墾ナルヘク、遠隔ノ蝦地等ニ至リテハ人家稀少繁殖ノ種サヘ乏シク何以開墾ヲ望ム可シヤ、是ノ故外方エ手ヲ下スハ形勢ヲ察シ功業ヲ遠大ニ計ル所以ナリ、夫レ利興サントスルヤ速成ヲ欲スレハ却テ殆シ、無利ニ似テ結局利アルモノ真ノ利ト云ヘシ、僕未熟ト雖モ請フ、碁ヲ以テ此ヲ譬シ、其拙ナル者也小利ニ拘泥全勝ニ心ナシ、其巧ナル者也小利ヲ不顧抑着眼定心結局之勝ヲ期ス、是巧拙ノ大ニ相表裏スル処ナリ、此ノ理ヲ以テ此ヲ考レハ、今本邦如此形勢能ク結局之全勝ヲ究慮セサレハ富強盛榮之域ニ入ヤ真道路ヲ誤ラン、捨内務外ノ語事ニ寄ヘシ、然ルニ只々一向ニ開化ト申立ルハ恐クハ事ノ施為先後ヲ失フ者ナラスヤ、今般ノ拜命実ニ天与ニシテ我藩勤王ノ佳兆ナリ、此地ヨリ出ル所ノ利益ヲ以人材養育ノ基ヲ開キ開化ノ道ヲ益盛ニスルコトヲ得ハ国家ノ幸福何以過之、嗚呼大快事ナラスヤ、或人蝦地寒国諸種不

熟ト云、僕曰、素ヨリ南北ノ方位ニヨリ寒暄ノ相違アリ、然レトモ強チニ北ハ寒南ハ暄ト不可云、我福山ヨリ予山ヲ見ルカ如シ、春光満野草木萌芽ノ時ニ当リ予嶺猶皎雪ヲ戴ク、其ノ寒ナルコト推知スヘシ、是則造化自然ノ理也、其寒暄ニ随テ土宜アリ、五穀四木三草悉ク繁殖セサル亦当然ノ理ナリ、又天度ヲ推歩スルニ本邦南部辺四十度ニ当リ外国独乙倫敦ノ辺五十度ニ当レリ、又寒暖平均考ヲ見ルニ我津軽・松前辺極寒十二三度極暑五十度位英ノ倫敦ト同断、魯ノヘートルトニ至リテハ極寒十度ヨリ五度ニ至ル、極暑三十六七度ニ当レリ、此ヲ以比較スレハ釧路国ハ倫敦ト髣髴タラン、然レハ天度寒暖ニ因リ驚クヘキニ非ス、マシテヤ土地ノ广大我福山ニ数倍、寒暄宜ニ從テ尽地力時ハ何ヲ種テ不生何ヲ収テ不得、他日成功ノ利益豈大ナラスヤ盛ナラスヤ、僕ノ所見雖如此而未タ実檢セサレハ確証スルコト不能、依テ河村某等四五輩差向ケ土味ノ美惡・海運ノ便利・地方ノ宜物・獸魚ノ利益・開拓ノ會計等略定見ヲ立、再三熟議緩急次序ヲ見計ヒ其上ニテ手ヲ下ス積リナリ、然

レトモ僕固浅学遠識不相立、然ルニ斯ク大事件ヲ妄断、終ニ異日ノ大害ヲ生ルニ至ル時ハ天朝エ対シ勿論我藩エ面目無之、不忠ノ罪无所容君弥妄断我意ト為サハ速ニ其科ニ処スヘシ、僕甘シテ命ヲ受ヘシ、是レ僕ノ平生胸裏二期スル処ナリ、敢不肖ヲ以賢明ヲ不凌、君心ヲ煩スナカレ、猶予スルナカレ、僕ノ性質君ノ熟知スル所、凡事已ニ心ニ決スレ、則敢為勇往假命傍人百方雖誹謗而更ニ不屈撓、必ス成否ノ分界ニ至サレハ不止謂、斃而後已ト申処エ着眼、国家ノ為メ鞠躬尽瘁聊素餐ノ罪免レ度志願ナリ、古語云、操刀必割疑事无功、今日可為ノ時ニ当リ猶予狐疑果成何事哉、君宜熟考採択再答ヲ賜ハ僕ノ幸ヒ何ヲ以過之

# 御一新後楮幣製造之始末



明治二年（一八六九年）十二月、中央政府は府・藩・県による楮幣（紙幣）製造を禁止したが、福山藩では箱館出兵や水害による凶荒等により財政は極めて逼迫しており、その後も管内で紙幣の流通が続けられた。

本資料は、廃藩後の明治五年二月、福山県から名称が変わった深津県宛に差し出された旧藩主阿部正桓の進退伺いと、元大参事岡田吉顕による楮幣製造・流通の「不得止情実」を陳述した報告書の下書きである。

奉書半切

私儀於元福山藩去ル己巳年楮幣製造之儀、元重役之者方申出不経朝裁私ニ製造仕候段、諸事委任中与者乍申深奉恐入候、其後右楮幣之儀ニ付、別紙元福山県大参事岡田吉顕方差出候手續書之通、取計方遷延流通罷在候段、畢竟私不行届故与呉々奉恐入候、依之進退奉伺候、以上

月日

御名

御進退伺ニ添て御差出ニ相成分

〔貼紙〕

「此度進退伺首從ヲ分ち差出候様との事ニ付、小子壹人へ引受候訳ニも通り不申、関係之もの一同差出候様相成付、手續書少々相改別紙之通差出候間、御廻申上候事  
先日御廻し申候始末書ハ御取消可被下候」

御一新後楮幣製造之始末

戊辰之年藩々国益ヲ興シ藩屏之職任ニ相堪候様との御趣意ヲ以、石高二応シ楮幣拜借被仰付候ニ付、速ニ山海之利益

ヲ起シ藩力ヲ養御引立之寸効相立度精々評議仕候処、拝借之金札拾両・五兩等之大札多分御下ケ渡民間取引難渋之場も有之、融通方不得便利候ニ付管内限使用之便リヲ計リ、大札分割之趣意ヲ以壹分・貳朱・叁朱ト三通之金札製造仕候得者、下民大ニ便利ヲ得隨而殖産之基本茂速ニ可相立、其頃箱館出兵中内外費用難支折柄、管内金路之融通ニも可相成与時之重役山岡次道・安藤定虎・吉田豊辰・関藤章申合、用人之場ニテ會計兼務河村重秀・吉田豊文江相謀リ、己巳四月十五日発行仕候儀ニ御座候

#### 御停止之楮幣流通罷在候始末

己巳年末ニ至リ御一新後製造之楮幣御停止被仰出候節、即時停止可仕之処内外莫大之入費藩力難支、加之七月砌為大水災ニ而未曾有之凶荒上下困迫飢民救助方苦慮之際、御停止之御達ニ付当職知参事共奉畏候得共、歳末ニ押詰殊ニ前条飢民救助鎮撫等不人方混雜中、断然停止仕候而者一層窮迫救助之道も尽果可申与必至当惑之余リ、其節大参事岡田

吉頭・三浦義建、少参事河村重秀・檜崎元重・浜野義章、會計層役等種々評議仕候処、此俟通用停止仕候而者下民之疾苦不可言去迎別ニ手段も無之ニ付、不得止情実陳述仕一時御猶予之儀歎願可仕覚悟ニ而、不取敢其旨管内へ及布告置、庚午早春大参事三浦義建歎願書持参出京仕、其頃在職山口大藏大丞殿江歎願之趣旨内談仕候処、今度楮幣御停止之儀ハ全皇国一般之楮幣不条理ヲ御一洗可被遊朝旨ニ候間、国情ヲ以致歎願候迎決而御許容者有之間敷情実者無余儀事ニ候得共、是等之類諸藩ニ茂往々可有之候間、一藩ヲ許セハ各藩ニ及ひ一年ヲ許セハ又拾年ヲ許サ、ルヲ得ス、此辺之儀者素方御承知之上斯ク被仰出候事ニ付、是非御猶予ヲ願取候外無之与計リ相考候而ハ目途違ニ候間、先ツ其儀者不相叶事与存遠大之御趣意ニ基キ所置致可然、尤御布告ヲ期限与して下方之難渋ニ者一切無御構、一時ニ空物ニ可被遊との御趣意ニも可無之候間、何与歎目的ヲ立消却之道相運ヒ下民難渋不相成様取計候外ハ無之与内諭有之ニ付、持参之歎願書ハ不差出楮幣御届之惣高へも相除キ至急消却之

方法相立候方可然旨、其頃東京詰少参事大森益成卜相談之  
 上義建方申来候ニ付、吉頭等一同其事一決一途ニ消却之方  
 研究種々商議仕候処、兼而築造仕掛居候新涯庚午秋迄ニ者  
 粗落成可相成積ニ付、左スレハ右土地売払消却可仕与見込  
 日夜尽力苦心之余り尚会社ヲ起シ新涯築立勉勵罷在候処、  
 天災人事意外ニ出築立墓々敷運ヒ兼候付、去秋御届仕候会  
 社両替座ノ法ヲ設ケ、六月より月々消札仕居候次第ニ而最  
 初歎願書持参ハ仕候得共御許容無之儀ヲ恐察仕差出不申、  
 只々消却之実効可相立与存詰候得共、成功遅延ニ及ヒ候よ  
 り遷延流通仕居候儀ニ而毛頭別段之意底無御座候、庚午十  
 二月従来製造之楮幣ニ夕通充差出候様御布告有之候ニ付、  
 辛未春ニ夕通差出候節茂既前文之手続ニ成移居、消却一途  
 ニ苦心罷在候折柄ニ付新造楮幣之見本者指出不申候処、六  
 月ニ至リ御一新後製造之楮幣今以致通用候向茂有之哉ニ相  
 聞ヘ以之外之事ニ候、早々廃止可致云々嚴重之御布令翌月  
 県地ヘ相達候付、一同恐入吉頭出京従来之目算苦情哀訴可  
 仕覚悟ニ罷在候処、引続御一新前後之製造ニ不拘楮幣都而

御引替可相成旨被仰出候間、吉頭出京仕其頃在職安場大蔵  
 大丞殿へ前条之手続縷々申述別紙歎願并始末書差出置候処、  
 其後大蔵省方吉頭御呼出右歎願之趣旨無余儀情実ニ付御省  
 儀可相成旨安場大丞殿方被申談候間、其後之御沙汰奉待居  
 候次第ニ御座候、畢竟発行已来前文之通諸事違算卜相成其  
 内天災事変も有之候得共、要スルニ在職之者見込之実効不  
 相奉今日迄遷延流通仕居不都合之段、深奉恐入候次第ニ御  
 座候事

元福山県大参事

岡田吉頭

深津県

御中

# 御一新後製造楮幣消却方

## 再評歎願并勘定書



明治二年（一八六九年）、中央政府が藩札製造を禁止して流通高の報告を求めた時、福山藩では旧幕府許可分のみ報告し、維新後発行の金札は新田開発によって消却するとの目論みで報告しなかった。藩財政悪化で見込みの実効が上がらない中、明治四年に維新前後に拘わらず藩札は政府が統一的に引き換えるという方針が示される。本資料は、元福山県が新田開発計画を含めた藩札消却方法について、深津県に提出した歎願書の控えである。

御一新以来製造仕候楮幣之儀者兼而土地ヲ以消却之目的ニ付、去未秋当県楮幣製造之始末御届申上、新涯地代金并貸附之楮幣ヲ取立可成丈消却仕、残り七万六千三百五両壹分余御引替之儀奉歎願置候得共、其後退而熟慮仕候得者、去秋御一新前後ニ不拘都而御引替可被成下旨被仰出候楮幣者、旧幕許可并御一新後之製造ニ而茂御停止被仰出候砌、早速ニ情実申出候分ニ而当県之如く申上及遅延候分者、曾而御承知不被為在儀ニ付御引換不被成下御筋合ニ茂可有之哉与奉恐察、益以恐入候計ニ候、依之旧臘再評之上兼而楮幣消却ニ尽力、山波村・津之下村・箕島浦三ヶ所新涯築立罷在候社中江相謀リ、消却之數増益之為メ会社ヲ解キ、官築松永沖塩浜卜合計式百八十四町歩之土地ヲ以、即今之流通高拾三万八千四十五両三朱、及是迄社中出銀高三万四千四百七十壹兩三分壹朱、立戻可申分共合拾七万式千五百拾七兩余ニ引当候得者、塩浜一丁ニ付千百八十五兩式朱余、田畑壹反ニ付五十六兩式分一朱余之割合ニ相当リ申候、尤売捌之遅速緩急者其時之模様ニ寄難預期候得共、是迄新地売払

之代銀ニ比較仕相当安廉之実価ト奉存候間、別紙勘定書之通此土地を以消札之準備略相立可申哉与奉存候、然ル処右新地式百拾四丁步出来後之修繕、并七拾丁步築立手残入費共凡弍万五千九十九兩余、遣弘方之儀ハ先般大藏省へ差出候、管下へ貸付金十万兩返納之分を以漸く転用仕候へ者、前文式百八十四丁步之新地急度成功可仕奉存候、抑旧藩制中楮幣之員数右様不都束ニ相嵩候次第ニ立至リ候儀も、癸丑以来学校兵備等之費用年々増加疲弊之末、近年ニ至リ兵制变革八大隊編伍・器械彈藥之手当・各地出兵之軍費・旧知事家族藩士卒西移之用度・水災凶荒之修理救助其他通商之損失等、其頃之歳入を以歳出ト差引算勘仕候得者、凡五十余万兩余之不足高ニ相成逆茂難取続処可也、今日迄維持仕来候者全楮幣之融通ニより相凌候儀ニ御座候、尤右之如ク諸事藩力不相応之処置ニ出候儀も、一途ニ藩屏之職分相尽度心得ニ而日夜精励仕居候事、今日ニ至リ一々見込違ト相成不都合之次第不堪追悔候へ共、従前御委任中藩力不相応之御用相勤候時節モ有之候得者、拙誤浪費ニ属候事件ハ

差置出兵御用費ヲ始己巳之水災凶荒ニ付、土地之修理・人民之救助等無抛入費、并今日現存之文武諸器械等御收納外ニ而弁済仕候丈ケニ而も莫大之失費ニ付、右貸附有金モ疾ニ尽果可申之処、今日迄存在仕居候者全楮幣之蓄積致し居候ものと奉存、右を建築之資本ニ充テ出来之土地代銀を以楮幣ヲ引上ケ候者、楮幣ヲ以楮幣ヲ消却仕候見込ニ御座候処、昨秋有金ニ立御届仕候上ハ惣而御收納蓄積之姿ニ相見へ候間、今更従前見込之次第申出候而ハ、敢而辞ヲ托シ罪跡ヲ取繕候様相聞へ可申哉ト深く心痛仕候得共、是迄之行成リ非常之差繰不仕候而ハ取続兼候実跡、且右十万金之貸附元来御收納蓄積ニ無之、楮幣消却之資本ト被為思召分、此資本ヲ以前条式百八十四丁步之土地大丈夫ニ築立、尚又田畑ヲ転シ尽ク塩浜ニ取立候得ハ、往古方松永塩格段ニ塩気強北海道ニ於テ不可欠上品之聞へ茂有之土地柄ニ付、壹反歩ノ代金田価弍三倍之売上高ニ茂相成リ可申、就而ハ御收納之増益及地方繁荣之効驗追々相顕候得者、見込之志願茂相達シ聊御申訳可相立哉ト奉存候、何分御引渡之際ニ臨

ミ、築立之土地并資本見込之金員共悉皆差出御裁断ヲ仰キ待罪罷在候上ハ、利害得失可問之条理ハ無御座候得共、折角海上平穩土石持運ヒ安ク且農隙之折柄、建築便宜之時節ニ当リ其俣打置、是迄之寸効も日々減却仕居候遺憾之心事御憫憐被成下、御停止後等閑ニ流通仕置候取計ニ於テハ如何様ニ茂御譴責被仰付、田畑之儀ハ売捌之緩急ニ不拘相当之実価有之上ハ土地御買上同様之御趣意ヲ以一時正金御下ケ渡被成下御停止之楮幣引揚候歟、或ハ土地引当之準備相立候上ハ結局空物ニ無之訳を以御一新後之製造ニ而モ御引換可被成下部分へ御加入被成下候歟、何レニ而も下方難渋ニ不相成様御処分奉仰候、最前御停止被仰出候節申出遅延仕候茂、畢竟俄ニ流通差止候而者下民之困難深心痛仕候ヨリ差起候儀ニテ、其砌万々消却之目的無御座候へハ却而速ニ苦情可申上之処、兼而土地を以消却之事ニ注意罷在大旨之胸算も相立候折柄、迎茂歎願ハ難相叶御模様ニ茂有之旁、可相成ハ御苦勞不奉備御承知不被為在内ニも悉皆引揚、上下へ申開キ仕度心事ニ而他念無御座候間歎願ハ差扣候得共、

御停止之御布令有之候ニ付而者追而引換可遣旨触示シ置、新涯築造一途ニ尽力罷在候処、不幸ニシテ昨五月之天災方意外之冗費相嵩ミ、見込之実効不相拵此際ニ押寄前後不都束之次第、何共申上様無御座万々奉恐入候、以上

壬申二月

元福山県

深津県

御中

# 元福山県私造楮幣之儀ニ付添書



維新後の藩札通用と消却の方法について、元福山県が深津県に提出した歎願書を、深津県が政府に取り次ぐにあたって付けた添え書きの控え。深津県は新開地築建の進捗状況と地味を实地に検分した上で、元福山県の窮状と努力に理解を示し、「歎願之趣旨厚ク御憐察御許容相成候様：」と結んでいる。

## 元福山県私造楮幣之儀ニ付添書

当管下元福山県御一新後製造楮幣之儀、不容易事件ニ候処条理ヲ以テ其律ヲ正サレ候得者、関係之旧官員ヲ御処置被仰付候而已ニテ其楮幣ニ於テハ依然存在シ、結局朝廷之御損失ハ論ヲ待ス、御多端之御場合余分之御苦勞奉備候儀ト深ク恐入苦慮仕候得共、書面上之議論而已ニテハ確乎之見込モ難相立、寧口入県之上実地ニ就キ詮議ヲ遂ケ、旧官員ヲ督責シ消却之実効立サセ度心得者兼テ申上置候次第ニ候処、既ニ入県以来今日迄切迫ニ論究シ精ニ差繰消却方尽力致サセ候得共、則別紙歎願書ニ相願レ候通新涯土地代金ヲ以消却ニ充ル之外手段モ無之ニ付、数ヶ所之新涯実見候処山波村ニヶ所ハ殆ト落成ニ至リ、其土地沃饒最モ綿ニ宜シク備後第一之名産ト称スルハ則此新涯地山波松永接壤之産ニシテ、田価之貴キ関東陸奥同日之論ニアラス、松永村相生新涯十九町歩ハ塩浜之見込ニテ堤内之普請半途ニシテ止モノト雖モ、一増之高価ニ相成ヘク追々懇望之者モ有之、代金上納之緩急ニ寄り三万両ニモ売却ケ可申模様ニ相聞、

其内殆ト出来上リ之一浜一町九反歩ニテ、楮幣百三十五匁相場三千二百兩ニケ年納ニテ相求候者有之候、津ノ下ハ其地味山波ニ次ク、当春カ鋳入起シ返シ等相始メ小作仕附ニ取掛居候、箕嶋ハ「欄外」付札 此新涯地代金上納之代トシテ、上流水捌キ為同所中腹ノ山ヲ切抜候勞費許多之由ニ御座候」右三ヶ所ニ比較シ地味少シ下等ニ相見ヘ候得共、夫レ是レ平均致シ候得者消却之資本十分相立可申、然ルニ九切ノ功一簣ニ欠クノ場ニ至リ、此上纔力二万兩位ノ入費ニテ右五ヶ所ノ新涯大大丈ニ成功ヲ奏スヘキ之処廃棄被仰出、兼テ資本見込之貸附金等挙テ差出一金モ私スル事能ハス其俣打捨置キ、何ヲ以入費ニ充ヘキ方向難相立ニ付、右貸附金今日迄存在スルノ原由ヲ説来リ、転用願出候段情実無余儀モ相聞ヘ候得共、畢竟御厄介相願此上モ御苦勞奉備ノ条理ヲ詰メ督責致シ候処、終ニ会社両替座基立之節下ケ渡候金札五万兩ハ、楮幣惣數消却濟之上社中ヘ令分賦候約定ニ付、右之内私造楮幣之歩分ニ相当候一万五千四百二兩壹分余ヲ以向後修築ノ資本ニ下渡具候様、別紙願立之儀ハ

曲テ辞ヲ托シ候ニモ無之、有体ノ申立ニテ頗ル条理ヲ不失候間御差許可然ト奉存候、元来此県兼テ富有之聞ヘ有之候得共、篤ト探究候処金貸ノ弗乏底ヲ叩キ、不相応ノ家祿并文武之分穀・武器・文籍之充実・兵式之嚴整等実ニ近隣ヲ圧スル勢、則楮幣融通之驗ニシテ他ノ子細無之儀、大抵歎願面ニ相頭候趣ニ相違無之相見申候、貸附金ト相唱ヘ候モノモ旧来ノ仕組ニテ、凶荒非常之備或ハ諸役場之仕法金其外払物ニテ漸々積来、数十年之転用ヲ以テ此高ニ相成候辛苦ノ貯蓄ニ候得者、官物トハ申条公私ノ分界判然タラス、旧知事ノ処断ニテハ士民ヘ分配致シ候迎敢テ追問スヘキ程ノモノニモ無之候処、何事モ有之俣御届申上候故消却目的ノ資本ハ有之候テモ一金モ使用ヲ得ス、進退是谷ルノ情実愍然之儀モ有之、且此貸附有金ハ尽ク旧来ノ楮幣ニテ他日御引替相成ヘキ物ニ候得者最早空物ニ均シク、当今はヲ転用シ消却ノ資本ニ充ツルハ則空物ヲ以実価ニ換ルノ理ニテ、聊朝廷ノ御損失ニ不相成而已ナラス、永世不朽之御收納増益致シ候儀ニテ、往々管内之繁榮モ自ラ其中ニ存スレハ、

別紙転用願立之儀其処置方ニ於テハ策ノ得モノト云ヘシ、  
 何分最前不審ノ念ナキニアラス、旧知事并士族卒之家禄へ  
 分配御苦勞不奉備様為致度頗ニ督責致シ候得共、旧知事家  
 禄之内「欄外」一付札 一七千九拾壹石八斗二升 内 千六  
 百六拾七石四斗（阿部正桓家禄之内三步引） 五千四百二  
 拾四石四斗二升（士族卒家禄之内二分引）三割士族卒、忒  
 割ヲ以負債支消ニ引当候儀ハ既ニ伺出引取有之候処、尚又  
 家禄へ分配消札之儀、楮幣関係之旧官員御処置之上ハ格別  
 之事恬顔向人説諭難渋之趣ヲ以、兎ニ角専ラ関係之者へ引  
 請消却仕度段再三相歎出候儀ニ御座候間、会社両替座消札  
 之高ニ準シ分与可致約定之金員五万兩ノ内、壹万七千百四  
 十九兩壹分余ハ歎願之通御下渡可然奉存候、此儀御許容之  
 上ハ其効モ亦案外速ニ相運可申候、抑楮幣製造モ御一新後  
 トハ申条未タ封建ノ余習依然相存シ、朝廷ノ御処置亦今日  
 之御体裁ニモ無之、一言ニ申セバ請持中之所為ニ出テ候事  
 ニテ其発行ハ己巳四月中之事ナリ、天下各藩贖金製造御大  
 禁々ニ、箱館平定ヲ境ニシテ寛典被仰出更ニ其罪ヲ問ハセ

ラレス、此楮幣モ御布告之砌前文貸附金等之差繰ヲ以消却  
 致シ置候得者、総テ赦前之事ニテ敢テ御取糺無之トモ相濟  
 候モノ歟ト被存候得ハ、斯迄実効相運ヒ尚担当尽力罷在候  
 上ハ、歎願之趣旨厚ク御憐察御許容相成候様仕度候、実地  
 実情検査之見込具ニ言上仕候、以上

壬申

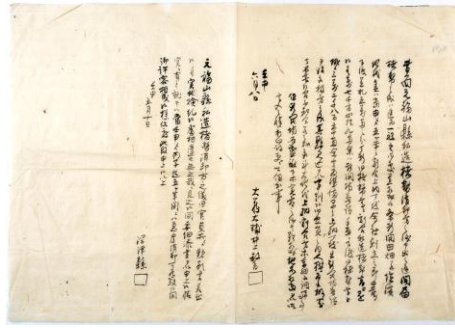
五月

深津県



# 書面元福山県私造楮幣

## 消却方之儀申出之通聞届



明治五年（一八七二年）元福山県が提出した藩札消却の歎願書に対して、政府からの返書と深津県が政府に取り次いだ書類の写し。かつて会社（報国両替社）に藩庁が出資した天札五万両のうちの一七、一四九両余を新開開発に充てるよう指令されている。

この後同年八月、深津県から改称した小田県が布告を發して、藩札の引き換えは小田県が引き継ぐことになる。

### 書面元福山県私造楮幣消却方之儀申出之通聞届

楮幣之儀ハ追而一般之御処置相成候条、新開田畑并塩浜地代金ハ当申方五ヶ年ニ割合上納可致、会社創立之節旧藩

下渡金札五万両之分者新旧楮幣高二割合、私造楮幣高江懸候壹万七千四百拾九兩余ハ新開場普請手当ニ下渡、旧楮幣高江掛候三万二千八百五十兩余者為準備早々上納可致、且新開場普請ヲ始取扱方之儀、其県見込ヲ以事馴候旧官員之内人撰為取扱候儀者不苦候間、不都合無之様取計右地代上納割合方等委細取調可申出事

但、新開場石盛鍬下等寛容之儀者難相成地所相当ヲ以御高入之積相心得、更ニ可伺出事

壬申

六月八日

大藏大輔 井上馨



元福山県私造楮幣消却方之儀、旧官員共方歎願書差出候ニ付実地檢札候処、相違モ無之哉ニ見込候間委細添書ヲ以申上候情実ニ有之、就テハ当壬申方丙子迄五ヶ年間ニハ急度消却可為致候間、御許容相成候様仕度此段申上候、以上

壬申

五月十日

深津県



# 旧福山藩士履歴書



幕末動乱期に活躍した福山藩士七名、即ち山岡迂柄・安藤藤斎・吉田豊辰・斎藤素軒・大森操兵衛・関藤藤陰・山岡八十郎の履歴書。  
表紙の貼り紙には、明治二十七年五月に、深津・沼隈・安那三郡の郡長であった岡田吉顕より、広島県庁へ差出されたものの写しであり、編纂は関藤成緒・大和敬一郎兩人によると書かれている。

〔貼紙〕

「一山岡迂柄 安藤々斎 吉田豊辰 一綴

一斎藤素軒 一綴

一大森操兵衛 一綴

一関藤々陰 一綴

一山岡八十郎 一綴

右履歴書ハ明治廿七年五月深津郡外二郡郡長岡田吉顕ヨリ広島県庁へ差出シタルモノニシテ、右写書ヲ此方へ岡田郡長より指越セリ

此編纂ハ関藤成緒・大和敬一郎兩人ニテ成ルト云フ」

山岡迂柄

安藤藤斎 履歴書

吉田豊辰 (マヤ)

旧福山藩士

文政二年八月晦日生

故山岡迂柄

同  
文化十一年十一月十五日生 故安藤藤齋

同  
文政七年七月廿五日生 正八位 吉田豊辰

右三人家世ニ福山藩ニ仕ヘ阿部氏ノ老臣ニ列ス、嘉永・安政ノ間政事ニ参与シ共ニ甘苦ヲ同フシ、夙ニ勤王ノ志ヲ抱キ内外多事ニ際シ其衝ニ当レリ、時ニ藩主阿部正弘幕府ノ閣老タリ、福山ニ江戸邸ニ文武館ヲ創設シ、三人ニ命シ士氣ヲ鼓舞シ文武ヲ奮興セシメ、其間諸藩ノ士ニ接シ往来周旋スルコト藩ノ宰臣中三人ヲ以テ最トス、藩政ノ更始藩論ノ一定三人与リテ、国家危急ノ際三人同心死ヲ以テ矢ヒ、正弘ノ志ヲ体シ京師ニ周旋シ尊攘ノ議ヲ唱ヘ出入時ナク遊説万端、藩主ヲ輔ケ上疏数章ニ及ブ、最後閣老幕府ノ忌諱ニ触レ將ニ死ヲ賜ントシ後命シテ退隱セシム、後三人陽ニ風雅ニ耽リ陰ニハ其志ヲ行ント欲シ、終始其心ヲ同フシ其進退出処同シク其行事同シク其年齢モ幾ント同クシテ吉田豊辰最少ナシ、迂柄・藤齋先チテ死シ豊辰独今尚存セリ、

其行蹟ノ顛末相同シキヲ以テ三人合叙シ其迹ノ最モ明確ナルモノヲ挙ク、一人ニ関スル事迹ト其性行ノ如キハ各異同アルヲ以テ左ニ先ツ小伝ヲ録ス

山岡迂柄行状ノ略

迂柄初メ治左衛門ト称ス、支族山岡源左衛門ノ次男八十郎ノ弟宗家ヲ嗣ク、性質沈毅・誠実・洒灑辺幅ヲ修メズ事ヲ処スル、敦篤下ヲ御スル、寛厚人其徳ヲ欣慕ス、幼ヨリ志氣衆ニ超ヘ著宿ト雖トモ往々瞠若スルモノアリ、藩主正弘幕府ノ閣老トナルヤ治左衛門公用人ニ任セラレ大ニ寵用スル所ト為リ機密ニ参ス、後重ヲ委ね大用セラレテ国政ヲ執ル、弘化・嘉永ノ間天下ノ大勢ヲ察シ慷慨悲憤、夙ニ勤王ノ志ヲ抱キ諸藩ノ形勢ヲ視察シ東奔西走、諸藩ノ志士ト謀リ力ヲ国事ニ竭ス、藩主之ヲ信任ス、幾モナク正弘卒シ正教嗣立、僅ニ数年ニシテ卒シ正方嗣立、文久・元治ノ際京師ニ入り織馬・助左衛門ト国事ニ奔走シ共ニ藩論ノ主義ヲ伸ベ勤王ノ諸藩ト心ヲ協セ上疏シテ其志ヲ言フ、其王事ニ奔走セルモノハ共ニ後文ニ挙ク、

没スルヤ五十有四

安藤藤齋行状ノ略

藤齋初ヲ織馬ト称ス、三浦音人ノ次男、安藤外記ノ養子、性質剛毅・忠純、幼ヨリ気概アリ、識見夙成文武ニ志シ都テ氣ヲ以テ勝ツ、長シテ国政ヲ執リ經濟ニ志シ世事ニ老ケ一藩望ヲ属シ夙ニ尊攘ノ志篤ク武備ヲ修理シ士氣ヲ奮勵シ、自ラ請テ兵法ヲ会津ニ学ビ業成リ藩ニ還リ藩士ニ兵法ヲ修練セシム、後専ラ藩政ニ任シ内外多事ノ際、入テハ国政ヲ議シ出テハ諸藩ニ往来シ奉勅敵愾ノ志ヲ遂ント欲ス、正弘卒シ嗣主ヲ輔ケテ其志ヲ行ントス、後正方嗣立年猶少ナリ時ニ国事繁興、外患日迫ル京師ニ周旋シ藩論ノ主義ヲ説キ諸藩ノ協同ヲ謀リ藩主ヲシテ幕府ニ諫書ヲ上リ、或ハ八幡宮ニ在リ或ハ京師ニ在リ諸藩ノ志士ニ交ル、其事迹ノ王事ニ係ルモノハ後文ニ挙ク、其没スルヤ七十余

吉田豊辰行状ノ略

豊辰初メ助左衛門ト称ス、新居頼母ノ三男出テ吉田助右

衛門ノ嗣トナル、性質正誠淳樸、内剛直ニシテ外温厚、人ニ接スル矜域ヲ設ケズ、一ニ忠実ヲ以テ事ヲ処ス、少ヨリ文武ニ志シ最モ射術ヲ善シ家伝日置流ノ射訣ヲ伝ヘ一藩之ヲ矜式ス、文ハ国書ヲ嗜ミ敬神ノ志篤ク藩学ニ国史寮ヲ置キ皇典ヲ講授セシム、野々口隆正・鈴木重胤ヲ招聘ス、後藩政ニ服シ大用セラル、ニ及ンテ政務ヲ勵ミ専ラ尊攘ノ事ヲ務ム、文久元年ノ間京師ニ到リ勤王諸藩ノ間ニ周旋シ危疑ノ際備ニ艱險ヲ踏ミ一意其志ヲ行ント欲ス、其事ノ王事ニ関スルモノハ三人相共ニ為ス所ニシテ京師ノ周旋最力メリ、明治元年六月藩主阿部正桓上京、岩倉輔相ニ謁見ス、助左衛門従フ、公召見ヲ賜リ曰ク、其藩従来国論一定シ朝廷ノ為メ勤勞ス、且卿等春初以来国家ノ為メ苦心スル所アリ、嘉尚スベシ、今ヤ王政維新益々精勵努力セヨト、助左衛門泣拜シテ退ク、其勤王ノ志終始一ノ如ク闔藩敬服シテ今其德ヲ称セリ、後沼名前神社宮司ニ拜命、正八位ニ叙セラル、其事迹ノ三人ト共ニ与ニセルモノハ後文ニ挙ク、今年歳七十一

安政六年己未四月吉田助左衛門福山ニ在リ、文武総裁ト為リ藩士ヲシテ尽ク其業ニ就カシメ考試ノ法ヲ設ケ勵精鼓舞ス、此時ニ当リ山野ニ營ヲ張り海ニ馬ヲ泗シ或ハ介冑ヲ擐シ城内ヲ巡行シ務テ武事ヲ終練ス

万延元年庚申三月安藤織馬会津ニ赴キ長沼流ノ兵法ヲ学ヒ藩ニ還リ講武場ヲ開キ進退ノ節度ヲ習ハシ行陣ノ法ヲ講ス同年山岡治左衛門江戸邸ニ在リ、文武総裁ト為リ東西相謀リ其制ヲ一ニシ文武ノ業ヲ修メシム

文久二年攘夷ノ勅下リ諸藩議論紛起、洋艦浪華ニ泊シ京師ヲ犯サントスルノ説アリ、諸侯多クハ江戸ニ在リ、京畿ノ警備未タ其設アラズ、三人胥議シ藩主正方ニ白シ京畿ノ要地ヲ守ランコトヲ奏請セント欲ス、助左衛門会津藩邸ニ赴キ其説ヲ納レ且上書ス

文久三年三月晦日八幡警衛ノ命下ル、正方、治左衛門・織馬ヲシテ先ツ八幡陣営ヲ請取ラシム、是時助左衛門京師ニ到リ大森操兵衛・斉藤甚左衛門ト公卿ニ祇謁シ諸藩ニ周旋シ形情ヲ探知シ八幡營ト往来相議之後、織馬・治左衛門亦

京ニ入り共ニ奔走シ諸藩ノ老臣ト合議スル所アリ

是時將軍京師ニ在リ、攘夷ノ期日ニ迫リ諸藩ノ志士空湧、群衆殺氣路ニ盈ツ、三人危ヲ踏ミ死ヲ冒シ周旋至ラサルハナシ、遊説奔走ノ間死ニ瀕スルコト数ナリ、幕吏其踪跡ヲ探リ挙動ヲ伺フ、幾モナク將軍還府ノ説起リ都下騷擾巷議湧起ス、三人上疏、還府ヲ止メ輦下ヲ守護シ諸藩ノ京ニ在ルモノヲ鎮撫シ宸襟ヲ安シ奉リ天幕合体国家ノ基本ヲ立テ恭順臣道ヲ竭サンコトヲ欲ス、是ヲ以テ織馬、助左衛門・操兵衛ト桑名・高田・大垣・郡山・淀等ノ諸藩ニ從合シ幕府ニ諫書ヲ上ンコトヲ謀リ、先ツ会津侯・水野侯ニ上疏シ

(上疏ノ写卷末ニ付ス) 還府ヲ止ムルコトヲ請フ、同年五月廿三日織馬、松山藩山田安五郎ニ詣リ還府ヲ止ムルコトヲ論ス、説協ハズ、其翌会津藩野村左兵衛ヲ訪フ、同廿九日高田藩へ遊説、大垣藩老臣河島八左衛門ト同道、復々高田藩ニ造り相共ニ將軍還府ヲ止ムルコトヲ請フ

同廿五日助左衛門、水戸藩大野健介ニ詣リ事ヲ謀リ遂ニ藩公ニ謁見セントシ成ラス、織馬大垣藩ニ到リ議合ヒ共ニ榊

原藩ニ到リ議ス

同日助左衛門、水戸藩原市之進ニ会シ還府ノ得失ヲ論ス、

同月晦日織馬、桑名侯老臣服部伊賀ニ遊説ス、六月朔日織

馬・助左衛門、会藩野村左兵衛ニ会シ建白ノ旨意ヲ議ス

同月廿八日助左衛門、桑名藩老臣吉村半右衛門ニ到リ、織

馬ト共ニ板倉侯用人山田安五郎・水野侯老臣岩崎彦右衛門

ニ到リ、天下ノ大勢ヲ論シ且ツ公武一体ノ主要ナルヲ説キ

還府ノ利害ニ及ブ議論剴切天明ニ至ル、二藩辞シテ聴カズ

六月二日同志ノ諸藩ト議シ上書留京鎮撫センコトヲ請フ書

稿成リ水野閣老へ織馬、会津侯へ助左衛門各々上書ヲ携へ

到ル、会侯其志ニ感シ急ニ其藩ノ三老臣ニ命シ助左衛門ノ

寓居ニ来リ面議セシム、談論夜ヲ徹ス

同月三日助左衛門水藩ニ到リ大森操兵衛尾藩ニ到リ各疏ヲ

上ル

同月八日將軍闕ヲ辞シ府ニ還ラントス、三人各一橋公・会

津侯ニ建白シ強諫セント請フ、原一之進・梅沢孫太郎其誠

実國ノ為ニ尽ス所アルヲ感シ其主一橋公ニ言フ、時ニ還府

既ニ決スルヲ以テ議行ハレズ

同月十三日織馬、会藩野村左兵衛ニ到リ八幡警衛ニ関スル

方略関門ノ修築ヲ謀ル

七月十九日藩主正方上京ス、鷹司殿下問スル所アリ、召見

シテ曰ク、攘夷ノ勅命関東ニ下ル、然ルニ因循叡旨ヲ遵奉

セズ、諸藩親征ニ先チ攘夷スルノ策アリヤ如何、正方退キ

宰臣ヲシテ議セシメ廿一日上疏藩論ヲ陳ス、即日伝奏命ヲ

伝へ参内スベシ、廿二日正方参内、竜顔ニ咫尺シ天盃ヲ賜

ハル、退朝老臣及事ニ関スルモノヲ召シ今日ノ寵榮皆再等

勤王ノ事ニ努力スルヲ以テナリ

七月廿六日長州藩周旋方中村九郎・佐々木男也来ル、織馬・

助左衛門・大森操兵衛等ハ問答余力ヲ遺サズ、其大要ハ尊

王攘夷粉骨碎身死アリテ已ムノ語ニ止リ藩論ノ大旨ヲ述べ

相誓フテ去ル、此ヨリ後治左衛門八幡營ヨリ入京、諸藩ニ

周旋スルコト虚日ナシ、往復其意ヲ通スルモノハ水藩・会

尾藩・因藩等ニシテ連合、幕府へ諫書ヲ上ル、治左衛門江

戸ニ到リ邸内ノ藩士ヲ警戒シ嚮背ヲ謬ラサラシメス、且在

京ノ藩士ト相謀リ幕府ノ挙動ヲ伺察ス

八月五日正方八幡營ニ至ル、治左衛門江戸ヨリ還ル、織馬・助左衛門ハ留京

同月十八日堺御門変起ル、助左衛門会津藩ニ到リ八幡警衛ノ方略如何スベキヲ問フ、且ツ曰ク、今日ノ事如何ン、秋月梯次郎其由ヲ告ク、助左衛門急ヲ八幡ニ報ス、正方八幡營ヨリ急騎入京直ニ参内ス、織馬・治左衛門・助左衛門共ニ随從セリ、織馬兵ヲ率ヒテ警衛シ助左衛門諸藩ノ謀議ニ参シ且ツ公卿ノ間ニ周旋ス

八月廿七日三老臣以下正方ノ前ニ列シ藩論ノ大要ヲ論ス、其略ニ曰ク、攘夷ノ大典既ニ其期ニ及ブ、而テ国内人心一致セサレハ成功ヲ見ル能ハズ若カズ、諸藩ニ結ヒ幕府ヲ諫ムルニ死ヲ以テシ誠ヲ到スベキニ是ニ於テ三老臣以下材幹ノ士ヲ撰ヒ専ラ奔走遊説セシム

十月七日禁闕守衛ニ勞スルヲ以テ金壹万匹下シ賜リ藩士ニ分賜ス

十一月九日禁闕守衛ニカヲ尽シ王事ニ勤勞セシコトヲ勸感

アラセラレ勅命ノ辱キヲ拜ス

十二月廿三日治左衛門・助左衛門、一橋公ニ謁見、尊王攘夷ノ説ヲ具陳ス、是ヨリ先キ原市之進・梅沢孫太郎等ト数々討論、互ニ意見ヲ述べ幕府ヲシテ奉勅攘夷ノ挙ヲ行ハシメントス、公特ニ謁見ヲ賜ヒ持論ヲ面陳セシム

元治元年正月長州征伐ノ説起ラントス、織馬・助左衛門、会藩へ書ヲ賜リ其書ノ写シ卷末ニ付ス、小野権之進ヲ介シ会侯ニ通シ曰ク、干戈ヲ邦内ニ動スハ計ノ得タルモノニ非ス、特ニ其罪ヲ宥シ攘夷ノ功ヲ以テ之ヲ償ハシムベシト、同年二月十一日長州征伐ノ内命アリ、事切迫ニ付治左衛門一書ヲ裁シ、一書ノ写卷末ニ付ス、会藩老臣神保内蔵・有馬侯老臣有馬帶刀ニ賜リ攘夷ヲ置テ長州処置ヲ先ニスルノ不可ヲ述ブ

同年七月長藩老臣益田右衛門介等伏見・山崎・嵯峨ニ来リ屯ス、輦下搶擾長藩人歎訴セント欲シ天朝ト幕府ニ執奏周旋ノ事ヲ藩主ニ白スベシトノ書ヲ致ス、乃チ三人等相議シ治左衛門ヲシテ上京セシメ長人ニ入京ノ得失ヲ説キ浪華ニ

退カシメント欲ス、治左衛門其屯所ニ到ル、懇諭周到長人其周旋ニ感シ深ク之ヲ謝ス

八月廿一日長州征伐ノ命アリ、治左衛門・助左衛門左右先鋒タリ、織馬先備タリ、広島ニ抵ル諸藩ニ接シ長州三老臣ノ処置ニ関シ尾州公へ建白、長藩へ説ク所アリ

慶応元年乙丑五月朔日三人ニ内諭シテ退隱セシム、実ハ其家ニ錮スルナリ、是ニ於テ三人相共ニ屏居出テス、是ヨリ先キ三人尊攘ノ説ヲ唱ヘ勤王ノ諸藩ト結託シ皇威ヲ振起シ宸襟ヲ慰メ奉ント欲シ、辛苦奔走セルヲ以テ幕吏ノ忌諱ニ触レ、閣老阿部豊後守夙ニ三人ノ挙動ヲ惡ミ事ニ托シ之ヲ除ント欲ス、遂ニ藩主正方ノ父正寧ニ諷諭シ正方ニ意ヲ伝ヘ勤王ノ臣ヲ嚴罰ニ処セシメントス、正寧幕府ノ威令急ナルヲ以テ禍ノ正方ニ及ンコトヲ懼レ、正方ヲ江戸ニ召シ閣老豊後守ノ意ヲ諭ス、正方年尚弱冠ナリト雖トモ、彼輩誠忠国家ニ竭スノミ、事一藩ニ関スルノミニ非ス、王事ニ勤勞セル日久シケレバ賞スル可ナリ、之ヲ罰スルノ理ナシト弁疏太タカム、然レトモ固執スル所ナルヲ以テ之ヲ退隱セ

シメ待チ再ヒ挙用ヒテ其志ヲ行ハシメント欲ス、三人罪ノ藩公ニ及ハンコトヲ恐レ死シテ君冤ヲ雪ント矢ヒ姑ク其処置ヲ待ツ、是時三人自ラ顧フ、死ヲ賜ヘハ幸甚ナリ、或ハ刑ニ処セラル、モ知ルヘカラズト、座ヲ構ヘ式ノ如クスル、数日命アリ、退隱復々藩政ヲ執ラシメス、是時ニ当リ藩士咸ナ勤王ノ志ヲ抱キ文武大ニ興リ尊攘ノ事ヲ以テ主本トシ、三老臣ニ推服スルコト泰斗ノ如ク闔藩呼テ勤王大大夫ト謂ヘリ、退隱ノ後織馬ハ藤齋、治左衛門ハ秋崖、助左衛門ハ水山ト号シ風雅ヲ耽好シ吟詠ヲ以テ自ラ消遣セリ

明治元戊辰正月九日長州藩兵福山ヲ襲フ、初長州兵福山ヲ攻ント欲シ尾道ニ屯シ我藩ノ虚実ヲ伺フ、時ニ藩主正方新ニ死シ未タ葬ラス、一藩哀ヲ挙ク、是ニ於テ三人ヲシテ更ニ出仕セシメ老臣以下吏員相議シテ曰ク、長藩ノ兵我ヲ攻ムル、若シ無名ノ師ニシテ横逆暴挙ニ出レバ闔藩決死奮闘シテ社稷ニ殉フベシ、然トモ渠レ若シ勤王ノ師ナレハ忍耐恭順シテ之ヲ抗セス、徐ニ藩論ノ在ル所ヲ陳ヘ来襲ノ意ヲ問ントス、既ニシテ長兵国境ニ入ル、重職ノモノ各出テ邀

へ来由ヲ問ヒ藩論ヲ説ク、是ヨリ先キ三浦義建既ニ隊長杉孫七郎ヲ迎へ路ニ説ク、杉曰ク、城ニ入り重臣ト議スベシト、助左衛門等遂ニ城ニ迎へ入ル、藩固ヨリ勤王ノ大義ヲ知り死ヲ以テ幕府ヲ諫メ幕府聴カサレハ朝命ニ是レ従ハント、杉曰ク、善シ因テ謂フ大義親ヲ滅ス、朝命遵奉ノ旨ヲ書シテ老臣連署ノ証書ヲ出スベシト、乃チ証書ヲ与フ、尋テ兵ヲ引テ去ル、翌十一日杉孫七郎今津駅ヨリ復々来リ曰ク、同盟和親ヲ結ヒ互ニ相救護スベシト、是時刃ニ血ヲズシテ立談其戦ヲ罷ム、国論ノ夙ニ定ルニ因ルナリ、正方卒シ嗣ナシ、三人議ヲ起シ曰ク、婚ヲ芸公ニ結バ勤王ノ事ニ関シカヲ得ル所アラン、時ニ江戸邸ノ藩士阿部氏ノ支族ヲ撰ヒ之ニ嗣タラシメントス、藩論乃チ判テ二トナル、山岡治左衛門江戸ニ到リ説諭万端、議遂ニ成リ福山ニ帰リ関藤々陰・大森操兵衛ト芸ニ抵リ其意ヲ通ス、媾婚議諧ヒ遂ニ嗣トナル、今ノ伯爵阿部正桓是ナリ

明治元年戊辰幕臣及諸藩士上野ニ抛ル、時ニ藩士ノ江戸ニ在ルモノ密ニ出テ之ニ応スルモノアリ、三人之ヲ憂ヒ説ク

ニ順逆ヲ以テス、若シ命ニ服シ帰順セサルモノハ藩法ヲ以テ嚴科ニ処セント、飛檄江戸ニ至ル、皆復帰ス、三老臣之ヲ嚴刑ニ行ントス、然トモ国事急ナル時之ヲシテ其罪ヲ償ハシムルニ若カズト、因テ之ヲ禁錮セシム、是年正月朝命ヲ奉シテ伊予松山ヲ攻メ又函賊討伐ノ命ヲ受ク、闔藩拳テ踴躍争フテ軍ニ従ハント欲ス、蓋シ三老臣正方ノ遺志ヲ継述シ夙ニ勤王ノ大義ヲ唱へ士氣ヲ養成セシ功多ニ居ルナリ右三人ノ国事ニ勤勞セル事蹟、家ニ秘蔵スル所ノ日記・秘事録等ノ遺書ニ依リ編述シタルモノナリ

山岡治左衛門

安藤織馬

吉田助左衛門

此度御上洛ノ上ハ公武御一和ノ御取固メヲ始メ攘夷ノ緩急御廟議御決定勿論ノ御儀ト奉恐察候、長藩ノ御処置如何御裁断ト相成可申ヤ、万一余リ御嚴重ノ御沙汰ト相成候テハ彼是差繼出来遂ニ御威光ニモ相抱リ候モ難計、畢竟御嚴罰

ニテ御威光可相立筈ノ処、却テ御威光モ被損候テハ以ノ外奉恐入候事ニ存候、全体長州侯最初於關東ノ御建白ハ一際目立候様天朝ヲ御尊崇被遊公武御一和御専務ニ有之、国々開鎖ハ時宜次第ノ儀ニ存候トノ御説、右ハ誠ニ憂国ノ御実情ヨリ出タル明白ニ御座候処、半途ヨリ説ヲ被変攘夷一途ニ御見込剩其戰期迄御催促ニ相成候、尤右ハ關東ノ御模様何分御因循ニテ武備相整フ見当モ無之ト被存、無抛ノ場ヨリ起全叡慮御遵奉ノ御忠勤共可申候得共、公武御一和無之テハ御国内四分五裂割拠乱世ト相成、又々宸襟可被為惱ノ筋ヲ御懸念モ無之、戰守諸藩応接等ノ打合御行届モ無之容易ニ兵端ヲ被開候、皇国御為筋ノ御積ト乍申御成功無之、只様彼是紛擾相増候テハ却テ皇国ノ御不為筋ニ有之、公辺へ被為対テハ御不敬不申及天朝へ被為対候テモ詰リ御不忠ニ当リ可申、此場ヲ以屹度被仰出候得ハ長侯平心ニ御自省有之候得ハ先以御申訳無之筈ニ御座候得共、昨年来長藩ノ御挙動ヲ以テ勘考仕候ニ右被仰出中ニ穩ニ御承伏ハ有之間敷ト存候、元来ノ処關東ニテ外夷通商ヲ天朝へ御伺ノ詮無

之、御伺済ニ不相成内ニ仮条約為御取替ニ相成候ヨリ御逆鱗ノ御事、詰リ關東ニテハ乍恐御申訳無之御次第、右ニ付外夷御取扱ノ御役人方段々御咎被仰付候、乍去外夷へ被対テハ夷狄トハ乍申既ニ条約御済ノ上ハ手ノ裏ヲ返ス様御取戻モ出来兼候御儀理合有之、進退御頓着ノ折柄叡慮ニヨリテハ開闢以來夷狄ニ不被汚神州ヲ、今上ノ御世ニ被為致右様ノ儀御座候テハ祖宗へ被為対御済不被遊ト攘夷ノ思召御堅固ニ御据被為在、斯ル処へ慷慨志士平日公辺御所置ヲ不満ニ存居候族又ハ客氣輕卒一時ニ逸リ立候輩、關東交易ノ利ニ御溺レ為之天朝ヲ御蔑視被遊候ナト紛々申上堂上方へ持込、終ニ叡聞ニ達シ叡慮ヲ被為惱諸藩へ御内勅下リ候儀初リ申候、然モ乍恐關東御不行届ノ御廉々被為在候与ノ儀、自然無余儀ノ情勢ケ様ノ御場合ニ及申候、然ル中ニ長州侯別段ニ奮然確乎ト攘夷ヲ御主張有之候得ハ、叡慮不斜思召候御訳ヨリ何モ關東ヲ御見棄ハ不被遊候得共、長州ヲ頼母敷思召深ク御依頼被遊候様自然ノ勢諸事周旋ヲ御委任モ被遊候次第トモ成行申候、長州ニテハ此所ヲ根拠トシテ諸事

追々過激ノ御所業ニモ被相及申候、定テ叡慮ニハ夫程迄ニハ不被思召事迄モ武断御踏込ニ相成申候、是近来ノ事勢ニ御座候間長州ノ御所業一々叡慮ト符合ハ仕間敷候得共、約局開鎖和戦ノ処全ク叡慮ヲ遵奉ノ儀ニテ叡慮ト表裏反對ノ所業ニハ無之候、左候得ハ彼是ケ条ヲ数立候テ其罪ヲ鳴シ御罰シ可有之共、長州ニテハ是モ叡慮ヲ遵奉候テノ儀、彼モ勅意ニ基キ相動候訳扨ト理屈ヲ付候テ御弁解一々可有御座候、概論仕見候ニ其心術ヲ以申セハ、大平ノ恩沢ニ浴シ三百年來頭上ニ戴居候関東ヲ俄ニ足下ニ輕蔑シ公武御一和ヲ取持候所業ニ無之、却テ公武御隔絶ニ可相立様ノ所業ヲ被致、且攘夷成功ノ見留モ無之輕々敷兵端ヲ被開、近頃ニ及ヒ候テモ無改心旧臘薩船ニ向ヒ発砲有之等都テ行末皇國ノ御為筋第一トハ乍申、真個ノ誠実ハ無之国家内乱ヲ引出スニモ無頓着自己ノ私憤押貫可被申ノ模様、天朝并関東へ不敬不忠重々可惡ノ儀ニ御座候得共、其踪跡ヲ以申セハ諸事叡慮勅意ニ基キテノ働ト理屈付キ可申、勿論初ノ所叡慮長州へ御依頼御委任被遊候事ニ御座候へハ、長州侯実情感

激奮発ノ場ニモ御座候へハ容易ニ取挫キハ出来申間敷、此方ニテハ八月十八日以来勅書如此ニ候へハ十八日以前ノ叡慮ト申ハ皆十三卿長州矯命ノ所為也責立候へハ、彼方ヨリハ去十八日以前毎々ケ様ノ勅旨奉蒙候へハ夫ヲ真ノ叡慮ト心得候、綸言如汗左様ニ御替リ可被遊筈無之、十八日以後ノ叡慮ト申コソ傍ヨリ誣付御勸申上候矯命ニ候ト申張、所謂水掛喧嘩ト申姿ノ論弁差継可申ハ必然ト被考申候、終ニハ御一人様ヨリ前後二様ノ勅旨下り候ナト、玉体へ御不明ノ御名ヲ奉為負候様成行可申奉恐入候事ニ存候、其内長州ニテハ公辺ヨリ被遺候御目付ヲ殺害、公辺ノ御船ヲ横領仕候等ハ如何様ノ弁説致サレ候テモ踪跡ニ於テ弁説ノ付兼候次第モ随分御座可有候得共、全体ノ大主意皆勅意御遵奉申上ニヨリ申立候得ハ、公辺御武威十分ニ無之テ迎モ御取挫キ立派ニ参リ不申時ハ折角御嚴罰被仰出候甲斐モ無之、却テ御威光可被損ト恐入過慮仕候、且一旦御嚴罰被為仰出御先方御承伏無之候得ハ元ヨリ直チニ御討伐ト相成可申、其節ハ何レ諸藩へ討手可被仰付當時諸藩ノ見込如何可有御座

歟、諸藩何方モ長州不屈至極ニ付御討伐御尤至極ト奉存罷在、私一手ヘ討伐被仰付度私ヘ先鋒被仰付度杯ト申模様ニ御座候ヘハ、軍中一和兵氣相振候テ其成功申迄モ無御座候得共、右様見込確然相据居候諸藩モ可有之歟ハ存候得共差向不承、却テ長州近国之大藩杯ハ長州之擯付被致候ヲ無事ニ取扱度其旨建議有之哉ニ風聞承申候、実以ケ様ノ情勢ニ御座候テハ諸藩從ヒ官命奉畏候テ出軍ニ及候共戰不申以前ニ既ニ氣挫キ罷在、其上ニ客戰長陣自然ト疲弊退屈更ニ御武威相立申間敷、長州ニ於テハ討手御差向ト承リ候得ハ窮鼠食猫ノ情態、既ニ死地ニ陥リ御奮激ヨリ防長二国ノ全力ヲ以テ相防可申、往昔国初士氣奮発ノ頃迎モ聊カノ島原一揆ヲ討平ニ半年ヲ費シ申候位ノ儀、窮鼠ヲ取挫キ候ハ容易ノコトニ無御座、殊ニ此戰勝利有之テモ当然之次第何モ嘗モ付不申、若シ及敗北候ハ、乍恐閑東ノ御武威ハ地ニ落ち可申、又近頃諸藩之形勢情合ヲ以テ勘考仕候テ、一統疲弊困窮旁一旦世上戰事相始申候得ハ何方モ終ニ自国大切ト割拋身構ノ姿ニ相成、参勤交代等被仰出候通ニ相勤候向ハ無

之様成行可申、是又長州御討伐御考ヘモノ、一大ケ条ニ有之候、又況当今外寇ヲ引受ケ居候御国内同士討軍、外夷ハ我内乱ヲ傍觀仕候、所謂漁夫ノ利ヲ得可申ト手ヲ拘テ相喜ヒ其虚ニ乗シ種々ノ手出ヲ以テ御国難ヲ相増シ可申、從來ケ様御国内紛紜混雜仕候ハ皆外寇ノ禍有之故ニ有之候、ケ様外寇有之上ハ御国内ハ申合セ互ニ勘弁如何様ニモ睦敷相成不申テハ相成ラサル儀、兄弟鬩牆外禦具侮ト申事同船濟河胡越一家ト申事モ有之由承リ申候、実ニ当今同士軍ハ御失策ニ可有御座明白ニモ外寇襲来候ハ、諸藩中長州ノ如キ奮発ハ沢山有之間敷、皇国之御為決シテ被棄申間敷ト存候、將又右之通申候迎有罪之長州ヲ其俣ニ被差置候テ可然ト積々ハ決シテ無御座候、何レ一際御威光相立可申様被仰付可有之ハ勿論被存候、只今前文ノ訳柄ニ付嚴密ニ罪状ヲ数立テ被仰付候ヨリハ格別寛大ニ御処置可然被存候、近日桜田上巳ノ変一条ニ付テハ其節即日ニ御所置当否ハ暫差置、追々夫々改易之御所置御座候テハ諸侯之横死ハ改易可被仰付筈之所其儀無之減高被仰付ノミ、又公儀之重キ御役人へ

及狼藉者ニ候ヘハ伏誅ハ当然ノ理ニ候得共、其情合来歴ヲ以テ御勘弁追テ格外之御赦被仰付候様、大事件常律有之者逆モ時権宜ヲ以テ定律ヲ变化活用之御先蹤モ御座候ヘハ、此度長州之御所置仁恕寛大有之候逆決テ御威光相崩レ候氣遣ハ有御座間敷、左候ヘハ如何程ノ御所置ニテ当時ニ相当可仕哉、其所ハ幸ニ諸大藩立入取扱度トノ建議モ有之、左候ヘハ其方々へ御取扱ヲ御委任被遊其上ニテ御裁断御座候ヘハ緩急寛猛少々ハ何レニ編倚有之候共、取扱候人へ御委任ノ儀ニ御座候得ハ人氣モ揺動不仕、随テ御紀律御威光相立可申ト奉奉<sup>(マ)</sup>存候、此外ハ於公边只今叡慮御遵奉ヲ以テ公武御一和相薄ラキ不申様ノ御所為第一御急務ニ可有御座、右御所置被申テ別ニ新規ノ御挙動可被為在訳ニ無之、公边ヲ始諸国風俗質素土氣憤発兵封軍備攘夷之基本相立候様御新政実地ニ御執行被遊候ハ、諸方目ヲ醒シ此ナレハ追々攘夷モ御出来ニ可相成ト長州之畏服ハ不及申、其他不服ノ徒或ハ可<sup>(マ)</sup>之有之候共感佩悦服可仕、尤候ヘハ天朝ノ御倚頼盤石之御堅固ニテ内乱出来ノ氣遣無之外寇等モ御制シ易キ

儀ト奉渴望候

右丈ノ御備ハ元ヨリ攘夷ニ限り不申、從ヒ開国之御廟議ニ相成候共御必用ノ儀何時ニテモ戦出来可申之備有之テコソ開国和親モ無事ニ相続可申、其備無之時ハ開国モ無事ニ出来可申候、ケ様之儀都テ世話ニ申釈迦ニ説法ニテ重々恥入候次第ニ御座候得共、乍愚存モ御為筋ニ拘り事柄不顧失礼先生迄存分申上候、畢竟平生御懇切ニ相成候ヨリ申出事不惡御諒察御取捨可下候事

阿部主計頭内

子正月

山岡治左衛門

安藤織馬

吉田助左衛門

上様御事今般夷賊為御膺懲御還府可被遊旨御一決相成候処窃ニ奉拝承候、乍恐当節ノ形勢ニテハ此御一挙ニテ徳川御家ノ御浮沈相定リ可申哉ト誠ニ以御大切ノ御儀深ク奉恐入候、尤夷賊御拒絶ニ相成候上ハ渠必激怒仕諸蛮申合神州環海来寇可及開戦ハ必然ノ儀、就中摂海へ乗入追々帝都へ侵

入可仕卜志可申儀、是亦必非ノ勢ニ可有御座候、依テハ関東ニ被為在候テモ即時御上洛御守衛可被遊御儀ニ可有御座候所、幸御在京被為在候テ此場ニ相成右等ノ御顧念モ無之、御下関被遊候テハ京師御手薄ニ相成候場ヨリ御敬上ノ尊意御薄ク御遠凶御乏敷形ニ相見へ、左候テハ自然御名義・御忠節モ御立被遊間敷哉、且近ク御築地際ニテ異変ノ儀有之候コト共旁以御滞京御守鎮被遊、横巷攘除<sup>(巻)</sup>ノ儀ハ皇命ヲ以テ関東へ急度御下知被遊候儀御当然ト存候、尤攘夷ノ儀ハ皇開闢以来ノ御大患、殊ニ蛮夷ハ砲艦ニ富ミ戰事ニ馴居候ヲ、昇平久敷不事馴兵器ヲ以テ忽卒及戰開事必定御勝算可有之トモ可奉存上綸言如汗乍御少算モ御遵奉被遊、全ク御違勅ニ相成候ヲ被為恐入候御儀ト奉恐察候、将又夷賊侵入仕御一戰被遊候節、輦下御手薄ニテ万一御失策有之時ハ万国へ対シ末代迄ノ御国辱被為取無此上恐入候次第ニ被存候間、是非御直ニ御采配可被遊候テハ相成申間敷、夫而已ナラス唯今ノ時機、暫時ニテモ皇都ヲ御離被遊候テハ如何様ノ異変相生シ公武ノ御間御疎隔可相成モ難凶、実ニ狼跡ノ

御患乍恐徳川御家ノ御武威神祖御百戦ノ御大勲勞御当代ニテ御空敷相成候テハ乍恐不勝痛器御儀ト被存、勿論斯ク相成候テハ邦内割拠ノ姿ニ相成、其隙ニ乘シ夷賊愈侵入仕候時ハ防禦ノ力モ乏敷、夫ヨリシテ異心ヲ挟ミ禍乱可生モ不被計、其節ニ至リテハ如何様被為堪宸襟ニテモ難被為及皇統無窮万国ニ卓越タル御国体モ夷賊ハ更ニ不憚、終ニ禁闕へ近キ候様ニ相ヤモ難計申上候モ恐多計ニ被存、右等ノ大患モ機漸ニ激頭仕候様存候、左候得ハ当節御還府被遊候ハ天朝公辺トモ幾重ニモ御不為ト奉存候、右ノ次第ニ候得ハ乍恐御寸歩モ京地ヲ御離レ不被遊、前文横港攘除ノ儀ハ一橋中納言様生殺予奪ノ権ヲ為握、列藩ノ諸侯へ皇命ヲ以急度御下知有之速ニ御拒絶ニ相成、勝敗ハ夫々御任セ被遊候外ハ有之間敷ト存候、是啻徳川御家ノ御為而已ニ無之則皇国ノ御為、天朝并神祖へノ御忠孝ハ全ク天祖へノ御忠節ニ被為当候御儀ト奉存候、最早御還府御治定ニモ相成候ヤニ奉存候得共、斯ル御大切ノ御事幾篇モ御熟慮被遊候様願上候、偕テ右ノ趣ハ先達テ以来私共初詰合ノ者共種々苦心仕

居、已ニ御筋へ可申上哉ト申合居候得共、主人主計頭不經  
存意故踰著ノ儀ト先以相扣罷在候得共、時日相迫リ候付不  
得止奉申上候、文意不敬ノ処ハ偏ニ御宥免被成下、愚衷ノ  
趣御取捨被成候得ハ難有仕合奉存候、以上

六月二日

安藤織馬

吉田助左衛門

乍恐内々奉申上候、昨日於殿中主計頭へ御書付ヲ以被仰渡  
候御内意之旨主計頭恐入厚奉畏候、且又右御内意之御事故  
家来一人限り相咄、決而他言不致様ト御含之旨モ承知仕帰  
宅後内々私へ申聞候事ニ御座候、猶又主計頭申聞候ハ乍愚  
昧段々相考候ニ、此度御上洛ニ付テハ世上一統之人氣攘夷  
ハ如何可相成哉、長州御所置ハ如何可相成哉ト此ニケ条ヲ  
人々耳ニ歌罷在候儀、然ル所攘夷之事未タ何レトモ被仰出  
無之候ニ付、長州御所置振自然世上へ相洩候ハ、関東ノ御  
為筋如何可有之哉、風聞ニ承候ニハ横浜鎖港御決着已ニ外  
国へ其旨被仰遣之使節モ出帆致候由、左候ハ、先ツ速ニ此

事御布告ニ相成元来ノ叡慮貫徹致候段世上へ為相知置、長  
州ニテモ人心ヲ動搖可為致ノ端緒無之様被成置候而、其上  
ニテ長州之御所置ニ御取掛御座候方御施設ノ前後ヲ被為得  
候モノト奉存候、若此前後右之通ニ無之テ万一長州御嚴重  
之御所置有之様子ナト先ツ相洩申候ハ、公辺之御懷合ハ誰  
モ不存候間、一途ニ元来之叡慮ヲ御押止被遊徒ニ長州ヲ御  
惡<sup>(趣方)</sup>ミ之越ニ世上申立人氣騒々敷相成如何様ニ事変モ難計、  
長州御所置振之見込ハ暫差置而右ニケ条前後ノ処差向ケ様  
ニ奉存候、右ハ公辺十分御顧慮被為届候御儀ニハ可有御座  
候へ共、貴藩ニテ昨日被仰渡之御内意一条御承知之御方迄  
私ヨリ申上置候所主計頭申聞候事ニ御座候、若シ太守様へ  
被仰立モ被下候ハ、主計頭ニ於テ別而難有奉存候、以上

二月十一日

山岡治左衛門

斎藤素軒履歷書 草稿

旧福山藩

天保三年九月廿二日生

故斎藤素軒

素軒幼名金十郎後甚右衛門ト更メ致仕ノ後素軒ト称ス、旧福山藩主阿部氏ノ世臣ナリ、幼ニシテ穎悟勇悍武事ヲ喜ミ、擊劍・槍術・射術・馬・泅泳ノ術尽ク学ハサルハナシ、学フ所亦其術ヲ極メサルハナシ、是レヲ以テ其伎益長シ闔藩皆其能ニ壓伏セラル、壯ニ及ヒ阿部正弘ニ近侍シ、尋テ使番・大目付ヲ勤メ、用人役ニ進ム時正弘藩邸ニ学校ヲ創規シ、大ニ文武ヲ奨励シ尊攘ノ志ヲ行ハント欲ス、用人大目付ノ中ヨリ文武引立掛ヲ命ス、素軒其選ニ当ル、材幹事ニ堪ルヲ以テナリ、正弘会津侯ニ請ヒ長沼流兵法ヲ伝習セシメ藩士ヲ訓練セシム、正弘卒シ正教嗣立、又素軒ニ命シ福山ニ到リ文武ヲ監督セシム、時二年廿有餘ナリ、英氣駿邁忠孝ノ心最モ厚ク督励頗ル嚴ナリ、一藩士氣大ニ奮フ、此時ニ当リ天下ノ形勢一変国政繁興外患日迫、諸藩士ノ材幹アルモノヲ京師ニ出シ周旋奔走シ事情ヲ伺察セシム、素軒其任ニ与レリ、時ニ京都守護職会津侯ナルヲ以テ素軒其藩士ト相識ルモノ少ナカラス、周旋其力ヲ得テ我藩勤王ノ主義会侯ノ夙ニ知ル所トナリ、公卿ノ間ニ伝播シ正弘ノ遺志

ヲ行ノ時至レリ、是ヨリ諸藩ト協和シ尊攘ノ志ヲ合シ京師ニ奔走シ王事ニ勤勞スルモノハ、山岡治左衛門・安藤織馬・吉田助右衛門<sup>(左)</sup>・大森操兵衛ト共ニスル所アリ、其進退去就一ニ国家ノ為メニ心ヲ勞セザルハナシ、廢藩置県ノ後三備地方養蚕ノ法ヲ説キ力ヲ盡シ懇論剴切、人漸ク養法ヲ知り其製愈精シク一方ノ産物ヲ造出スルニ至ル、十有一年一日ノ如ク、有志者ヲ召集シ其法ヲ講スル廿余次ニ至リ、其没スルヤ蚕事ヲ説キ芸備共進会ニ備後三次ニ赴キ、疾ヲカテ其事ヲ整理シ、福山ニ帰り遂ニ起タス、明治廿二年一月三十日ヲ以テ没ス、享年五十有九

文久三年五月天下ノ形勢大ニ変シ内外多事ニ際シ、藩主阿部正方素軒ニ命シ京師ニ至ラシメ、諸藩ト交際シ事情ヲ伺察セシム、是時ニ当リ素軒水藩大野健助・広瀬謙太・正木鉄馬等尊王攘夷ノ徒ニ交結シ、勤王ノ諸藩ニ周旋スルコト大森操兵衛等ト力ヲ戮セ日夜寧処スル遑ナク、素軒ノ勤勞スル所ハ專ニ京師ノ諸藩ニ周旋ス、中ニ就キ水因備芸四藩ニ心ヲ合シ二条殿・三条殿ニ出入シ、正弘ノ志ヲ明シ勤王

ノ志ヲ通シ、遂ニ八幡警衛ノ命下リ、老臣素軒ヲシテ益公卿ノ間ニ進説シ攘夷ノ勅意ヲ遵奉セントス、素軒氣概アリ、往々人ヲ斥ス、討論痛切一ニ尽忠ニ帰ス

七月長州藩益田右工門介等京ニ入ラントスルトキ、素軒、山岡治左工門・大森操兵衛ト共ニ伝奏及、一橋公ノ命ヲ承ケ長兵ヲ退去セシメントス、是時ニ当リ素軒一橋公ニ到リ原市之進ヲ介シ長兵ノ举措ヲ問合セ、命ヲ帯ヒ奔走入説ニ竭ス所アリ

七月稲葉美濃守ヨリ召サル、公用人伊沢右馬允ヲ以テ命ヲ伝テ曰ク、長州兵ヲシテ洛外ニ退去セシムベシ、素軒周旋其勞ヲ取り苦心説論ス

元治甲子七月征長ノ説頗盛ナリ、時ニ会津侯京都守護職タリ、素軒其藩ノ老臣ニ謂テ曰、方今人心潰烈宜シク邦内協和人心一致ヲ図ルヘク、内訌紛糾解ケサルハ国家ノ大患ナリ、我藩周旋シ長兵ヲ退カシメバ征長ノ議罷ンカ否、サレバ兵難解クルコトナク何ノ時ヲ候テ安寧ノ日アルベキヤト、其説容ル、所アラントス、乃チ長州兵ニ遊説シ因藩ニ説ク、

服セス、入説書ヲ贈リ懇諭スル数々ナリ

其書ニ曰ク、尊藩攘夷正義ニ被為在候儀素ヨリ御同意感服罷在候、申上モ無御座候、扱為国家長藩之儀ヲ厚ク御周旋被成、当時長藩ト甚御親シク被成居候ニ付愚説申試候、此度長藩人大勢洛外迄詰掛嘆訴之次第、定テ昨秋来之儀ニ付不堪残念、是迄ハ穩静ニ忍居候テモ最早堪忍兼、且一通リノ歎訴ニテハ其心中相達シ兼候ト存、無抛右之騷々敷事柄ニ及候儀ニモ可有之候得共、君臣ノ名分ト申者御座候間、昨秋来今以天威不被為斉候儀、仮令傍ヨリ離間讒者有之故ノ事ニ可有之候共、臣子ノ分際諸事修始恭敬ヲ尽シ礼節相届不申テハ不相成儀、然ルニ右様騷々敷大勢軍装ヲ以テ輦下近ク詰掛テノ歎訴ト相成候テハ、所謂雖曰不要君而不信ト申類ニテ君子要スル事跡ニ陥イリ、是迄勅旨遵奉義烈正義ノ長藩、怏々不満ヨリ遂ニ輕挙妄動臣節ヲ失候扱ト申名ヲ得可申、折角昨秋異変ノ節輦下ヲ憚リ、争鬪ノ挙動無之勅命ヲ畏リ引取り候臣節ヲ一時ニ無ニ致候訳ニ至リ、長藩ノ為メ甚可憐ノ所業ト被

存申候、右ノ挙動ヲ以テノ事ニ候得者、此後縦令立派ニ上達ノ時勢一專諸事長藩ノ思込通事成熟候共、堂々至尊ヲ兵力ヲ以テ恐嚇シ奉リテノ事跡ハ長ク後日ニ相残り、誠忠臣節ヲ守リテノ事トハ誰モ信服申間敷、一時其積悶ハ晴レ申共其名ハ間然可致処有之、永久四方人心ノ悦服不致様可相成云々

十二月長藩征伐ノ役起リ藩主正方先鋒ノ命ヲ承テ兵ヲ率ヒ広島ニ在リ、既ニシテ事成ヲ退陣セントス、会々幕府閣老飛檄正方ヲ江戸ニ召ス、途ニ閣老某侯ノ京都ニ朝スルニ逢フ、曰ク、子ノ年少ニ乗シ貴藩ノ老臣及齊藤・大森等外藩諸侯ノ為ニ倣ヒ勤王ノ説ヲ唱ヘ妄ニ幕政ヲ是非ス、其迹ニ首魁ヲ嚴刑ニ処シ以テ幕府ニ謝スル所アルベシ、正方対曰、某年少ト雖凡藩事ノ細大皆ヨリ聞カサルハナシ、老臣ノ為ス所ハ某ノ命スル所ナレバ某ヲ嚴刑ニ処セラルベシト、某侯黙止ス、初正方ノ広島ヨリ東スルヤ素軒等侯家ノ安危ニ関スルヲ恐レ、皆謹慎引退シテ罪責ノ正方ニ及ハサランコトヲ希ヒ日夜憂慮シ、以為ク若シ罪侯家ニ及ブアラバ屠服

シテ以テ其罪ナキヲ明スベシ、時ニ藩士田辺新七郎素軒ヲ問ヒ事ヲ議ス、曰ク、吾身既ニ之ヲ候家ニ致ス、死生固ヨリ愛ム所ニ非ラス、幕府命ヲ我侯ニ伝ヘテ死ヲ賜ハンカ是侯ノ死ヲ賜フナリ、豈謹テ命ヲ奉セサル可ケンヤ、吾心事亦此ニ至リテ畢レリ、余未タ屠服ノ法式ヲ知ラス、子余ノ為メニ式家ニ就キ其法式ヲ質セ、新七郎之ヲ慰籍シテ去ル後命アリ、素軒等ヲ家ニ幽シ国事ニ預ラシメス、闔藩皆之レヲ冤トセリ

素軒ノ最モカムル所ハ江戸邸諸吏員ニ国家ノ大勢ヲ論シ、勤王ノ大義ヲ説キ又在京ノ諸藩ト從合シ尊攘ノ事ヲ行ハントシ、其周旋ノ勞大森操兵衛ト伯仲ノ間ニアリ、嘗テ公卿及薩長諸藩士福山藩ノ幕府ニ党スルヲ疑フ、素軒輒チ陳疏シテ曰ク、我藩<sup>三</sup>參河已來徳川氏ヲ輔ケ朝廷尊奉ノ道ヲ尽ス、豈ニ朝廷ニ負ン哉、当今幕府諫メ誠ヲ効シ献替セル所アルモ省セス、我事既ニ畢レリ、自今唯朝廷ノ命之レ從ヒ以テ藩屏ノ職ヲ尽サント、是ニ於テ公卿及諸藩始テ福山藩ヲ猜疑セズ、藩論ノ勤王出ツルヲ知ル、時福山藩論勤王ノ大義

ニ歸スト雖モ、江戸邸ニ至リテハ之ニ反シ其論ヲ一ニセス、素軒説ニ大義ヲ以テシ一藩一致嚮背ヲ定ム

正方卒シ嗣ナシ、江戸邸老臣阿部家ノ支族ヲ以テ宗家ヲ継シメントス、素軒一言以テ之レヲ折リ老臣ニ白シ芸侯ノ令弟ヲ請ヒ嗣トナス、今ノ伯爵阿部正桓是ナリ、其意勤王ノ藩ニ媾婚シ相提携シテ国家ニ為ス所アラントスルノ微意亦存スルナリ、時ニ徳川氏江戸ニ歸リ謹慎恭順罪ヲ上野ニ待ツ、藩邸ノ諸士大義ヲ知ラサルモノ馳テ上野ニ投スルモノアリ、素軒曰ク、吾常ニ此輩ノアランコトヲ恐レ諄々論ス所アリ、朝廷ヲ奈何センヤ、乃チ飛書江戸邸ノ藩士ヲシテ邸内ニ復歸セシメ之レニ死ヲ賜ハンコトヲ請フ、然ニ其早ク復歸スルヲ以テ禁錮ニ止ム、是ヨリ先キ素軒藩論ノ勤王ニ出ツル説キ、今ニシテ此ノ如キアル何ノ顔アツテ天下ニ立タンヤ、因テ議定官・参与ニ説キ、皆無頼壯士ノ妄為ニ出テ藩ノ敢テ与ル所ニ非ルヲ以テス、後我藩終始勤王ノ志論ラサルヲ以テ函館出兵ノ命アリ、明年五月函館平ク、朝廷藩主ノ功ヲ賞シ禄六千石ヲ賜フ、是榮典ヲ排スルニ至ル

モ、藩主ノ教令ニ出ルト雖モ亦タ素軒等勤王ノ士ノ王事ニ奔走シ藩論ノ大義ニ基クヲ以テナリ

明治元年素軒ヲ擢テ徴士権弁事ト為ス、幾モナク其職ヲ罷ム

明治三年福山藩権大参事ニ任セサル、素軒江戸ニ京師ニ勤職シ諸藩ニ周旋シ藩政ニ鞅掌スル、四十余年忠勤怠ラズ国家ニ尽ス所ノモノ居多ナリ、今茲ニ大体確著セルモノヲ録シ上ル

故大森操兵衛履歴書 草稿

旧福山藩士

文政七年十二月十二日生

故大森操兵衛

右操兵衛家世々阿部氏ニ仕へ幼ニシテ隸異雋遭精悍ニシテ器局アリ、長シテ而テ才識絶倫慷慨大志アリ、力学積久頗ル頭角ヲ出ス、詩文奇拔ニシテ自ラ人ヲ驚カス者アリ、勤務ニ精厲ヲ以テ藩主数々之ヲ賞ス

嘉永四年正弘外患ニ処スル、深ク慮ル所アルヲ以テ武器ノ

充実士氣ノ奮興センコトヲ謀リ福山ニ文武館ヲ創設シ、操  
兵衛監察ヲ以テ文武掛トナリ、執政山岡治左衛門・安藤織  
馬・吉田助左衛門等ト胥謀リ、子弟ヲシテ文武ヲ兼修セシ  
メ八歳ヨリ五十才ニ至ルマテ皆各其性ニ近キ所ヲ習ハシム、  
務テ忠孝ヲ厲マシ技芸ニ精シク士氣ヲ奮ハシメンコトヲ期  
ス、是ヲ以テ日常正課ノ外武ハ汎ク天下ノ武ニ長セル者ヲ  
引キ之ヲ礼遇シ館舎ニ留メテ藩士ト其伎ヲ闘ハシメ、或ハ  
舟楫ヲ操リ水戦ヲ習ハシ或ハ山野ニ營ヲ張り馳驅ヲ試ミ、  
文ハ儒員ヲシテ日本外史新論又ハ請献遺言ヲ講シ藩士ヲシ  
テ聴カシム、又野々口隆正・鈴木重胤等ヲ招聘シ国書ヲ講  
求セシム、是ニ於テ藩士徳義ヲ重ンジ勇武ヲ奮ヒ尊王攘夷  
ノ志ヲ抱キ死力ヲ尽サンコトヲ期スルニ至ル

文久三年癸亥命アリ、藩邸ニ在リ、監察ノ職ヲ以テ御親兵  
ト為リ三条実義公ノ指揮ニ從ヒ禁闕ヲ護衛ス、是ノ時操兵  
衛人ニ告テ曰ク、吾志今稍々成ントスト、六月御親兵ヲ免  
サレ公武ノ間周旋ノコトヲ命セラレ京師ニ留リ奔走寧処ス  
ルニ違ナシ、後京都留守居役ヲ勤ム、是時ニ当リ天下ノ志

士京師ニ集リ人心恟々形勢大ニ変シ、七月長州藩中村九  
郎・佐々木男也、操兵衛ヲ旅舎ニ訪ヒ福山国論ノ在ル所ヲ  
問フ、操兵衛曰ク、勤王攘夷ノ説確乎抜ク可カラズ、二人  
問フテ曰ク、軻港ニ（福山旧領地南海ニ瀕ス）外艦泊スル  
事アラバ其処置如何ン、答曰ク、輕忽事ニ從フベカラズ、  
朝廷ノ命ヲ稟ント欲ス、倘シ暴挙国人ヲ害スル時ハ機ニ臨  
ミ事ヲ処スベシ、又曰ク、天朝・幕府和戦ノ二説ニ分ル、  
貴藩ハ譜代ノ諸侯ナルヲ以テ必ズ和スルベシ、答曰ク、然  
ラズ、彼国体ヲ辱シムルニ於テハ一戦センノミト、二士後  
屢々徴逐往来シ交情日密ナルニ至ル、是時ニ当リ諸藩国論  
両端ニ涉リ党議起リ相和セズ、私闘相殺スモノアリ、操兵  
衛執政ト議シテ曰ク、曩ニ正弘公閣老ノ職ニ在リシヤ、外  
患洊ニ至リ皇威ノ振ハサルヲ憂ヒ幕府ヲ輔ケテ勤王ノ志ヲ  
行ハント欲シ、一時権宜ノ政略ヲ以テ兵備ノ充実スルヲ待  
チ事ニ從ハントシ其志ヲ果サズシテ卒ス、今ニシテ正弘ノ  
志ヲ行ハサレバ臣ノ道ニアラズ、速ニ議ヲ定メンコトヲ請  
フ、三人ノ執政固ヨリ其意ヲ同フス、乃チ意ヲ決シ朝廷ノ

内旨ヲ伺ヒ操兵衛ヲ水戸・会津・因州・備前等勤王ノ諸藩ニ差ハシテ其意ヲ通セシメ、又二条公・三条公ニ謁シ尊攘ノ志ヲ貫徹センコトヲ冀フ、其所願天聴ニ達シ八幡警衛ノ命下リ藩兵ヲ出シ之ヲ戍ル、操兵衛入りテハ重職ニ謀リ出テハ外藩ト志ヲ合シ幕府ニ權言シ王命遵奉ノ説ヲ述ベ將軍ニ上京ヲ勸ム、是ノ時ニ当リ都下騷擾浪士ノ淵叢トナル、操兵衛私ニ其無謀ノ挙ヲ為サンコトヲ恐レ其間ニ奔走ス、當時手記ノ小冊今尚ホ家ニ存ス

文久三年八月十八日堺町御門ノ變アリ、時ニ藩主八幡宮ニ在リ、操兵衛、安藤・吉田ノ二大夫ト京師ニ在リ、干戈ヲ動スノ勢アルヲ見、操兵衛夜雨ヲ冒シ八幡營ニ馳セ至リ其状ヲ告ク、正方ニ鞭子京ニ入り山岡治左衛門・関藤藤陰・操兵衛之レニ從ヘリ、南門守衛ノ命アリ、尋テ正方ニ褒賜アリ、家臣モ亦賜ヲ受ク、其周旋ノ功ハ操兵衛・斎藤甚右衛門ノ力最モ多キニ居ル

堺町變後因藩・備藩ト議シ長藩・会藩ノ間ニ周旋シ禁闕ヲ守護セント欲シ、操兵衛正方ニ説キ上書幕府ヲ諫メンコト

ヲ請フ、宰臣モ亦其説ヲ同ス、正方操兵衛ヲシテ越前藩ニ詣リ之ヲ謀ラシム、会々藩論分レテ一ナラズ、福山ハ勤王ノ説確乎變セズ、江戸邸ハ幕府ノ説ニ從ヒ動モスレバ輒チ往復弁難ヲ費シ時機ヲ失ハントスルコトアリ、操兵衛宰臣ト相謀リ益尊攘ノ説ヲ固執ス、是ニ於テ操兵衛、関藤藤陰ト謀リ国論ヲ立テ藩士ノ嚮背ヲ定メントシ藤陰ヲシテ論旨ノ帰宿スル所ヲ筆述セシム、之ヲ国是トシ百般ノ事之ニ由テ議ヲ定ム、此時因藩土肥謙蔵策問十則ヲ以テ藩論ノ主義ヲ問フ、操兵衛・関藤藤陰等、宰臣ニ白シ尊攘ノ説ヲ以テ之ニ答フ、此ニ因テ勤王ノ諸藩ト意ヲ通シ力ヲ戮ハスコトヲ得テ、操兵衛・甚左衛門専ラ其事ニ任シ其謀議ヲ以テ任スル者ハ宰臣ハ安藤織馬・山岡治左衛門・吉田助左衛門、顧問ニハ関藤藤陰トス、皆京師ハ幡宮トノ間ニ往復事ヲ謀リ其周旋シテ事ニ幹タルモノハ操兵衛ヲ以テ第一トス

元治元年正月將軍上洛、先是操兵衛公武ノ間ニ周旋シ攘夷実行ノ大策ヲ説キ意見書ヲ一橋公ニ上ル、其説頗ル長シ、今其要綱ノミヲ左ニ掲リ

其時幕論長征ノ議起リ遂ニ福山藩ヲ以テ二番手トナシ出兵ノ命アリ、操兵衛・関藤藤陰、宰臣ニ白シ内訌外患並ビ起ルトキハ王威ヲ損シ国辱ヲ取ル必セリ、奉勅夷ノ急務一日モ緩フスベカラサルノ旨意ヲ以テセントセシモ期已ニ迫リ事遂ニ寢ム

同年正月十五日將軍入朝藩主之ニ從ヒ八幡宮ヲ發シ京ニ入ル、操兵衛扈從シテ左右ニアリ、時ニ諸藩有志ノ志ト私ニ謀ル所アリ、速ニ王命ヲ行ハントヲ論シ幕府ノ緩慢ヲ諫ント欲シ尾越二藩ニ往來シ其意ヲ通ス

同年七月長藩三老臣益田右衛門介・福原越後・国司信濃大兵ヲ引キ山崎・伏見・嵯峨ニ屯ス、京師戒嚴時ニ飛撤四集戰將ニ起ラントス、時ニ長藩亦タ撤ヲ伝ヘ会藩ヲ洛外ニ放逐スベシ、我等姦臣ヲ誅セント欲スト、藩主急ニ操兵衛ヲシテ上京セシメ山岡治左衛門・斎藤甚左衛門ト共ニ各所ノ營ニ赴キ入説セシム、十七日操兵衛伏見ニ至リ刺ヲ長邸ニ通ス、福原越後病テ褥ニ在リ、出テ面セズ、側用人根村左門出迎ヘ命ヲ伝ヘ入説書ヲ与フ、反覆熟読シ操兵衛ノ討論

各理ヲ尽シ辞氣愿款ナルニ感シ落涙數行、内ニ入り越後ト謀リ又出テ曰ク、弊藩尊藩ト旧誼アルニ非ラス、縁親アルニ非ラス、皇國ノ為メ力ヲ尽ス、如此大膳父子感佩ニ堪ヘサラン云々、胸襟ヲ開キ談論時ヲ移スモ要領ヲ得ス、晡ニ及ンテ退ク、其入説書ハ卷末ニ附ス

慶応元年乙丑八月内諭アリ、致仕ス、是ヨリ先キ操兵衛京師ニ於テ閣老阿部豊後守ト大ニ攘夷ノ義ヲ論シ幕府ノ因循ヲ刺付シ、又水戸・因備芸等諸藩ト相結託、皇威ヲ振興セントシ大ニ幕府ノ忌諱ニ触ル、閣老阿部豊後守、操兵衛ヲ除カント欲シ一日吾藩執政渡辺大助ヲ呼ビ酒間白鞘短刀ニ大森操兵衛ト書シタルモノヲ大助ヘ授ク、操兵衛ニ屠腹ヲ勸メヨトノ意ヲ諷セリ、大助遽ニ其意ニ応シ難キヲ以テ陽醉シテ退ク、翌朝豊後守其臣梅村角兵衛ヲ以テ前夜ノ言内論ニ依リ醉言ナリ其刀ヲ返スベシト言ハシム、大助之ヲ返ス、當時幕府ノ致仕ヲ命セラレタルモノハ執政ニテ山岡治左衛門・安藤織馬・吉田助左衛門、用人ニテ斎藤甚右衛門、監察ニテ大森操兵衛ノ五人ナリ、五人既ニ蟄居スト雖トモ

悒々樂マズ、陰ニ相会シ時機ヲ窺ヒ志ヲ行ハント欲ス、藩主幼年ト雖モ数々之ヲ慰藉シ機ヲ見テ再用セント欲ス慶応二年正月元日操兵衛剃髮シテ遠炊ト改メ閑適日ヲ陟ルノ中、私ニ海防ノ策ヲ講シ意ヲ詩篇ニ寓シ志士ト贈答シテ益々其志ヲ固フス

明治元年戊辰正月九日長兵来リ、福山ヲ襲フ、老臣以下勤王ノ意ヲ述ヘ和ヲ議シ事平ク、翌日薩兵軀津ニ到ルモ亦同シ、当時応接ノ容易ニ局ヲ結ヒシハ蓋シ操兵衛・藤陰嘗テ国論ヲ定メタルヲ以テナリ

明治三年操兵衛藩ノ少参事ニ任セラル、操兵衛夙ニ蝦夷開拓ノ志ヲ抱ク、東京ニ在リ権大参事三浦義建ト相議シ蝦夷地開拓ヲ官ニ請ヒ聴サル、時ニ藩ノ會計ヲ総フルモノ財本匱乏ナルヲ以テ異議スルモノ多シ、操兵衛其持論ヲ書シテ之ニ贈ル、其稿ノ写シ卷末ニ附ス

操兵衛水戸・会津ノ諸士ニ接スルニツキ詩ヲ賦ス、其詩ニ曰ク、鬢上光陰未帶霜、一身自許北方強、近来常奥多儔侶、更鼓平生鉄石腸、白川藩高松左吉ニ示ス詩ニ曰ク、廿万山

河起五千、東西并立儼人烟、尽忠報国非他日、天步艱難癸災年、嘗テ佩刀ヲ咏シテ曰、海上已看恣虎狼、邦人豈尽唱勤王、十年磨礪終無用、慙愧猶三尺霜一日、斎藤素軒ノ福山ニ帰ヲ送ル歌ニ曰ク、登々滿留毛、扁留裳同志、君農多女、津具須誠農、保加那加理計利、備前岡山藩士江見某・河合某將ニ其国ニ還ントス、詩ヲ以テ之ヲ餞ス、曰ク、大樹方朝覲、至尊勅意新、十年磨利劍、今日絶通津、奮戰誰為岳、守城唯有巡、從來辱齒国、莫使霄雲噴、其志詩篇ニ見ハ、モノ数卷アリ

右国事ニ関スル事蹟手記ノ秘録奉幕始末家伝等ノ書ニ因リ編述スル所ニシテ外ニ諸藩士ト往復セル書柬多ク家ニ蔵メリ

- 一 浪花城工入御ノ事
- 一 権力併有之御方御輔佐之事
- 一 兵庫初海岸諸侯御固メ之事
- 一 京詰之諸侯皆帰国之事

一 浪花海口砲台之事

一 諸侯之祿高二応シ実備期ヲ立嚴シク御催促之事

曰砲 曰艦 曰穀 曰兵 曰人戈

一出交易之事

一 居交易额数之事

一 航海之事

一 上下分利之事

大森操兵衛

此度推参拝顔相願候儀別儀ニモ無之、主人主計頭当今之形勢ニ心配乍不及皇国之御為筋卜存込、態々私へ申付拝顔愚意為相述候事ニ御座候、右旨趣ハ今般伏見并山崎・嵯峨辺へ御多人数屯集乍失敬其御心意恐察仕候ニ、昨秋来攘夷之叡念或ハ御撓被遊候儀ハ有御座間敷哉、元来之叡念何卒一途ニ御持張被遊度、且七卿并君侯御父子様勅勘御融解相成候様御愁訴之御事ト奉存候、此度之儀ハ実ニ皇位之御榮辱幕府ノ御盛衰分判可仕ト悲衰之余リ急速上京推参為仕候、

寡君哀情之趣不悪御聞取可被下候、私共身分不忍言事ニ御座候得共、幕府実ニ勅旨御遵奉之事跡墓々敷相見へ不申候ヨリ人心疑惑東西紛擾之次第、御譜代如弊藩モ右様不相成様輔佐可仕筈之所不行届候段愧入申候、乍去幕府ト安危存止ヲ与ニ可致之分際是迄モ建議イタシ候儀モ御座候得共、此上是非々々幕府攘夷之御成功迅速相顕候様主計頭為名代重役之者急速出府建言為仕候、最初ヨリ攘夷之説ハ聊動揺不仕候得共、諸事手後レ微力旁残念之事共ニ御座候、尊藩之儀ハ洞春公朝廷へ格別之御勤勞被為存候以来之儀世上万人承知仕罷在、近来外夷入寇以後尊攘之正義純乎確然御据リ被為在、今以海内偷安姑息多キ中ニ尊藩ハ農商婦女ニ至迄敵愾之氣如烈火万死一生、是非々々掃攘御成功叡慮貫徹国体相立候様可被成卜之御鋭意誠ニ以感激敬服至極ニ御座候、斯御大業之御抱負有之非常之尊藩ニ被為在候間、非常之忘言失敬之鄙説或ハ御採用モ可有之歟ト申上試候、抑此度之御挙動御忠憤御愁訴之御体裁ニ無之乍失敬要君之姿ニ似寄申候間、是ニ而ハ假令ヒ御衷情之通朝廷御聞届相成候

其後來士君子之公論如何有之哉、皇朝ニ而ハ藤原百川執奏四十余日不退、漢上ニテハ申包胥乞救七日哀哭致候等之類モ有之、御名家大藩之事被成方次第ニ而ハ貴所様御一人御愁訴被成候共、天威被為齊御儀無之トハ難申ケ様之御所為ニ御座候ハ、御名義御正敷、昨年御分家讚岐守様御初メ勅命ヲ被重候而堺町御門ヲ穩ニ御引取御座候ト前後符合天下ノ名節ヲ磨キ候志士如何程歟敬服可仕、然ルニ右様御軍装ヲ以大勢輦下近ク御詰掛御座候ハ実ニ名門尊藩ノ御為ニ甚以相惜候事ニ御座候、勿論争乱ニハ相成申間敷候得共、既ニ被為惱宸襟候御事ト奉恐察候、若万々一争乱ニモ相成鳳輦何レエカ被為避候様之御事ニモ候ヘハ、海内之紛擾此時ヨリ始リ尊藩尊生之御美名或ハ可被為損哉モ難計、且争乱ト相成候ヘハ御勝利御不利ニ不拘明日ニモ夷賊掃攘之為ニ不死輩蕭牆之同志撃ニ身命ヲ抛皇国許多之勇士ヲ失ヒ可惜之至、其間ニ万一隱謀抱志罷在候者有之ハ他日我志成就之基父之利ヲ可得ト傍觀冷笑可致、詰リ夷賊之為ニ吾忠勇義士ヲ驅ル道理ニ当リ実ニ千秋之遺憾ニハ無御座候哉、何卒

此際之処御勘弁所希候、乍去尊藩折角ケ様御出張之上ハ勿論此俣御引取モ被成間敷、御愁訴之処ハ歴々大藩嘸周旋余力モ有之間敷、微力ノ小藩彼是申候迎益モ有之間敷候得共、乍不及兼而其筋ヘ見込申出置候次第モ有之可及丈ケハ周旋可仕心得ニ御座候、兎ニ角当座御堅忍有之、去四日之朝論御遵奉御重役之外ハ一ト先御下坂之儀幾重ニモ御忠告申度儀ニ御座候、左候ヘハ御名分御礼敬之道モ相立人心感服、是ニテ社御志願御真実ニ相貫候方歟ト奉存候、左様相成候ヘハ天朝攘夷不被為撓候ハ不申及、天下内乱無之海内一致神州之頽勢挽回、尊藩之御正義御功業有始有終皇国之美事誠ニ以難有儀ニ御座候、何分共所願ハ一之忍字ニ有之、小不忍則乱大謀、此語御熟考奉希上候、但、是迄御疎遠打過候御間ニ付右様申上候儀、尊藩之御為筋ハ申立候ヘ共関東御譜代之家ニテ全ク徳川家之為メ周旋弁説仕候丈ケノ事ト万一御疑察御座候ハ、夫迄之儀ニ候ヘ共内乱相始リ可申哉否、海内治乱之分界幕府御盛衰之機関ニ御座候ヘハ、素徳川家之御為心配仕死力ヲ尽シ可申ハ身分至当之所ニ御座候、

乍去右云々申上候通眼前ニ外寇ヲ引受御国内同士打誠ニ以失策之至、皇国之御不為尊藩之御不為ト存詰、且攘夷御同論ニ御座候俣交浅言深之戒相顧候ニ違無之、乍失敬無伏蔵裏情申上候事ニ御座候、不惡御諒察可被下候、頓首

阿部主計頭内

大森操兵衛

「大森操兵衛の北海道開拓に関する文章がこのあと続くが、本書掲載の「蝦地之事」74ページの「益堅遠ク在藩ノ諸君…」に始まる文章と同文であるため略す」

故関藤藤陰履歴書草稿

旧福山藩士

故関藤藤陰

関藤藤陰名ハ成章、備中吉浜人関藤政信ノ第四子、初石川氏ヲ唱シ淵蔵ト称ス、中口和介ト称シ後文兵衛ト称ス、晩ニ本姓ニ復シ其号関藤ヲ以テ称ス、天保十四年儒ヲ以テ福山藩主阿部正弘ニ仕へ、明治九年十二月廿九日東京丸山阿

部邸ニ卒ス、関藤人ト為リ温愿淳僕其事業一ニ忠厚ヲ以テ之ヲ貫ク、山陽頼襄ニ從学シカヲ経業ニ肆ニシ文ヲ作ル、叙述ニ長シ又篤ク経済ノ事業ニ志シ、筆述スルモノ亡慮数千紙其著述モ亦多シ、其頼門ニ在リシトキ山陽常ニ其人ト為リヲ称シ家事ヲ幹旋セシメ、同窓推シテ其德望ニ服ス、山陽晩ニ政記ヲ著スヤ論文成テ叙事未ダ完カラス、病革ナルニ及ンデ藤陰ニ遺命シ其稿ヲ継キ筆ヲ執ラシム、其意藤陰ノ才学觀ルベキアル以テスト雖モ、亦タ其能ク闡幽微顯著述ノ本意ヲ体シ勤王ノ志篤キヲ以テナリト、山陽家人ニ告ゲタリト云フ、其師友ノ間ニ重セラレ嘖々其声名ヲ擅ニスルト雖モ、愈自謙退意氣ヲ以テ人ニ及ボサス、其交ル所ノ者天下ノ志士ニシテ往復論難深ク慷慨ノ氣アリ、人ニ接スル忠厚ヲ以テス、人皆曰ク、淵蔵他年志業ヲ成熟スルハ期シテ待ツベキナリト、山陽亦其説ノ誣サルコトヲ信ス、後阿部氏ニ褐ヲ解キシヨリ常ニ君側ニ侍シ拾遺顧明トナリ正弘ノ聴信スル所トナル、嘉永・安政ノ際外患紛起闖外多事人心恟々潰裂ノ勢旦夕ニ迫ル、此時ニ当リ正弘幕府閣老

ノ首席タリ、自ラ其衝ニ当リ社稷ヲ以テ憂トシ寢食ニ暇ナシ、藤陰密ニ大議ニ参シ内正弘ノ志心ヲ贊助シ、外天下ノ形勢ヲ視察シ、添川寛平ト交リ共ニ徳川斉昭ヲ幽愁ニ拔、斉昭二人ノ周旋ヲ悦ハレ茶器ヲ賜フ、添フルニ手書ヲ以テシ一小片紙ニ和寛ノ二儒周旋ノヨシ令満足候、此品拙作ナカラ分チ取り候ニ云々云々ト書セラル、茶器ハ今ハナケレトモ此小片ノ書ハ家ニ蔵ス、藤陰又陋室ノ銘ヲ書シテ賜ハリタルコトアリ、亦家ニ蔵スニ尊王輔幕ノ主義ニ抛リ皇道ヲ扶植シ王室ノ尊嚴ヲ凶ルハ幕府ノ職トスル所ニシテ輔弼ノ任此ヲ以テ枢要トスト、且ツ文武振興兵備充実スル方策ヲ以テシ藩学誠之館ヲ立テ一藩ノ士氣ヲシテ奮起セシム、其時ニ当リ水戸藤田誠之進ニ交結シ互ニ胸襟ヲ開キ国事ヲ討議シ海防ノ策養士ノ方往復其利害得失ヲ講ス、時ニ藤田誠之進寄贈セル書牘アリ、幕府講武所ヲ設クルトキ誠之進藤陰ニ文武修練ノ制ニ方リ胸中ニ蘊スル所ヲ書シ之レヲ贈ル、其書當時機密ニ涉リ忌諱ヲ避ケンガ為メニ泄露セハ老兄ヲ恨ムベシ、若シ他ニ洩ル、コトアレハ老兄ノ罪ナリト

書セリ、之レヲ以テモ亦其藤陰ノ志ヲ助クルノ意知ルヘキ也、其書翰猶家ニ什襲ス、諸藩ノ志士藤陰ト締交セルモノ少ナカラス、就中佐久間象山・桜任三・高橋多一郎・御牧文一郎・江川太郎左エ門等ノ士ト意氣相投シ、深ク皇室ノ式微ヲ嘆シ、正弘ニ説キ王幕ノ間ニ周旋スル所アリ然リ、而シテ正弘ノ举措皆天下ノ人心ニ関スルヲ以テ過激ノ挙ニ出ツルヲ好マス、深ク陰憂ヲ抱キ辞色ニ形ハサス、且ツ外藩ノ私交忌嫌スル所アルヲ以テ深ク之ヲ秘シ、闔藩ノ士ト雖モ知ルモノ鮮シ、後水戸藩加藤木峻叟、藤田誠之進ト同窓ノ人ナリ、藤陰ノ碑文ヲ得テ藤陰ヲ欽慕スル所以ノ原由ヲ書シ、其孫関藤成緒ニ寄示ス、其書中水府ニ関スルモノヲ抄謄シ、藤陰ノ心ヲ王事ニ潜ムルコトノ詳ナルヲ顕ハサントス、因テ左ニ之ヲ抄略ス

己レ峻叟藤陰関藤先生ノ高德ヲ欽慕シテ不能止所以ノモノ他ナシ、既ニ碑文ニモ記載ノ通り吾旧君烈公先年幕府ヨリ受ケシ冤罪ヲ解キ国恥ヲ雪ギシ其原由ヲ審ニスル時ハ、他方諸有志数輩ノ周旋尽力有ルニ因ルト雖モ、就中

石川和介氏ノ忠誠ヨリ施シタル功績半ニ出タリト云フ、抑モ同氏ハ温良忠実ニシテ且ツ沈勇忍耐ノ性質ヲ兼備、虚飾ヲ厭ヒ篤実ヲ旨トシ平常陰徳ヲ好ミ、純全タル君子ナルカ故ニ忠言主君正弘公ニ信容セラル、而已ナラズ、衆望モ帰スル所ナリ、却説ヲ烈公天保十五年十一月改元弘化十一月宗室幕府將軍家慶公ノ治世ナリヨリ嚴重ナル譴責ヲ受ケ、退陰ノ上駒籠別荘ヘ蟄居謹慎ヲ被命、亜々ニ重臣ノ内戸田・藤田等嚴譴蟄居ニ処置ス、是皆内外猜疑ヲ抱ク徒ヨリ釀シ負スル所ナリ、因テ容易ニ此冤ヲ解ク不能、然レトモ君臣官民情実傍觀黙止スルニ不忍、有力者ニ謁シ是レヲ解ントシテ却テ奸臣悪吏ノ為メニ往々災害ニ罹ルモノ不斟、于時他邦ノ有志者はレヲ憂ヒコレヲ愍ム者往々有ルカ中ニ、猶両三輩力ヲ此ニ用ヒ右石川氏ヘ数々此実説ヲ容ル、遂ニ信シ承諾シテ同氏ヨリ家君阿部正弘四品伊勢守侯ノ聴ニ達シ、加之無実ノ禍ナルヲ以テス、家君克ク此ヲ信用ス、尔後解冤ノ策ヲ廻ラスト雖モ衰世ノ廟堂庸吏俗司衆クシテ力ヲ合スル者斟ク、因

テ大樹ノ疑惑難水解コト数年ニ亘ル、然レトモ阿部勢州・石川和介君臣堅忍不措、遂ニ烈公ノ冤罪ヲ解キ水藩ノ国恥ヲ洗雪シテ再度弊政ヲ改革シ、青天白日ニ遭フコトヲ得タルハ阿部閣老ノ処決ニ出ツルト雖、其原因ハ即チ藤陰関藤先生ノ忠実ヨリ公明至当ノ説ヲ以テ君聴ニ充タシメン所以ナリ、如此恩恵ヲ間接ニ受ケタル恩人ノ功績ヲ挙ケン、碑文ナルヲ以テ予レ特ニ珍重スルナリ  
因ニ曰フ、本文石川氏ヘ旧水藩ノ情実ヲ容レ遊説セシ有志不斟内桜任三其最タリ、任三ノ功亦石川氏ニ従伴ス、予此国難ニ当リ数年江戸ニ潜匿シ周旋ノ間、任三ト交誼尤深厚タルヲ以テ両氏ノ交リ其密ナルヲ能ク知レリ、故ニ両氏ノ水戸ニ功績アルヲ詳悉セリ、因テ彼ノ碑文ヲ読ミ殊ニ感覺ヲ興起スルコト余人ニ異ナル所以ナリ、扱旧水戸ノ国難ニ当リ周旋尽力セシ他邦有志諸侯以下士庶其数々十名ニ亘ル、何レモ卓越ノ人物ナリ、是等ノ姓名及周旋ノ順序顛末ノ如キハ別記シテ、以テ后世ニ遺サントス、依テ爰ニ不載云々

藤陰ノ水府ト心ヲ合セシコト、前書加藤木峻叟ノ藤陰ヲ欽  
幕<sup>(註)</sup>シテ一編ノ書ヲ著シ孫成緒ニ贈リタルヲ以テモ亦其當時  
ノ情態<sup>(註)</sup>推シテ知ラレタリ

安政三年同四年ニ再度藩主正弘ノ命ヲ受ケテ西蝦夷ヲ跋涉  
シ、樺太・択捉・得撫ニ至リ風俗ヲ視察シテ帰り、函館ニ  
於テ病ニ罹リ死ニ垂ントシ僅ニ愈ヘテ帰家セリ

文久三年癸亥三月晦日八幡辺警衛ノ命アリ、六月藩主正方  
上京シ藤陰扈從ス、時ニ攘夷ノ論紛起志士京師ニ集ル、藤  
陰自カラ幼主ヲ輔佐シ外天下ノ形勢ヲ察ス、執政安藤織  
馬・吉田助左エ門京ニ在リ、山岡治左エ門八幡ニ留リ往来  
事ヲ謀ルノ際、大議ニ干預<sup>(註)</sup>シ謀議全力ヲ遺サス、時トシテ  
ハ天下ノ志士ニ接シ藩論ヲ諮詢ス、奔走周旋ノ任ハ他ニ其  
人アルヲ以テ自ラ輔翼ノ任ヲ負ヒ、幼主ヲシテ正弘ノ志ヲ  
行ハシメント欲ス、是ニ於テ藤陰国論ノ帰宿スル所ヲ論シ  
一編ノ意見書ヲ著シ、其嚮背ヲ定メ藩政ノ目的ヲ立ツ、今  
之ヲ左ニ臚録ス

人道ハ五倫ナリ、人ノ人タル所以ハ人倫ノ道ヲ尽ス故ナ

リ、而シテ君臣ハ人倫ノ最大ナル者ナレバ、君臣明分上  
ニ於テ誤認ルコトアリテハ人ニ非ラサルナリ、此レ人ノ  
講究磨礪スベキ天下學問上第一ノ大綱領ナリ、今徳川氏  
譜代諸侯ノ分上ニ於テ論スレハ、率土之濱無非王臣ナレ  
バ固ヨリ王臣中ノ人ナリ、且世々官爵ヲ受レハ固ヨリ天  
朝ノ臣ナ<sup>(註)</sup>、而シテ先祖以来累代徳川氏へ附属シ追々食邑  
封土ヲ増給ハリ、他ノ諸侯ト比肩スルニ至レハ君臣ノ情  
永久失フ可カラス、覆育ノ恩永世報スベキハ勿論ナリ、  
右ノ国体ナレハ徳川氏ノ家臣ヨリ身ヲ起シタリト雖モ天  
朝ノ倍臣ト云フベキ理ナシ、況ンヤ王政復古国体一變諸  
侯内外ノ別ナク天朝ノ直隸トナリタレハ、今ハ論ナク王  
臣ノ列ナリ、サレトモ之徳川家人ノ恩義此ニ因テ絶ユル  
ト云フ理ナク、輔佐報答ノ情千古癡替セズ、情ノ在ル所  
ハ義モ其中ニ在リ、然レバ天朝ハ現在ノ君ニシテ徳川氏  
ハ旧恩主也、夫レ君臣名義ハ万古不易ノ定理ナル故ニ、  
我レ天朝ノ命ヲ奉シ拮据鞅掌シ国家ヲ裨益スルコトアル  
ハ、我カ分上ノ義ニシテ徳川氏此ヲ製肘スルコトヲ得ス、

独り製肘セザルノミナラズ喜悅セラル、筈ナリ、又徳川  
 ノ旧恩ヲ忘レズ左右弥縫其義ヲ装順シ其悪ヲ匡救スルハ、  
 勲旧臣子情実ノ有ルヘキ所ニシテ天朝之レヲ離間セラル  
 ヘキノ理ナシ、独り離間シ賜ハザルノミナラス歡感モア  
 ルベキナリ、忠臣ヲ孝子ノ門ニ求ムル義ニシテ親ニ孝ナ  
 ル者ハ必君ニ忠ヲ尽ス、徳川旧恩ヲ忘レサル程ノ者ハ必  
 ス天朝ニ事フルコトモ厚キナリ、畢竟君臣名義ヲ自任ス  
 ルヨリシテ此事迹ニ及ブベキナリ、今我天朝ヘ対シ毫髮  
 モ忠節ヲ欠カサルハ勿論ニシテ、徳川氏ニ向テ君臣名大  
 義ノ上ニ聊カ闕典アラセラレマジク、皇国ヲ維持シ玉ヘ  
 ト百万勸進スルハ当然ノ理ニシテ徳川氏ノ恩ニ報ズル第  
 一ノ事ナルベシ、且又徳川ト我ト比肩ノ列ニ連ルハ之君  
 臣ノ分際如何ニモ不可忍事ナレトモ、夫ニ付我一格下ル  
 ト云フ理ナシ、強テ下レバ朝廷ノ官爵ヲ輕ンジ徳川氏取  
 立ノ旧恩ニ無キ敬礼ヲ尽ニ似テ却テ尽サザルニスル也、  
 故ニ安ンジ難キ所ヲ忍ブノカヲ旧恩ニ報イント図ル至情  
 ヘ持越シ猶十倍廿倍モ尽力スベシ、徹上徹下各我カ分ノ

遭遇スル所ニ就キテ講究担当シ、己レモ勉メ人ニモ勉メ  
 サスベキハ君臣名義ノ四字人道ノ大節人ノ人タル所以ナ  
 ルベシ、

右ノ如ク我レ天朝対シ臣節ヲ竭スハ理ノ当然ナリ、又徳  
 川氏ノ恩ヲ忘レズ心力ノ限り忠尽ヲ致スハ至情ノ所在ニ  
 シテ亦事理当然ノ儀ナリ、天下無事天朝徳川ノ睦キ上ハ  
 如此ニシテ路岐ニ迷乱スル事無カルベシ、若シ世乱レ万  
 一天朝徳川氏ノ間ニ干戈紛擾ノ変アルニ至ラバ進退殆ド  
 究スルニ似タリ、然レトモ守ル所ハ君臣ノ名分ナレハ戎  
 服不着百万徳川氏ヲ諫争シ天朝ヘ歎願シ、必ス死力以テ  
 其間ニ周旋シ無事ヲ謀ルノ外ナシ、即チ人倫ノ大節君臣  
 ノ名分ヲ終始固執スルナリ、此ニ因テ封土ヲ亡失スル等  
 固ヨリ辞セザル所ナリ

藤陰ノ国論主義書一タビ出テシヨリ藩論確定シテ復々揺カ  
 スベカラズ、藩士抗疏開陳スル所ノ旨意皆勤王ノ大義二本  
 ツキ固習ヲ洗刷シ正義ヲ墨守ス、是ヲ以テ文武振興士氣頓  
 ニ奮ヒ藩俗大ニ変シ、諸藩ニ応接スルニ其論ヲ一ニシ譜代

諸侯ニ遊説シ、幕府ヲ諫メ奉勅国威ヲ振ハンコトヲ務ム、長州征討ノ役福山藩兵出軍ノ命アリ、藤陰大ニ之レヲ憂ヒ宰臣ニ説キ内訌ノ害ヲ陳ヘ諫幕止討ノ上書セント欲ス、其大意ニ曰ク、今ヤ勅命下リ攘夷ノ師海防ノ策之ヨリ急ナルハナシ、内訌一タヒ起ラバ杼軸索キ兵内ニ斃レ何ノ益力之レアラン、此師王命ニ出ツルト雖或ハ幕府ノ私怨ノ挟ムル所アラン乎、今ニ及ンテ諫疏ヲ上ラスンバ反テ忠ニアラズト、宰臣モ其議ヲ同フスルヲ以テ藤陰書ヲ修メ文既ニ成リ、幕府頗ニ嚴命ヲ以テ攻戦ノ期ヲ促シテ其事遂ニ寢ム、藤陰正方ニ從ヒ石州ニ広島ニ赴キ軍ノ進退戦期ノ緩急ハ皆ナ幕議ニ与レリ、時ニ正方病テ軍中ニ在リ、藤陰ノ辛苦知ルベキナリ

明治元年長門藩ノ兵来リ、福山ヲ攻ム時ニ正方卒シ世子ナシ、藩議紛紜時ニ長州兵先ツ戦書城中ニ投シ曰ク、上国ニ於テ徳川守衛ノ兵戦ヲ挑ミ官軍ニ抗シ王政復古ヲ妨ク、即チ朝敵ナリ、貴藩徳川氏ト君臣ノ義アレハ存亡ヲ共ニセサル可カラズ、乃チ勤王ノ諸藩共ニ軍ヲ率ヒ其罪ヲ問ハント

ス、藤陰宰相ト議シ之ニ答テ曰ク、吾藩モ亦勤王ノ臣ナリ、一彈丸ト雖モ勤王ノ軍ニ放ツコト能ハズ、徳川氏ハ主家ナレトモ參河(三)以来ノ恩主ニシテ君臣ノ義ニ於テハ自ラ説アルナリト、時ニ参政監察等各之レヲ路ニ邀ヘ来攻ノ意ヲ問ハント欲ス、藤陰吉田水山ト大手門ヲ出テ彈丸雨下ノ間ニ含笑闊歩シ、其軍ニ到リ隊長ニ説キ遂ニ之レヲ城内ニ迎ヘ答問難弁ス、長州隊長謂テ曰ク、大義親ヲ滅シ朝命ヲ遵奉スルノ証書ヲ出スベシト、諸老臣・藤陰・三浦義建列座シ藩論ヲ陳述シテ曰ク、徳川氏ヲ討ツハ情ノ忍ヒザル所ナリ、然レトモ王命固ヨリ背クベキニアラズ、死ヲ以テ幕府ヲ諫メ王命ニ遵ハシムベシ、議遂ニ決シ其証書ヲ与フ、長兵退ク後使命相望ミ尊攘ノ志ヲ同フス、後阿部正桓ニ東京ニ從ヒ一日モ寧処スルナク、老テ益勤シテ闔藩之レヲ矜式セリ、阿部家ノ為メニ家規ヲ作り以テ其家制ヲ定ム、明治九年十月廿九日阿部邸ニ死ス、年七十、藤陰雪日客ト旧時ヲ話シ、壁間掲ル所ノ書幅源烈公ノ遺墨ニ係ル感アリ、同ク賦ス、主公禁銅恨難消、不脱腰間日本刀、豈唯衝雪桜門士、

一死陳情幾貫高、又藩主正弘（阿部伊勢守）ノ墓ヲ展シ詩ヲ賦ス、遺臣今日薦蘩蘋、憶嘗先公秉国鈞、致士一籠多少葉、擢賢碩果老成人、時宜海内開三港、時勢天涯作比隣、謝罪上疏弗聽、俛教後世見維新、又感ヲ書シ曰ク、八紘世運逐年遷、可患西辺患北辺、高臥舟中皆敵国、上天勿使我安眠、藤陰志想詩篇ノ中ニ寓スル所ノモノ家ニ蔵ス、亡慮数卷アリ、今茲ニ数首ヲ載スノミ

故山岡八十郎履歴書草稿

旧福山藩士

文化十三年二月廿三日生

故山岡八十郎

右八十郎次功世ニ禄百二十石ヲ食ミ、正桓祖父阿部伊勢守正弘時代監察郡宰ヲ経テ度支ノ職ニ進轉シ、甲寅ノ春室ヲ举而備後福山ヨリ江戸ノ藩邸本郷丸山ニ移住ス、次功人ト為リ質慧ニシテ気概アリ、父母ニ孝、兄弟・親戚ニ厚ク其嘗テ父喪ニナルヤ官務止ムヲ得サルノ外ハ喪服ヲ脱セズ、毎日其墓ヲ拝展シ三年間一日ノ如シ、其仕途ニ在ル勤劳身

ヲ惜マス、官事ヲ視ル家事ノ如シ、而テ人ト談話近世外国形勢、或ハ我邦ノ憂ヲ為ス事ニ及フヤ慨然奮興既ニ親シク其事ヲ見ル者ノ如シ、東邸移住ノ前年癸丑墨夷ノ浦賀ニ闖入スルヤ其統領書翰ヲ持来リ、直ニ品川ニ至リ幕府ニ呈セントス、浦賀ノ吏国法ヲ諭示シ長崎ニ廻ラシメントスレモ（下脱カ）承服セス、幕府衆議紛紜シ其帰宿スル節、我邦昇平久シク人心游惰武備廢弛セル故ニ武断輕忽ニ砲撃セハ後患測リ難ク、彼縦ヒ窺竄呑噬ノ意アルモ表面和好親睦ヲ唱フル者ナレハ直ニ入寇ノ賊トモ目シ難シ、姑ク羞ヲ忍ヒ平穩ニ応接シ速力ニ退帆セシメ徐々ト十全ノ策ヲ建ルニ若カストナリ、正弘殊ニ悲憤慙悔シ曰、近年外夷我邦ヲ窺ヒ漸次逼迫スル時勢曾テ知ラサルニ非ス、而テ余淺見無識叨ニ幕府首輔ノ地ニ在テ予メ今日アルヲ洞見スル能ハス、今徒ラニ臍ヲ噬ム、死シテ余罪アリ、起テ水戸前中納言ヲ駒籠邸ニ訪ヒ咨謀議時ヲ移シテ還ル、既ニシテ幕議一決、浦賀奉行ヲシテ彼書翰ヲ受取シメ、我力返答ノ如キハ明年六月再渡シ来取ルヲ期ス、夷艦既ニ去ル、夷書ヲ翻訳シ天下ニ布告、諸侯

列藩ヲシテ待夷ノ策ヲ献白セシム、七月三日幕旨水戸中納言執政ト同シク海防事務ヲ謀画スヘキヲ命セラル、越テ二日將軍家親シク前中納言ヲ召シ優旨託嘱セラル、是ヨリ前(言脱)中納日々登營諸政一新セントス、而テ是日將軍家不諱ノ事アリ、其前十余日魯夷長崎ニ入港所乞互市ノミナラス蝦夷疆界ヲ裁定セントス、於是幕吏魯夷ノ応接ニ赴ク者アリ、北地査檢ヲ命セラル者アリ、而テ新將軍宣下ノ大礼アリ、次功福山ニ在テ此等形勢ヲ聞キ曰、嗚呼国家多事海内騷然ノ時運トナレリ、頼ムニ前中納言公海防ノ事ヲ指揮シ玉ヒ、且幕府天下ニ布令シ玉フ旨、及ヒ我藩文武学校新建アリテ吾公手書一藩ニ令シ玉フ旨、明年墨夷再渡ストモ勝敗ハ天ニ在リ、国辱ヲ受ルノ恐レナカラン、此レ国家ノ慶事ナリ、既ニシテ改曆甲寅歳トナリ開春纔カニ旬日ヲ経シニ墨夷再ヒ渡来ス、客冬正弘福山ニ令セシハ、明年墨夷渡来応接ノ間髪ヲ容レス即時戦闘ニ及フモ知ルヘカラス、来春二月兵隊若干府下ニ来屯スヘシト、然シテ今墨夷期約ニ先ツテ来リシ故福山ニ飛報シ、客冬所令ノ兵昼夜兼程馳来ラシ

ム、時ニ次功東徙セントスルニ発程ノ日猶遠シ、藩兵急足東下スルヲ見テ府下ノ事变懸念ニ堪ヘス、因テ藩庁ニ詣リ願ハクハ家室ニ先ツテ東行セント乞フ、藩庁其職任ニ非ルヲ以テ許サス、尋テ発程府下ニ到着スルハ三月朔日ナリ、居ル二日ニシテ林大学頭・井戸対馬守墨夷使節彼理ト応接、結局横浜ニ於テ約条書ヲ交換ス、下田・箱館開港、薪水・食料・欠乏物品ヲ与ヘ、下田七里四方箱館五里四方游歩ヲ許シ、十八日以後兩國共ニ不便利ノ事アレハ下田ニ官吏ヲ置ク事モアルヘキ等是ナリ、此約条交換前数日大学頭神奈川ヨリ馳還リ登營其草ヲ進ム、前中納言怒テ曰、如此ハ前日命スル所ニ負ク、大学頭勢止ムヲ得サル状ヲ分疏ス、前中納言曰、果テ然ラハ拒絕シ一戦センノミ、大学頭進対曰、戦ニ決シ玉ハ、臣等応接亦為シ易シ、一刀両断罪ヲ諸公ニ獲ルノ事ナシ、但恐ル、一旦兵ヲ接セハ沿海都邑兵備無キノ地比々粉濫、而テ海内沸乱再ヒ收拾スヘカラス、且一戦シ敗衄セハ和議ノ説起ルハ必定ナリ、戦敗レテ和セハ和戦ノ權彼レニ帰ス、豈今日ノ条約ニシテ止マンヤ、前中納言

黙而不答、諸執政亦無言、一座遂ニ勉メテ之ヲ諾ス、次功東邸ニ移ルヨリシテ官吏応接毎ニ夷人ニ致サレ夷人ヲ致ス能サルヲ聞テ憤激已マス、脱走夷艦ニ入り夷酋ヲ刺サント欲スルノ念アリ、親友其謀ヲ知ル者切諫シテ止ム、一儒員祇役東邸ニ在、海防軍議ニ関係スル者アリ、次功旧好ノ故ヲ以テ毎ニ諸囑シテ曰、幕府若シ敢死ノ士ヲ募リ夷虜ニ遣ハサル等ノ事アラハ必ス僕ヲ推挙セラレヨト、四月五日正弘ニ上書ス、其略ニ曰、仄カニ拝聞ス、官家墨夷ト和親ヲ結ハセラレ彼レ夷産ノ方物ヲ献呈シ官家米絹酒鶏等ヲ賜ヒ彼此懇厚太タ至ルトカ、且彼神奈川ニ碇泊、又下田ニ滞留、其間上陸游歩拳動放肆我邦ヲ輕蔑スル事甚シ、而シテ吏人制止セス其為ス所ニ任ス、畢竟官家平穩無事ヲ務メ玉フ故ニ彼忌憚顧慮スル所ナクシテ此レニ及フノミ、前年幕府天下ニ布令シ玉フニ及ヒ吾公手書ヲ一藩臣子ニ賜フ、毫髮モ国体ヲ汚スマシクトノ旨今年ニ至テ如此ハ何故ナルヤ、況彼ノ禽獸醜虜ノ猷スル汚穢ノ物品ヲ官家廷上ニ排列シ玉ヒ、吾藩邸ニテモ採納在ラセラルニ至ル、国体毫髮ノ汚ノミナ

ランヤ、実ニ万世ノ醜辱ナリ、但武備未タ整ハサルヲ以テ一時権宜ノ策ニテ戦期ヲ延ハシ玉フ意ニ在ラセルト、然ルニ昨年ヨリシテ今年ノ光景ヲ拝察スルニ此後二年ニ武備ノ整フヘキヲ覺ヘス、其内墨夷ノミナナラス諸蛮夷陸續渡来セハ官吏多事応接ニ遑ナク、諸侯列藩戒嚴警備ニ奔命疲弊、而シテ民間困窮内乱蜂起セハ争テカ決戦スヘキノ備整ハンヤ、而シテ外夷ハ我接待ノ寛裕ニ乗シ跋扈増長シ、無飽ノ欲ヲ以テ真ノ貿易ヲ求メ、府下ニ商館ヲ開キ及ヒ邪教ヲ我邦ニ広メン等ヲ乞フニ至タルヘシ、ソレトテモ武備整ハサル内ハ皆允許シ玉フヤ、要スルニ国体ヲ執テ戦フハ古来ノ正典、和ヲ講スルハ一時ノ權策々必シモ後効アラス、正典ニ従ヘハ敗ルトモ天下後世ニ辞アリ、且今ヨリシテ年々外夷来リ親ム、邦人漸々慣習シ国辱ノ何物タルヲ知ラサル様ニ移ルヘク、然ル時ハ決戦ノ期ハ遂ニ得ヘカラス、只今ノ内ナリセハ人猶心ヲ国体ニ在ス、而テ水戸前中納言公ノ如キモ在ラセラレ、大小諸侯麾下ノ人々其他(標之)慨勇敢ノ士モ多カルヘシ、願ハクハ断然決集シ玉ヒ今日ヨリ我国俗ノ外

交ヲ喜ハサルヲ以テ謝絶、米一粒肉一片モ遣ハサレス、若  
 彼レ怒テ彼レヨリ兵端ヲ開カハ応シテ決戦恐レナカラン、  
 將軍家始奉リ吾公諸執政以下天下諸侯凡ソ皇国ノ臣子タル  
 者ハ、其身ノ有ラン限り奮戦シテ国辱ヲ後世ニ遺ス事ノ無  
 カランコトヲ冀フ云々、次功ノ所述略此ノ如シ、正弘其意  
 節ヲ感賞シ其説嘉納スル所モ多ケレトモ今採用スル能ハス、  
 正弘前年夷書ヲ受納セシ以来胸懷鬱々樂マス、今春神奈川  
 約条ノ結局スルヤ断然決心窃カニ誓フ、去年古来国典ニ背  
 キタレトモ今年償フ所アラント欲スルニ然ル能スシテ事已  
 ニ如此ニ至ル、今ヨリシテ何ノ面目アリテ人ノ本朝ニ立タ  
 シヤ、近日墨夷神奈川ヲ退帆セハ府朝ノ間暇ヲ窺ヒ職ヲ辞  
 シ、此末何レ夷舶ト紛擾ノ事アルヘケレハ、其時ニ在テ一  
 方要地警衛ノ任ニ居リ官軍先鋒トナリ奮戦決死以テ前恥ヲ  
 償フヘシ、二三老臣ニ謀ル、皆曰、然ルヘシ、四月十日ニ  
 至リ書ヲ執政用番ニ達シ罪ヲ鳴シ免職ヲ乞フ、而テ同列肯  
 セス、出勤ヲ促シ止マス、將軍家モ允セラレス、時ニ京都  
 所司代ヨリ飛報アリシニ、去ル六日皇居罹災至尊准后始奉

リ加茂ニ遷幸シ玉ヒ、尋テ聖護院宮ニ転シ御幸在ラセラル  
 トノ事ニテ閣老参政正弘ヲ詰責ス、此一大凶事滿朝恐悚  
 勉勤勞スヘキノ時ナルニ一身名節ニ託シ強テ免職ヲ乞フ、  
 臣子国ヲ憂フルノ本意ナルヘキヤト、將軍家内使ヲ發シ来  
 テ論シテ曰、外夷ノ事独正弘一人ノ罪ニ非ス云々速ニ出勤  
 スヘシ、正弘辞スルニ辞ナク已ムヲ得ス出勤、十六日正弘  
 皇居新築総奉行ヲ命セラル、正弘曰、臣国政ヲ輔テ国体ヲ  
 維持スル能ハス、今其罪ヲ宥メラレ及テ此ノ榮命ヲ蒙ル、  
 感位勉メサルヘケンヤ、是ニ於テ正弘奮然王事ニ軼掌スル  
 ノ志ヲ發ス、而テ海防事件成就スル所遅緩ナリ易ク一時權  
 宜ノ策挽回ノ期未タトシ得サルヲ歎ス、今纔ニ成就セル者  
 品川砲台ヲ首トシ大森村ノ演砲、越中島ノ銃練、各其場ヲ  
 開キ洋製軍艦ニ倣ヒ浦賀鳳凰丸、佃島ニ朝日丸ノ製造アレ  
 トモ武備ノ整修ハ何レノ日ニ在ルヘキヤ、次功論スル所ノ  
 如キ者アルハ正弘常ニ是ヲ掛念セリ、次功正弘ノ事務百端  
 ヲ一身ニ纏ヒ終始区画苦慮セルヲ知ラサルニ非ス、毎々謂  
 フ、君辱ラルレハ臣死スルノ道理、我公天下ノ大事ヲ身ニ

任セラレ憂慮シ玉フナレハ臣子タル者高枕安臥スヘキ者ニ非スト、而テ次功一藩度支ノ官ニ在ルノミニテ天下形勢如何カ移リ居ルヤ知ラス、知ラサルヨリシテ益其憂ニ堪ヘサルノ状アリ、一日監察局ニ至リ正弘謁見上言セン事ヲ乞フ、監察曰、子ノ上言セントスル者職掌ノ事ナリヤ、然ラハ會計ヲ管スル執政ナル者アラスヤ、次功曰、職掌ノ事ニ非ス、国家ノ為メニ上陳セント欲スル事アリ、藩制執政・参政・監察及ヒ近臣ノ外平日謁見セス、故ニ事例外ニ係ル、監察討議執政ニ告ク、往復ノ間数日ヲ経而テ監察是ヲ上達ス、正弘即時ニ允ス、而テタマノ中暑ヲ患フ、曰疾癒ヘハ引見スヘシト、既ニシテ正弘復常次功ヲ召ス、時ニ次功頭瘡ヲ患ヒ出勤スルヲ得ス、屢々医ニ謂テ曰、此瘡他日再発スルモ可ナリ、願クハ速ニ一癒セシメヨ、医曰、此レ粗暴ノ説ナリ、然事ヲ為スヘカラス、蓋次功謁見ニ汲々一日遷延スルニ堪ヘス、故ニ如此、而シテ血氣益上衛瘡益癒ヘス、膿汁淋漓臭氣堪難シ、蓋是ニ於テ決心シテ謂フ、此姿ニテハ謁見ノ日知ルヘカラス、生テ進諫直言センヨリ寧ロ死シ

テ遺表ヲ上ル、我公或ハ英斷シ玉フヘシト、遂ニ上書ヲ遺シ屠腹シテ死ス、実ニ甲寅八月廿四日享年三十九歳ナリ、遺表旨趣四月中上書ト大意同シ、而テ歲月移ルニ從ヒ人心從テ弛ミ拒絶掃攘ノ偉拳遂ニ為スヘカラサルニ至ルヲ惜ムナリ、當時ノ情景死前三日挙家灸治シ俗ニ所謂灸業ニ託シ老母始妻兒婢僕ニ至ル迄ニ酒肴餅菓等十分ニ飲ヲ罄サシム、夜而兒ヲ擁シテ臥ス、嫡男敬太郎十二歳次男簡二八歳、次功平日幼兒ヲ近ツケ玩弄スルコトナシ、而シテ如此皆訣別ノ意ノミ、当日ニ至リ室内ヲ掃除シ、亡父源左衛門次隆ノ書スル朝聞道夕死可也ノ幅及ヒ平日所愛ノ中井竹山寛永鎔仏造鉄ノ詩ヲ書スル者ト兩幅ヲ壁間ニ掲ク、又沐浴シ身ヲ清淨ニス、医之ヲ止ムレトモ聴カス、室ニ入テ長文ヲ手書ス、老母見テ怪ミ問フ、答曰、間ヲ得テ公用ノ事ヲ書スナリ、既ニシテ老母ニ請テ曰、兒疾アリ、久ク宗家ヲ省セス、願クハ一往シ玉ハンヤ、宗家ノ主山岡治左衛門次道ハ次功ノ弟ナリ、老母肯セス、強テ後ニ肯ス、其出ルヤ次功親カラ衣服ヲ周旋シ塵ヲ掃ヒ背ヲ撫シ送テ門外ニ至リ目送

シ其身影ヲ失フニ及テ引還ル、晚際隣家老婆劇場ヨリ帰り来テ戯ニ其状ヲ為ス、次功規見テ拍手シテ和ス、一学友来訪ス、之レニ酒飯ヲ供シ俱ニ飯食ス、未タ去ラス、事ニ託シ辞シ去ラシム、黄昏妻児ヲ宗家ニ差シ老母ヲ迎へ帰ラシム、其出ル亦送テ門ニ至ル、皆訣別ナリ、夜ニ入り一束次道ニ贈ル者敬太郎ヲシテ持往シメ、又一束同僚藤田与一兵衛ニ贈ル者奴ヲシテ持往シム、皆訣別ノ書ナリ、次道読畢ラス、直ニ馳テ来ル、門戸堅鎖シテ入ルヘカラス、側扉ヲ排シテ入ル、次功紅氈上ニ在テ正服上下衣ヲ着シ烏帽子ヲ冒リ左右ヲ袒キ流血四逆拝伏シテ斃、次道疾呼数四既ニ絶セリ、之ヲ熟檢スルニ今朝所掲ノ兩幅前一几ヲ置キ几上ニ遺表及次道及同僚親戚ニ贈ル書ヲ載ス、死者右手短刀ヲ持左腹ヨリ屠リソレヨリ咽喉ヲ貫ク、左手覆フテ額額ニ至ル、其身几上及ヒ兩幅ニ向ヒ拜スル状ヲ為ス、須クシテ与一兵衛来既ニ及ハス、蓋シ絶スルノ際勞動困苦セス、寂然声ナク合壁隣舎知者ナシ、姪大森操兵衛ニ与フル書中詩歌各一首アリ、詩曰、雲海無辺寇、東方不尽憂、君辱臣死、弟在

(可脱方)

母堪由、世卅歲多恩骨、孤忠一劍秋、憤魂朽猶未、期拔賊夷頭、歌ニ曰、イテヨカサ、イテヨカミカサ、テルマ、ニ、エミシニカユル、ヒトシナニセン、座右ニ赤穂義士墓碣ノ形状ヲ横写シ一劍院纔了斯心居士ト記スルアリ、親戚亡骸ヲ香火院ニ塵埋スルニ及ヒ此ノ如クニシテ石ヲ建ツ、其後嗣ニ禄ヲ与フニ及ヒ有司議ス、次功元来謁見ヲ乞ヒ我公病中ニ在ラセラレ疾癒ヘハ召スヘシト約セラレ、既ニ召ス時ニ至ルニ頭瘡ヲ患テ謁見スル事ヲ得ス、謁見ヲ得サルハ己レノ不幸ナリ、然ルヲ憤激シ從來君ニ差上タル身体ヲ顧ミス自僂ニ自殺スルハ狂乱不敬ノ所業ナリ、藩制凡ソ不良ノ死ヲ為ス者ハ禄ノ半ヲ減ス、是レ古典旧例ナレハソレニ從ヒ半減ノ禄ヲ賜テ可ナリ、正弘曰、其跡ハ姑ク置キ其情切迫シテ此ニ至ル、其由テ来ル所ヲ尋究スレハ甚々憐ムヘキ者ナリ、通例狂妄ヲ以テ処置スヘカラス、家禄世襲セシメ減少スル勿レ、是ニ於テ老臣敬太郎ヲ庁事ニ召シ君命ヲ伝曰、亡父八十郎儀逆上及自殺候段、一体御逢相願御聞濟之処当人頭瘡ニテ引込ニ相成御逢時日押移候段ヲ存詰海防之

儀上書ニ認置右及始末候段、全実情切迫之場ヨリ之儀卜深  
被遊御憐察格段之以思召百二十石其俣被下置、次功之自殺

轉末如此

東京阿部家資料 文書編(5)

発行日 二〇一五年(平成二十七年)三月二十七日

編集発行 福山市教育委員会文化課 歴史資料室

福山市霞町一丁目一〇番一号

〒七二〇・〇八一二

TEL〇八四・九三二・七二六四

発行 福山市教育委員会

印刷・製本 かもめいと有限公司